不眠と快眠

精神分析

★第9卷・第1號★昭和16年・1月★

東京精神分析學研究所出版部

マンスフィールド肖像（アン・ライス女史筆）岩倉氏譯參照

不眠と快眠號・内容目次

『精神分析』第九巻・第一號

On the Therapeutics of Insomnia

(Summary of the Commencing Article)

Kenji Ohtski

How to cure the insomnia presupposes the study of the sleeping phenomena at large. There can be found no way, so far as the significance of sleep is not scientifically realized.

For the old medicine the insomnia was beyond its power, just as for the former psychology the essencial nature of sleep was quite inaccessible. It was Freud and Ferenczi that gave first more or less clear notions of the phenomena. Freud said that the sleep is no other than the retrogression to the prenatal condition by meams of with drawing the interest from the outer world. Ferènczi advanced the theory further, found a sexual significance in the sleep, and said that orgasm and sleep are both the hallucinatory ways of retrogression into the womb-phantasy. According to these formulae, we might be allowed to conclude that the insomnia is no other than a kind of neuroses with a sexual inhibition of hysterical character.

Yet, before we give such conclusion, we should be capable of knowing the truth of sleep and sleeplessness, by taking notice more carefully of the relations between the human slumber and the hibernation or aestivation of animals and botanical world. Hibernation aud aestivation are commonly believed, according to biological conceptions, to be the attitude deviced by animals that they might adjust themselves to the want of meals or to the circumstantial conditions of heat or cold. The theory is true so far, indeed; but if one should hold it absolutely, then he may well be accused of his teleological assumption, just as one might be criticized so, if one should insist that the human slumber means solely the will to recover from fatigue,

All creatures on the earth, we dare say, only make use of such circumstances, for the purpose of periodically fulfilling their sleep (death) instinct. This is also, I naturally know, another kind of teleological assumptions, but this assumption of instinctive desire is not purely teleological, but half non-teleologiaal, as the instict is nothing but a detuchment of the blind (non-teleological) force of the whole universe, which ever sleeps and wakes periodically for the purpose Good only knows!

La Resanigo de Sendormeco kaj Dormavideco kaj La Rimedo Trankvile Dormi

Nobuhiro Cuĉija

Oni scias bone, ke la morto similas al la dormo, kaj de pasinteco diras, ke la morto estas la granda dormo, kaj la d rmo estas la malgranda morto. La morto kaj la dormo estas egale traktataj ĉe la punkto, kie korpo fariĝas senaga, kaj oni imagas la staton de la morto pro la psika malprogreseco en la okazo de la d rmo. Sed la morto estas evidente distingita de la dormo. Nome en la okazo de la morto ni psike tute elmalprogresas kaj la organika agado de internaĵoj ankaŭ haltas, dume en la okazo de la dormo ni elaste ekvekiĝas de la psika malprogreso tuj kiam laciĝo seniĝas, kaj dum tiu tempo la agado de internaĵoj ankaŭ ne haltas.

Kaj plue oni devas pensi la morton en la rilato kun la vivo, kaj la dormon kun la vekiĝo. Kaj t al oni povas aserti, ke la paca morto en kiu nenio estas bedaŭrata estas la rekompenco por traviva peno. kaj la trankvila dormo estas la rezultato de kuraĝa batalo dum vekiteco. Nome apl ki la instinkton de la morto kiel la instinkton de individukonservado, kaj realigi la instinkton de la vivo kiel la instinkton de specokonservado estas la vojo atingi al la paca morto, kaj kiam oni pensas tion pri unu tago kiel la viva miniaturo, tiam oni povas aserti, ke streĉiĝanta kuraĝa batalo kaj sana seksovivo aŭ ĝia sublimato estas la sola rimedo trankvile dormi.

Se la realiĝo de la instinkto en vekiteco ne estas sufiĉa, tiam tio estas reve kontentigebla kiel sonĝo en dormado. D-ro Freud deklaris, ke la sonĝo estas la kontentiĝo de volo. En tiu okazo se la superegoo kompromisas kun la egoo kaj subpremas la eson, tiam la eso kontraŭstaras ilin kaj malfac le batalas por defendi la dormon aŭ la psikan malprogreson per la laboro de sonĝo. Tiu ĉi malfacila batalo estas la malbona sonĝo. Kontraŭ tio tia estas la bona sonĝo, ke la superegoo kompromisas kun la eso kaj kontentigi volon kiel sonĝon laŭ la psika malprogreso de la egoo. Tial oni povas diri, ke la bona sonĝo estas psikoza, kaj la malbona sonĝo estas neŭroza. La sendormeco esta la neŭroza dormo kun malbona sonĝo, kaj la dormavideco estas la psikoza dormo kun bona sonĝo. Konsekvence trankvila dormo kaj sana agado faras ambaŭ flankojn, kaj oni povus diri ke vere sanan trankvilan dormon ne akompanas sonĝo. (*Esperantigita de Jukio . noda*)

睡眠の心理と不眠症の治療

大槻憲二

一、小序

神經症候の內では不眠症が數に於いて最も多いと云はれてゐるに拘らず、わが國の醫學界に於いては、私の調べて見た範圍內では、未だ何人もこの問題に就いては明確な理論と方法とを立てゝゐるものはないことを發見していさゝか驚いてゐる次第である。併しながら、分析學界に於いてもまだこの問題に特別の研究を積んでゐるものもないやうに思はれる。外國の分析文獻には一二發見せられるが、不幸にしてそれは私の手許にはない。私自身も嘗て自らこの病症に惱んだこともなく、その患者を取扱つて見た經驗も遺憾ながらないので、私にも今この問題を取扱ふ資格に於いて十分であると呼號するわけでは決してないが、不眠症とて神經症候であるに相違ない以上、他種の神經症候との間に十分な聯關性のあるものであることは云ふまでもないから、種々の患者報告やら、普通醫家の肉體的見地からの所說などを參考にしつゝ、これに分析的見地からの解釋を加へるならば、恐らくは今までの不眠症治療論よりはやゝ要領を得たものになり得るであらうとの希望を以て、こゝに敢て本論を試みることにした次第である。讀者よ、希くば次の論述の不備を許容しつゝ、讀後の批評を供して、次なる機會に於ける筆者の論究への示唆を與へ、その進展を期せしめ給はらむことを…。

二、睡眠現象の生理學的說明

不眠症の正しい療法を確立するためには、睡眠と云ふ現象一般に就いての正しい知識を持つことが先決問題でなければならない。睡眠と云ふ現象は、從來專ら生理學的にのみ論究せられて、心理學的には殆ど問題にせられてゐなかつた。と云ふより

は問題にしようにもその方法が立たなかつたのであらう。たゞ精神分析學のみが、これに對してやゝ理論的説明を加へることが出來たのみであらう。で、先づ生理學的説明を紹介して、次に心理學的(精神分析的)説明の紹介に移り行くことにしよう。

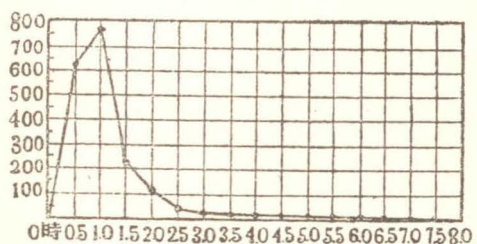
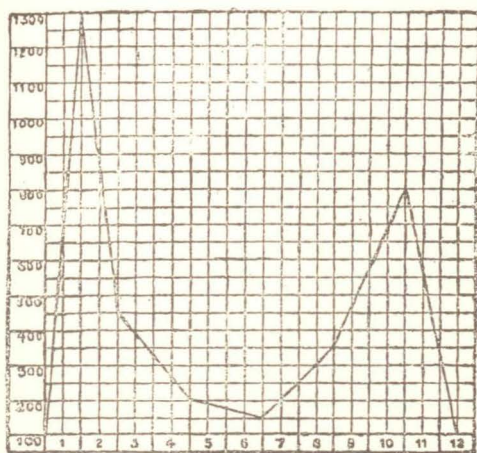
一體に、睡眠と云ふものは肉體的に又は精神的に疲勞した時に心身共に陷つて行く不活潑な狀態であり、この狀態を經過することにより心身共に活力を恢復するのであると定義して見る。これでまづ常識的な見解として申分のない定義であるやうに見えるかも知れない。併し學問的に考へると、それに對していろ〳〵疑問が起きて來る。現に人間は疲勞した時に必ず眠るとは限らないし(極度の疲勞は却つて睡眠の障害となる)、乳兒は別に疲勞させなくとも連りに睡眠する。また疲勞とは何であるかと云ふことが分らない。疲勞と云ふ現象は生理學的にもまだよく説明がつかぬやうである。疲勞とは、疲勞素と云ふ毒素が出來るためであると云ふやうな説明もあるが、その疲勞素とはどう云ふものかの説明は果して十分に屆いてゐるのであらうか。心理學的にはエネルギーの消耗として説明せられるであらうが、この方が説明としては完全に近いやうに思へる。少くとも概念に不明な點がない。假りに疲勞素と云ふものがあるとして、それが睡眠過程に依つて消毒せられると云ふ假定は、これを説明するに一層の困難を伴ふであらう。何となれば、睡眠と休養との生理學的區別を立てることが困難であらうから…。

たゞ睡眠現象に於いては腦の貧血狀態を條件としてゐると云ふ記述は判然としてゐるが、これは原因の説明ではなく現象の條件記述(描寫)に過ぎない。かくて腦貧血と云ふ病的現象と睡眠と云ふ正常なる現象との區別は程度の差で説明はつくが、何故に疲勞したら腦の貧血を來すかと云ふことは分らない。その貧血を來すのは、身體の他の部分に血液が偏在して頭腦の部分に缺乏するやうになるのだと云ふ説明も記述としては疑ひの餘地はないが、睡眠の條件を擧げたゞけであつて原因の指摘ではない。原因の指摘のみが、科學的説明であり得る。現象の單なる條件記述は觀察であるに過ぎない。觀察と知覺とは固より科學に絶對必要であるが、科學の眞の使命と目的とは現象の因果關係の體系的認識であつて、單なる條件記述はその體系的認識のための材料を提供するものに過ぎない。遺憾ながら、睡眠に對する生理學の説明は條件の記述に終始してゐるやうに思はれる。生理學は條件記述以上のことには出られない性質のものであると云ふならば、これは致し方のないことである。なほ、念のために、生理學からの睡眠現象の條件記述を次に更に他の方面に亙つて説明して見よう。(文末附記參照。)

その條件の主なるものは二つあるとせられる。それは、身體全體の神經が鎭まつてゐること、筋肉が弛緩してゐることゝである。これは實は二つではなく、一の現象を二つの面から記述してゐるのだと云ふことが出來よう。更にこれを細かく記述して見ると、眼瞼が閉ぢられ、眼球は上方に向ひ、呼吸はゆるやかに深くなつてゐる、脈搏は減少し、血壓も下る。消化機能も

胃液その他分泌機能も衰へてゐる。感覺の內では聽覺が最も少く變化を被ると云はれてゐるが、これは生命保全上の警戒のためであらうと思はれる。このやうに、一體に精神肉體の諸機能がその活動を極めて消極的にしてゐるのが條件である。消極的にしてゐると云ふのは精神物理學的に云へば、エネルギー消耗率を可及的に少くしてゐることであつて、それに依つてエネルギーを蓄積して明日の活動への備へをなしつゝあるのだと、目的觀的に云へるであらう。

三、心理學及び精神分析學の睡眠說

では、心理學的には睡眠現象は如何に說明せられてあるか。これは普通の心理學では、殆ど說明らしい說明が試みられてゐないと云つて過言でないやうである。坐右にある英文及び獨文の普通心理學辭典を繙いて見ても「睡眠深度計量器」と題する項目はあるが「睡眠」と云ふ項目は全然缺けてゐるやうな有樣である。併し睡眠現象に就いての實驗調査が全然ないと云ふわけではないのだ。上野陽一氏著『心理學通義』の中にはツェルニー氏やミヘルソン氏やレーメル氏等の實驗調査の結果が紹介してある。それ等の調査方法とは、一定重量の物體を一定度の高さから落下せしめて、その音響の大小と覺醒可能との關係を調査するのである。それに依ると、生後一週間の乳兒について調べたところでは、一回の睡眠時間は平均三時間であつて、長ずるに從つて次第に長くなる。その三時間の內、第一時間の中に最深度が見られる。それから漸次に淺くなつて、遂に三時間目の終りには覺醒することになつてゐる。生後九ヶ月の乳兒二人について實驗したところによると、睡眠後約一時間目に最深度の來ることに變りはないが、四時間目の終り頃に一度覺醒し、それから暫時してまた睡眠に入り、約一時間にして再び最深度に入るが、今度は第一回目ほどの深度には達せず、また四時間目位に

覺醒する。更に、二歳乃至六歳の兒童に就いての調査（上圖參照）に依ると、やはり就眠後約一時間にして最深度に入り、六時間後に最淺度に入つて殆ど覺醒しさうになるが覺醒はせず、再び深度に入るが、さきに達したほどの深度には達せず、十二時間後には遂に覺醒に至ると云ふ形式になつてゐる。これ等三種の形式を比較研究して見ると、覺醒と睡眠とが一定の波長をなして律動してをり、その波長は乳兒時代ほど短く、成長につれて漸次長くなる傾向を有してゐることが分る。現に、成人の睡眠形式を調べて見ると、大體右の小兒の睡眠形式の發展又は變化の如き相を示してをり、就眠後約一時間にしてやはり最深度が來り、それから漸次二三の消長のあとを波動形に示して遂に七、八時間後に覺醒に至ると云ふことになつてゐる。で、健康な成人の正常な睡眠圖式は下方圖のやうな形を示すやうに云はれてゐる。

この事實は、睡眠現象の單なる記述（勿論科學的記述）であつて、その因果關係に關する研究のためには何ら資するところはないと云ふ風に人々は考へるであらうし、調査家たち自身もまた恐らくはさう考へてゐるであらうと察せられるが――現に外國の心理學辭典にさへこれを紹介してないほど輕視せられてゐる――、併し私はこの傾向の中に、睡眠現象の因果的機制を明かにするものが暗示せられてゐるのではないかと考へるのである。

如何に暗示せられてゐるかを說く前に、我等は右の實驗心理學的睡眠研究とは別の心理學的（精神分析學的）睡眠說を紹介しておかなければならない。幸にしてフロイドはその『精神分析學入門講話』の中の夢に關する章の內で、睡眠に就いて次のやうに述べてゐるから、それを引用すれば、大體に於いて要領を盡すのである。

「睡眠とは、生理學上又は生物學上の一問題で、今日でもまだ議論の餘地が存してゐる。我々はそれに就いて何ら決定的のことを云ひ得ないが、併し睡眠の心理學的特質を闡明したいものと思ふ。睡眠とは一つの狀態であり、その狀態に於いては自我は外界に就いて何ら知らうと欲しない。自我の興味は外界から引揚げられてゐる。自我は外界から已れを引退せしめ、外界の興味を反撥することに依つて睡眠の中に入る。で、眠りに際して外界に對して云ふ、我は眠りたいのだからそつとしておいてくれと。その逆の事を子供は云ふ、坊やはまだ寢ない、まだ疲れてゐない、何かするんだと。睡眠の生物學的傾向（目的）はこのやうに休養にあるやうに思へるが、その心理學的特質は外界への興味の引揚げにある。我々が外界に對して厭氣がさして來た時、その外界に對する我らの關係は不卽不離になつてゐるやうに思はれる。それ故に、我々は週期的に誕生前の狀態、卽ち母胎內の存在へと引退するのである。我々は誕生前に存在してゐたのと同じやうな狀態（卽ち、溫くて、暗くて、無刺戟な狀態）を作り出すのである。我々の或る者は窮窟な姿勢をとり、胎內に於けると同じやうな恰好で眠ることがある。外界は我

てゐないのだ。毎朝の眼覺めはそれ故に、新たな誕生の如きものである。」云々と。

以上は睡眠學說史上未曾有の、實に重要なる假說である。この假說からして二つの更に重要なる結論が導き出されると私は考へる。その一つは、性交を以て幻覺的、象徵的及び現實的意味に於ける退行（母胎への）願望の充足であるとする考へ方、他は睡眠を以て死の本能願望の週期的、律動的充足であるとする考へ方である。第一の方の考へ方は、既に生物分析學者フェレンチーに依つて明示せられてあるが、後者の考へ方は私の一家言である。

第一の考へ方（フェレンチー說）に就いて、拙著『續戀愛性慾の心理とその分析處置法』（第八頁）の中に相當詳しく紹介しておいたが、念のために次にその一節を引用するならば――

「生れたての赤ん坊の最初の睡眠狀態は、それ以後に續く無數度の睡眠狀態と同樣に、未出生狀態へ還元したいとの願望の幻覺的滿足を意味するものである。……性器的快感それ自身は、本來的努力並びにその努力に依る滿足へと退行するものゝ如くである。さうしてこの退行に依つて滿足は、幻覺的に、象徵的に、並びに現實的に、三者同時に得られるわけになるのである。現實的には、出生前の淨福狀態に新たに與り得るのはたゞ精子細胞のみである。性器それ自身に就いては、その活動の仕方が胎內復歸の象徵的な寫しになつてゐる。然るに性器以外の全身は胎內生活の幸福に與るのはたゞ幻覺の形に於いてのみであつて、それは宛も睡眠の場合に於けると同じである。それ故に、オルガスムスはこの無意識的幻覺に伴ふ情緒的狀態として考へられた。」云々とある。

卽ち、フェレンチーはコイトスを以て胎內復歸願望の一種の充足方法であるとし、その幻覺的性質に於いては、睡眠とオルガスムスとは同じ意義を帶びてゐると云ふことを暗示してゐるのである。卽ち、コイトスと睡眠とは共に出生以前の狀態への退行願望の充足方法である點に於いて共通する點を極めて多く有してゐると云ふ結論に到達するわけになるのである。ところで、出生前の狀態とはつまり死の狀態、又はそれに極めて近似した狀態に外ならないから、睡眠を以て死の本能願望の週期的律動的形式に於ける象徵的充足であると云ふことゝて必ずしも不可能ではないことになるであらう。さうして、この假說こそは私の一家言的命題であつて、このやうな假說的命題を私はたゞ好奇的に與へるのではなく、このやうな假說に依つて不眠症への理解及び治療の理論が確立することを信ずるがために外ならぬのである。

律動的傾向が存すると云ふことである。

以上、私は心理學及び精神分析學からの睡眠說を紹介して來たが、兩說の中から抽出し得る共通的見解は、睡眠に週期的、律動的傾向が存すると云ふことである。

四、人間の睡眠と動物の冬眠夏眠

さきに紹介した生後九ヶ月の乳兒の睡眠深度調査に於いて、調査者ツェルニーは、この前後二期に中斷せられた現象を說明して、これは營養の要求が起つて來るためであるとした。その證據には、子供が年をとるに隨つて、營養の要求から來る刺戟から免れるやうになり、夜中に眼を覺ますことがなくなると云つてゐる。それは勿論、生物學的な說明の仕方としては正しいであらうが、更にこれを心理學的に說明するならば、睡眠繼續願望に反抗して覺醒願望が反動的に擡頭するためであると云ひ直すこととて、固より不可能でなからう。たゞその睡眠願望に反動する覺醒願望擡頭の波長が生理學的理由に依つて始めは比較的に短く、後には比較的に長くなるのだと云ふことも出來るであらう。その覺醒願望擡頭の原因は、始めは恐らくたゞ營養の無意識要求のみであらうが、後にはその要求それ自身ももつと複雜化し、また更らに他の諸々の要求がそこに附加せられるやうになるのであらう。

以上のやうに、睡眠と云ふ現象にはその正反對の覺醒と云ふ傾向が必然的に內具してをり、從つてその顯現の中には、恐らくは相互に牽制する結果からか、律動性、週期的波動性が存してゐると云ふことを氣付くと共に、我々は廣く人間以外の、他の動物に就いて睡眠又は睡眠類似の狀態に觀察の眼を放つて、そこに比較研究的な觀察を試みなければならない必要を感ずるのである。他の動物に於ける睡眠類似の現象と云へば、人々は直ちに種々な動植物の冬眠又は夏眠の現象を聯想するであらう。この冬眠又は夏眠の現象は、それ等の時期に於いては、或る種の生物が食物の缺乏、又は環境の不適當さを感ずるので、それ等を避けるためにさう云ふ狀態に入るのであると生物學者は說いてゐるやうである。たしかにさうであらう。冬期には植物も小動物も枯死するので、それ等を常食とする動物は食料缺乏のために餓死しなければならない危險を避けるために、自ら進んで假死狀態に入ることが、己れの生命を永く保全するためには必要な方法である。また夏期に渇水の危險にさらされてゐる地域の魚類は、その間泥水中に沈んで、假死狀態に入つてゐることが自己保全の最も賢明な方法であらう。併し彼等無知な動植物が環境順應の必要と方法とを自覺して意識意圖的にさう云ふ方途を擇んでゐるのであるとは考へられない。もしさう云ふ風に考へる人々があるならば、それはあまりにアニミスムス的な考へ方であるばかりでなく、生物の生活をあまりに隨意的

に考へ過ぎるものである。生物の生活は本來、不隨意的（隨意不隨意の別をもし立て得るとすれば）なものである。換言すれば、本能的なものとは、彼等の意識的意圖とは時には獨立して、無意識的なエスの力に驅り立てられてゐるものである。況んや、人間のやうに意識生活を持たぬ一般の生物に於いては、なほさらエスの强迫性は顯著にそれ自身を現すのである。エス（本能）は我々の內にある我々以外の力である。我々以外の力とは自然の力である。一般生物は人類がさうであるより以上に、自然の一部分である。自然に順應してゐるやうに見えても、それは生物が自然に順應してゐるのではなく、自然が自然に適應してゐるのに外ならないのだ。

それ故に、生物の冬眠夏眠を以てたゞ彼等が環境に順應してゐるのだと考へることは、あまりに一面的な考へ方である。それは前に紹介したツェルニーの調査に於いて、乳兒睡眠の覺醒による中斷が單に營養のためであると云ふ如き目的觀的解釋が一面的であるのと同じである。環境に順應してゐることは當然であるが、環境に順應してゐると共に、反面に於いて環境を利用してゐると考へなければならないと我々は主張する。何となれば、本來その傾向のないものが、環境に强要せられたゞけでさう云ふ性向的現象（この場合、冬眠、夏眠）を示すと云ふことは、考へられないことだからである。例へば、本來「一日戰死」の覺悟で働かしむべく制定せられた興亞奉公日が、いつの間にか公休日になつてしまつた如き事實に徵して見ても思ひ半ばに過ぐるものがあらう。興亞奉公日が今日の如き實質となつたに就いては、奉公日の制定者の意圖だけでは說明が出來ない。それはその制度を利用して今日の如きにしてしまつた一般の人々の本來の傾向を豫想することとなしには、不可能であらう。

このやうにして、我々は個々の生物一般が、その生を受けて以來、壽命を終へて死に至るまでの間に幾度も、週期的に律動的に、而も强迫的に、假死狀態に陷ることを知るのであるが、その週期性と律動性と强迫性とは、人間の睡眠現象に就いてもそのまゝ認められることである。人間の睡眠と動物の冬眠夏眠とは固より同じではない。そこには共通點と共に相異點を多分に有してゐる。人間の睡眠と覺醒とでは、そのあらゆる機能が緩漫であるのと活潑であるのとの差があるが、本質的には違つてゐないが、動物の冬眠夏眠に於いては、その運動も營養も呼吸も殆ど停止し、その體溫は環境のそれに忠實に一致すると云はれてゐる。併しながら、睡眠は屢々冬眠への出發點であると云はれてゐるし、人間もまた睡眠から假死狀態に入ることも出來るし、また突如として假死狀態に入る場合もあり得るのであるから、人間の睡眠と動物の冬眠夏眠とを全然無關係なものであるかの如くに考へることは、あまりに人類中心のナルチスムス的考へ方であつて、生物學は恐らくそのやうな考へ方を容認

しないであらう。

五、睡眠と死と性と

以上の論述に依つて、睡眠が死の代用品であると云ふことは、明言するまでもなく、讀者諸氏の容認せられるところであらうと信ずる。睡眠と死とは文學作品の内に於いては（例へばシェイクスピアの『ハムレット』に於ける如く）聯想せられてゐるが、その現實的意義に於いて密接な關係があると云ふことを論證し得たものは精神分析學のみであらう。睡眠と死とはヒステリー患者の假死狀態や動植物の冬眠夏眠狀態を中間に置くことに依つて、その一聯の發展的、又は相關的關係を想定することが出來るやうになつた。さうしてこのやうな關係が想定せられる以上、精神分析學の主張する死の本能說に基き、睡眠が死の本能のさせる仕業であるとの豫想を下すことゝて固より不可能ではなくなるのである。人間はその覺醒時に於いて、その生の本能の充足を圖り、睡眠時に於いてその死の本能の充足を圖つてゐるのだと云ふ命題とても（極めて一般的な命題ながら）下すことが出來るのである。

我々は普通、常識的には、性愛の生活は生の本能的なものであつて、死には關係のないもののやうに考へてゐるが、性愛が實に死と密接な關係を有すると云ふことは、旣に拙著『戀愛性慾の心理とその分析處置法』の中（第三章第四節一七九頁）に論じておいたが、こゝに我等は不眠症の問題を解決するために、再びこの性愛と死との關係に就いての考究を試みなければならないのである。それに就いては、實例の分析考察から這入つて行くのが、科學的で望ましい。昭和十三年一月廿八日の東京某紙は當時世界的に有名であつた「シカゴの眠れる美人」が五ケ年半の長期睡眠の後に死んだことを報道して、次のやうに記してゐた。

「パトリシア・マギーレが五年七ケ月の間眠り續けた後、最近死んだ。彼女のことについては旣に樣々に傳へられたり書かれたりしてゐるが、彼女にも婚約の男があつたことだけは死後初めて世上に擴がつたのである。その男といふのは寶石商として有名なジェームス・バーンス氏であつたため、一層世間を騷がしてゐる。彼はパトリシアとは一九三二年に婚約を取交したのであつた。その當時彼は每日パトリシアの家に通つたが、後には一週二回の訪問に止めた。ある夜のこと、相乘りで家へ歸つて來る時、突然彼女は話をしながらひどい睡眠發作に襲はれて、遂に死ぬまで五年七ケ月も眠り續けたのであつた。パトリシアは發作後は全く意識がなかつたのでバーンス氏の度々の訪問も遂に一回も意識することが出來なかつたといふ。」

この事實は固より稀有の場合であり、また我等が直接臨床分析の機會を許されぬケースではあるが、もしこれに公式的分析解釋を加へることを許されるならば、まづヒステリー性假死狀態から眞正の死に至つたのであると診察することは、精神分析の立場を理解しない一般醫家と雖も容認するであらう。では、次に何如にしてそのやうな假死狀態に陷つたのであらうかと云ふことを分析的に想像診察するに好個の根據となるものは、本人が其夜許婚者と相乘りで家路に就いてゐた間の事であつたと云ふ事實である。同じ車に、殊に夜間、殊に愛人と乘車すると云ふことは、もしこれが夢中に現れた幻覺であるとすれば、コイトスとしての象徵的意味を有することは恐らく自由聯想をとつて見るまでもなく、疑ひの餘地ないところであらう。果してさうならば、パトリシアがその機會に非常に性的亢奮を覺えたと云ふことは固より當然である。このやうな亢奮はもし彼女に何らの禁制（例へばエディポス的禁制）がなく、或は微弱であるか、或は禁制はあつても自我が强健であれば、握手したり接吻したり抱擁したりする程度の事で滿足せられたであらう。併し恐らく彼女に於いては、エディポス的禁制强く、その上自我の統制力が軟弱であつたとすれば、そのやうな亢奮の突如たる攻勢に對しては防禦すべき方法がない。防禦出來ない以上、その時、そのやうなヒステリー性格者に於いて、そのやうな亢奮は如何にして處置せられるかと云ふに、禁制する力と亢奮する力とを妥協せしめて、神經症的症候を構成する事より他に途はないのである。卽ち、彼女の假死狀態はコイトス又は後の睡眠の狀態を象徵すると共に、それに依つて事實上のコイトスを回避することを得しめてゐるのである。

そこで我々は以上の縷述の全體からして、二つの分析的命題に到達することが許されるであらう。その一つは、睡眠は一種の假死狀態（象徵的死）として當然眞正の死への過渡の可能性あること。その二は、睡眠はコイトスの象徵としてそれの代償又は禁制として二種の相矛盾する意味を有し得べきこと。（こゝに「可能性あること」とか「有し得べきこと」とか云ふ表現を用ゐたのは、常に必ずさうなると云ふ意味でないことを明かにしてゐるのである。）以上二つの命題を根據として、我々は次節に不眠症への理解とその分析治療の方法とを確立して見ようと思ふ。

六、不眠症の心理機制とその治療

こゝに幸にして、我等の研究會員長尾忠君の報告せられた不眠症婦人患者のケースがある。その患者は當年とつて卅歲の處女である。廿五歲の頃からそろそろ不眠症に罹り始め、だん〳〵自分でもあせり出し、醫師にも三人も掛つて一向思はしくなく現在も勿論、その症候は續いてゐる。患者の性格は元來極めて神經質で、取越苦勞多く、小心で、我儘である。長女として比

較的自由に、甘やかされて育つて來た。數ある縁談にも振向かず、自分の性格は家庭向きでなく、獨身で行かなければ駄目ときめ込んでゐた。發病以來、催眠藥などを周圍の者がいくら止めてもきかずに服み、最近ではその藥も利かず、すぐに吐き氣を催し收まらぬので、もう諦めてゐるが、却つてこの方が氣持が落着いてゐるやうであるが、妹等に對しては怒りつぽくなつた。保養する時は自分一人でし、職業を屢々換へ、夢は屢々見るが、人に追はれる夢、堀に落ちる夢など、總て苦しい夢、恐ろしい夢である。殊に最近は大小各種の蛇が全身にまつはると云ふいやらしい夢を見ることがある。

　これだけの簡單な報告に基いて、不眠症の一般的分析解釋を下すことは困難であるが、併し我々は今までの論述に依つて睡眠の心理機制を十分に理解し得てゐる筈なので、或は或る程度までこれを解釋し得るやうになるかも知れない。

　まづ、右の患者に於いて、その恐らくは近親間的定着に依つて、性への無意識的禁制が強く働いてゐることは疑ひの餘地がない。それ故に、廿四、五歳頃まではその少女期の氣持を持續して性禁制に寧ろ或る種の誇りを持つてゐたのであらう。然るに廿五歳に及んで、その誇りもいさゝか怪しくなり、老嬢として朽ち果てることの不安が、少女的誇りの牙城を脅かすやうになつたのであらう。人に追はれる夢や堀に陷る夢は、明かに彼女が性的滿足又は墮落への願望を無意識裡に有することを告白してゐる。總て恐怖の夢は性的亢奮への刺戟と抑壓との兩者を意味することは分析學上の常識である。

　それでは彼女の不眠症は如何なる機制に依るかと云ふに、それは彼女が睡眠狀態から假死狀態を經て眞正死狀態に至るべき可能性（死の本能願望）とそれに對する反抗（生本能的願望）との抗爭に依るのであらう。不眠症患者はその執拗なる不安に拘らず、實は相當の程度まで睡眠をとつてゐるものであることは、多くの醫家の保障するところである。不眠は單なる精神上の不安であつて、實際上のものではないやうである。勿論、正常の人々のやうに十分な、或は深い睡眠を享受することは出來ないにしても、休養としての意味の睡眠はとり得てゐるらしいと云ふことは、多くの醫家の認めるところである。併し人間の睡眠は單なる休養法として、疲勞回復法としての意味しか有しないものではなく、寧ろそれに依つて我々の死の本能を週期的に、律動的に滿足させねばならないところにその眞正の意味が存するのである。

　概括して云へば、不眠症は一種の不安ヒステリー症候である。それ故に、この症候は男子に於いてよりは女子に於いて多く見られ、男子にしてこの症候に陷るものは何らかの點に於いて、女性的な人々であるやうに思はれる。また非常に子胤の欲しい人が子供を得られない場合にも、不眠症に罹る場合があるやうである。さう云ふ場合に、人々は（殊に男子は）不朽の事業を殘すべく人一倍の努力を拂ふやうになる傾きがある。事業は子供の代償である。子供は確にその父の性殖細胞であり、その

生命の延長であり、それあることは父のゾマの死する權利及び意義の獲得（死の本能の滿足の基礎）である。かくしてその人は大往生をなすことが出來るのである。大往生とは生の本能を十分に生かしきつた人が、次に死の本能を生かすことに心殘りのない境地を云ふのである。生の本能を殺すことによつて死の本能を生かさうとしても、それはいさゝか無理な道のやうに思はれる。

この事はまた、毎日の生死（覺醒と睡眠）に就いても云へることである。その一日の生の營みを十分に果したもののみが、一日の終りに安き快眠に入ることが出來るのである。併し、生の營みを十分に果すと云ふことは、宗教的又は道德的見地からばかり云へることではない。人間は彼自身の超自我（如何なる性質のものにもせよ）の裁可を得、そのナルチスムスが滿足を得る如きもの（少くとも近き將來にそれを得られる可能性の見える如きもの）でなければ、生の營みを十分に果すことが出來ないやうに出來てゐる。この仕事をすればお前は宗教的に善人になれると云はれて、素直にその仕事（に對する何らの批判や好惡なしに）をして收まつてゐることの出來る人間は、宗教的には善人であるかも知れないが、心理學的に見ればあまりに沒人格的な神經症患者である。

約言すれば、不眠症はその生の本能の昇華と滿足との足りないばかりでなく、また死の本能のそれも從つて不足してゐるのであらう。死の本能は女子においてはリビドー化して墮落願望となるものであるが、そのリビドー化が何らかの契機（禁制）によつて阻止せられると、なまのまゝの死の本能（破壞衝動、自殺願望）として殘る。他方、滿足せられざる生の本能はその不平を（軟弱なる自我に向つて）訴へてやまぬので、軟弱な自我は仲の悪い兄弟の双方から不平を持込まれて調停に困りぬいてゐる氣の小さい母親のやうにオロ〳〵するばかりで、全く手のつけようがないと云ふ狀態である。

それ故に、不眠症の治療は、原則的には、まづ自我の强化を圖ることである。卽ち、生死兩本能間の多少の葛藤に堪え得るだけの健康さを自我に持たしめることである。（事實問題としてはこのやうな二種の表現は殆ど無意味であつて、生死兩本能間の葛藤の少いと云ふことゝ自我の强健と云ふことゝは同じであらうが、こゝでは譬喩的に述べておくのだ。）次には、死の本能（攻擊欲又は墮落願望）の昇華の障害の程度、及び原因の調査をなして、これの矯正を圖ること。第三には、その生の本能（性愛生活）の昇華の障害の程度及び原因を調査してその矯正を計ることなどである。併し、このやうに抽象的に論じたのでは分りにくいであらう。さきに擧げた患者の場合に就いて云ふならば、彼女の自我が軟弱に（幼兒的、少女的）になつたのは長女として兩親、殊に父親に甘やかされて育ち、何らの攻擊を受けなかつたのであらう。過多の愛情をのみ受け適當な攻擊を

兩親から受けなければ、自我は强健とならないと共に、そのリビドーも自然な發達を遂げず、總て本能はナマのまゝに殘り、攻擊慾は昇華して向上慾、知識慾とならず、却つて破壞衝動、墮落願望として殘り、而もその間、エディポス的禁制が强く働くから、リビドーの向ふべき對象は一ヶ所に停まつてゐて身動きが出來ず、そこで幼兒期のまゝでこげついてしまふやうになる。そこでリビドーもその年頃らしい自然な自由な享受を味へず、從つて生の本能の滿足はなく、而も他方に於いて死の本能のみナマのまゝで熾烈な要求を持つとすれば、まだ悟りきれない靑坊主が白刄を以て脅かされてゐるやうな恐怖を不斷に感ぜざるを得ないのが、寧ろ當然であらう。彼女の不眠症は實はこのやうな不安の顯現に外ならない。

七、睡眠覺醒の律動性と不眠快眠の相關性

前にも述べた通り、睡眠と覺醒とは交互的に、律動的に、週期的に來ると云ふことが不眠と快眠との問題を解決するに重大な意義を帶びてゐると私は信ずるのである。何となれば、たゞ睡眠して休養をとつてゐると云ふ程度ならば、多くの醫家の保證する如く、大抵の不眠症患者たちが、これを明かに享受してゐるのであつて、そこに何ら不滿不足はないわけであるが、それならば、何故に彼等が不眠症としてそれを惱み、その惱みを醫家に向つて訴へ來るかと云ふことの理由は少しも明かにはなつてゐないのである。これを明かにしようとの努力が全然拂はれない理由は、從來の醫學の能力を以てしてはこれが手に負へない病氣であると云ふ理由のためのみならず、またこれは、多くの所謂醫家がこの問題に依つて、自分の無能を證明せられることとの不快さを自分に慰撫する無意識トリックとして、患者が實際は相當に眠つてゐるのだと云ふ點を强調するものであつてこれは云はゞ論點移動であり、顧みて他を云ふの類であると云はれても辯明の仕樣はないであらう。*

註　*私の調べて見た範圍内では睡眠の律動性に就いて僅かに言及――文字通りたゞ言及に過ぎないが――してゐるものは林髞氏（昭和十五年八月廿日、東京朝日）だけであつた。氏は「睡眠は生命現象の一つのリズム」と云ふ語を用ゐてゐる。併し氏は同時に不眠症者が實は相當に眠つてゐると云ふ點を强調する一人である。

實際には相當に眠つてゐるのであるに拘らず、何故に患者たちがこれを不眠として訴へ來るかと云ふに、常識的に云へは、彼等のその眠りは一定の深度に達せず、眠りとして物足りないからである。さきに圖示したやうに、睡眠は就眠後約一時間にして最深度に達するものであり、またそれが必要であるのだ。換言すれば、ブランコが前に延びたり後ろに退いたりて一定の律動運動をなし、その勢ひのよいものほどその振幅が大であつて、動搖の律動性と週期性との活々したものほどその上に乘つ

てゐるものもそれを眺めてゐるものも愉快なのと同じである。睡眠の快樂とはこの活々とした生命の律動の快樂なのである。深き快眠を得るもの丶みが爽快なる眠醒めに蒲團を蹴立て丶起上ることが出來、一日の勤めを心おきなく果して何ら悔いなきもの丶みが枕を高うして假死の世界に悠遊する權利を行使することが出來るのである。快眠はそれ故に精神界の權利行使の得意の喜びであり、不眠はその權利なき罪人の失格の苦惱である。

八、睡眠覺醒の律動性の環境的原因

併しながら、多くの人々は未だ、睡眠と覺醒との双方が何故にそのやうに律動性と週期性とを力強く發動させなければならないのかと云ふことの理由がよく分らないと云はれるであらう。それは筆者にもよく分らないと突離したとて、精神分析學徒として何ら恥辱ではないのである。何となれば、それ等の問題は恐らくは今までの心理學の研究對象としての範圍を超えて、寧ろ哲學的な問題の領域に踏入ることになるであらうからだ。けれども今日まで哲學上の問題とせられてゐた事が、今日では心理學上の問題であることは頗る多い。只今の問題も恐らく今後の心理學上の問題としてその研究對象の範圍内に加へられるかも知れないと云ふことを感ずるが故に、私はこの問題に就いて多少の答辯を暗示的に試みたいと思ふ。

それは地球がその自轉と公轉と云ふ偉大なる律動的週期的運動に依つてその表面に晝夜の明暗と四季の寒暖の差別を生じ、それに依つてその上に存在又は棲息する一切の生物及び無生物に對して何らかの影響を及ぼさないと云ふことがないと云ふ一大事實を考へれば、思ひ半ばに過ぐるものがあらう。晝夜の明暗と四季の寒暖とは地球それ自身にとつては單なる偶然の現象であらうが、その上に存在する一切のものにとつては、それは必然的な大事實であつて、殊に環境の影響に對して極めて敏感なる生物、殊に高等生物がこれほど嚴粛、永遠、偉大なる事實に對して無關心無感覺でゐられると云ふことは絶對にあり得ない。それは、あまりにも偉大であまりにも明白すぎて、却つて氣のつかないほど大きな事實である。地球それ自身は、睡眠も覺醒も生も死もない。それは永久に活動してゐる（否、たゞ物理の慣性の原理に從つて盲動してゐる）一土塊に過ぎないのであるが、少くともその表面だけは一日の中に睡眠と覺醒とを交互にし、一年の内に春夏の生と秋冬の死（假死）とを反復しつゝあるのであるから、その上に纔に止まつてゐるアメーバ上りのやうな人間が、その大運動、大生活に歩調を合せ得ないと云ふこと（即ち不眠）は、苦痛であるのが寧ろ當然である。生物の自然死亡率が時間的には夕刻から眞夜中にかけて多く、季節的には秋から冬にかけて多く、その出産（受胎）率が時間的には夜中から曉にかけて多く、季節的には春から

夏にかけて多いやうに思はれるのは、（別に統計をとつたわけではないが）寧ろ當然であらう。殊に、それが月の動き（潮の干滿）に支配せられてゐるとは昔から俗信せられてゐることであるが、この俗信には相當に正しい科學的根據が存するものと云はねばなるまい。

我等はかつて、佛敎の輪廻說を分析學の立場から論考したことがあつたが（拙著『精神分析讀本』參照）輪廻說は昔時の哲學であつて、これを神祕說視したのは（確に神祕的見解も澤山混入してはゐるが）後年の分科主義的科學の僻見であつた。これは寧ろ古人の科學であつた。我等は今これを再び科學としてその心理學的根據を供することに努めねばならぬ。（頭の剛張つてゐる世の學校心理學者たちは、それは實驗が出來ないから、科學にはならないなど丶云ひ出すであらうことは想像出來るが…。）それはやがては不眠と快眠との問題解決のためのみならず、人生の他の種々なる問題の解決に資する所以となるであらう。（完）

附言——第五頁に紹介してある睡眠疲勞說は、今日では醫學界でも舊說とせられてゐるやうである。總て外部の影響や疲勞毒素の影響とは關係なしに、腦髓自身の睡眠神經中樞が睡眠と覺醒とを司ると考へられるやうになつてゐる。この說は我等の心理學的睡眠說を生理學的に裏付けるものとなるであらう。

不眠症と貪眠症との治療及び安眠法

土屋舒廣

一、死と睡眠

吾々は毎日晝は働き夜は眠つて何の不思議も感じないが、疑つてみれば、かやうな平凡な現象こそ神祕とも謂はる可きである。「懷疑は知識の始まり」と謂はれるが如く、如何なる知識も平凡なる現象に對する懷疑から出發するのであり、そして、その創られたる知識は人間の生活行動を通じて自然、社會、或は精神に何等かの影響を與へた後、又再び平凡な事實と化し去るものであつて、これが知識の運命であらう。睡眠と言ふ平凡な現象に對しても、人類の懷疑は古今東西幾多の學說を生むだが、未だ確定的の意見はない樣である。それらの學說を枚擧する暇はないが、その大體の結論として考へられる事は、第一に睡眠の生理學的考察であり、第二は心理學的立場からする考察で、第三には哲學的思辨である。第一に生理學的觀點からすれば、睡眠は疲勞物質の蓄積の結果であるとか、睡眠中は頭腦から血液が下るとか謂はれるが、これは事實として正しいのであつて、吾々が何等かの方法で疲勞が早く回復し、新陳代謝が活潑になる樣に、例へば刺戟療法をやれば、睡眠時間が少くて濟むとか、就寢前に運動をやつて頭腦の充血を去り、肉體を適度の疲勞に導けば熟睡し易いとか等と吾々が經驗し得る所である。しかしこれのみを以ては睡眠の何たるかは判明しない。第二の心理學的考察によれば、睡眠とは心理的退行現象であつてそれが肉體の疲勞によつて自然に行はれるものを言ふのである。不自然的な退行は精神病である。肉體の疲勞を回復するために、自然に心理が退行し、求心性神經（感覺）が內向し、遠心性神經が無活動になつて筋肉が弛緩し、死の樣は狀態へ沈下してゆくのが睡眠である。第三の哲學的思辨によれば生に對して死があるが如く、覺醒に對して睡眠があり、更に睡眠は小死であり、死は大睡眠であるとされる。しかし、死と睡眠との間には明瞭な區別がある。即ち、睡眠の場合には動物性神經が殆ん

ど無活動になり、思考作用が退行しつゝあるにかゝはらず、植物性神經（自律神經）は活動してゐるのであつて、心臓も肺も靜かに動き、内分泌、外分泌作用もやゝ消極的に行はれてゐるのであるが、死の場合には思考作用が完全に退行し切り、動物性神經も植物性神經もその活動を停止するのである。換言すれば、睡眠の場合には肉體と言ふ自動時計のゼンマイが自力で卷かれてゐるのであるが、死の場合は完全にゼンマイが卷切れてゐる。生と言ふ自動時計は、誕生の際にその一生のエネルギーを出すべくゼンマイが卷かれてゐるのであり、これが定命である。ところが不攝生によつて生命のゼンマイをほごし過ぎ、且つ不完全、不充分な睡眠によつてそれを卷き還すのを怠ると定命を短かくするものである。或は病氣によつて定命が縮められる場合もあらうし、又偶然の事故によつて、或は自殺の如き行爲によつて決定的に或は部分的に生命のゼンマイが破壞される場合があらう。

要するに睡眠は疲勞を回復するために自動的に爲される心理的退行現象であり、肉體的には特殊な無活動狀態であると言へる。死と睡眠とを比較した場合に、兩者が明らかに區別せらるゝにも拘らず、それが一般に混同されて感ぜられるのは、心理的退行と肉體の無活動とが兩者に共通する現象だからである。更にそれは哲學的思辨或は佛教的情操によつて、死は大なる睡眠であり、肉體が無機物に還元して大地に歸るのは、丁度睡眠が翌日の新たなる覺醒と活動とを準備するが如く、新たなる生を得て地上に復活、再生する準備であると欲念せられる。事實としても一度び死によつて無機物として大地に還元すれば、或は燐火となつて人間を驚かせる事もあらうし、又は植物の滋養として吸收せられ、或は大根として或は人參として復活するかもしれない。又は一度植物として再生し、動物に喰はれて、或は鳥として青空に囀り、或は魚として深い海底を行くかもしれない。これを佛教は因果應報として說くが、それは科學的に正しくない樣に見える。しかしよく考へてみれば、佛教は象徴的譬を以て現實界における心の變化とその表れとしての行爲とを說明し、敎へたものである事が解る。卽ち、佛教の因果應報說は生きた人間の無意識心理上の事であつて、佛教が唯識論を唱へるのは無意識心理上の因果關係の重大性を强調するのであり必ずしも觀念論ではなく、寧ろ唯物論に近い哲學的根據を有する樣に思はれる。かやうに考へて來ると、人間の再生は精子と卵子との結合による以外には絕對に實現の方法がない事が解らう。しかし、唯だ一つ昇華と言ふ手段があつて、それによつて心理上の再生を人間は爲し得るが、それは心理上と言ふ限界があり、且つ間接的で直接的ではない。從つて、人間は精子と卵子との結合によつて現實界で子供として再生する以外には復活の方法がない。その證據として、例へば或る人間と他の動物との混血體があつたとし、その怪奇小說的テーマの心理を考へてみれば、その混血體は人間の能動因において人間であり、他の

動物の混血においで人間ではないのである。卽ち、對象たるその動物は、その人間によつて禁斷されたる人間の異性の代償であつて、その混血體は禁斷を犯す罪障感と願望との妥協を物體化して表現したものと見做さる可きであらう。かゝる忌しき心理も、昇華されゝば或は愛玩動物の嗜好として、或は盆栽の樂しみとして美化されるのである。扨て、かやうに死と睡眠とが心理的に類似し、且つ又人間の再生は男女の結合以外に手段がないとすれば、睡眠と性生活との密接な關係も自ら理解せられるであらう。卽ち人間の自然的生活形式として性生活と安眠（安死）との密接な關聯は强迫的であるが、分析すれば白雲萬里笑呵々であり、しかも尙ほ花紅柳綠であるのが人間性であると言ひ得るであらう。

二、睡眠と夢

夢を科學的に研究し、無意識心理學を創建せられたフロイド博士の研究によれば、夢は願望の滿足であつて、睡眠中の夢の作業は厭縮、置換、可塑的表現及び全體の第二次的加工であると言はれる。卽ち、夢は睡眠の退行的性質によつて、過去の經驗（個人的及び集團的）の記憶を材料とし、超自我の檢閱作用を煙に卷き願望充足を可能ならしむる樣に壓縮、置換、可塑的表現等によつてその材料を配列し（潛在思想）、且つ檢閱に堪え得る樣に全體の第二次的加工を行つて顯在内容を作るのである。かゝる作業によつて夢の不可思議なる歪曲は行はれるが、その歪曲は抑壓と抑壓された願望の抵抗との妥協形成である。從つて夢は象徵的であり、且つ睡眠の退行性によつて幼兒的、古代的である。

睡眠中に吾々は何故に夢を見るかと言ふに、覺醒中には超自我の檢閱作用が嚴重であるのと、自我の現實試驗力が確かであるのとで、現實生活に不適當な願望がエスに抑壓され無意識界、卽ち心の地下室に押込められてゐるが、睡眠中には超自我の檢閱作用が比較的に弛緩し、自我は現實から遮斷されて殆んどエスの自由になるからである。意識心理學者は、夢は睡眠中に外界及び內臟からの刺戟で誘發せられると說くが、實際はさうではなく、睡眠中には自我の力が弱くエスの力が强いから、外界及び內臟からの刺戟もエスが夢の作業に利用するのである。それ故にこれらの刺戟は夢の作業に利用せらるゝだけで、夢の發生原因ではない。從つて又「夢は五臟の疲れ」と言ふ昔の說も誤謬である事が解る。一般的に言へば、自我リビドーが現實から引上げられ、退行した場合に、對象リビドーが夢として現れるとも言へる。多少思辨的にこれを考へれば、覺醒中にはエスにおける生死兩本能が自我を通じて現實界に直面し、死本能は個體保存本能的自我リビドーとして、又生本能は種族保存本能的對象リビドーとして實現されるのであるが、睡眠中は自我が現實界から遮斷せられ退行の一路を辿るものであるから、生

死兩本能も過去の經驗の記憶を材料どして勝手に願望を充足するのであつて、これが夢の潜在思想であり、更に超自我の檢閲作用を瞞着するために煙幕が張られて夢の顯在內容が出來上るのである。更に東洋流に言へば、夢とは眞黒な紙に好き勝手な繪具で思ふ儘の繪を畫き、それを星のかすかなる光で照らし出した樣なものである。

夢は睡眠中にのみ見るかと言ふに、必ずしもさうではない。覺醒中でも自我が現實から脫落し、退行した場合には夢を見るのである。所謂白晝夢と謂はれるのはこれである。精神症はこの白晝夢が極端になつた狀態であり、自我は完全に現實から脫落し、退行してゐる。健全な人々でも或る瞬間に自我が現實から脫落して白晝夢を見るのであつて、實驗心理學ではこの瞬間をエア・ポケット（心的空隙）と稱してゐる。そしてエア・ポケットの多い人は自動車の運轉の如き仕事には危險であるとされてゐる。しかし藝術的創作の如き仕事にはそれは却つて不可缺である。卽ち藝術家の資格は一面現實感覺が特に銳敏であると同時に、他面空想が豐富である事である。それ故に藝術的態度は一面では神經症或は精神症的であるが、その銳敏な現實感覺と昇華とで神經症或は精神症と異つてゐる。睡眠中に見る夢で白晝夢に似てゐるのは、所謂快夢卽ち充分に願望が充足された夢である。それはエスと超自我とが妥協して檢閲作用を殆んど喪失した狀態で、精神症と類似してゐる。一般に深い睡眠にはかやうな快夢が伴つて、心地よい熟睡となるのである。

夢は願望の滿足であり、それがエスと超自我との妥協によつて充分に遂げられた場合が快夢であるとすれば、その反對に超自我の檢閲作用によつてその滿足が障げられた場合が惡夢である。從つて惡夢の不快さは罪障感に因る。かゝる罪障感はその消滅のために、惡夢を喰ふ獏と稱する空想動物を創り出し、魔術念慮によつてその救濟をはかるのであるが、分析すれば、獏とは超自我が夢の作業たる第二次的加工によつて戲畫化せられたものであるらしい。事實として獏と言ふ空想動物には超自我象徵らしい畏敬の感が伴ふ樣である。卽ち惡夢は超自我によつて禁斷された願望の滿足であるために罪障感が伴つて不快なのであるから、超自我の別身たる獏にそれを喰はせれば、結局禁斷が撤回され、罪障が消滅した事を意味するのである。例へばこゝに或る一女性が蛇に體を卷かれたところや齒が拔けたところを夢に見たとして、それを分析すれば、蛇は男性の象徵であり、體を蛇に卷かれるのは男性に抱擁されたい願望の充足と恐怖とを示すのであるし、又齒が拔ける夢は懲罰としての去勢を意味するのである。この惡夢を獏に喰はせてしまつたと欲念すれば、禁斷がそれによつて解除せられた事を意味し、不快さが輕減するのである。惡夢として最も不快なのは、身體が疲勞してゐるのに對し神經が昂奮してゐる場合の惡夢であらう。その際には超自我の檢閲が自我に危險を知らせて、自我が覺醒し、眼を開き起き擧らうとするが、疲勞による熟睡のため容易に眼

が開かず、體を動かす事も出來ないで、恰も怪漢に組伏せられてゐるが如く、或は繩で縛せられてゐるが如く感じ、大聲で叫ばうとしても聲も出ず、その苦しい事は甚しい。かやうな際に睡眠を貪り、願望の滿足を追求するエスと覺醒せむとする自我との鬪爭は恰も死と生との鬪爭の如く感ぜられるもので、やつと覺醒し得た時は冷汗が流れる想ひであらう。これは極端にひどい場合であるが、これ程でなくとも、夜中にひよつと目が醒める場合であるが、それは夢の作業がうまく行き、覺醒した時には既に不快な夢が加工によつて處理され、抑壓せしめられて忘れた狀態である。かやうな惡夢は睡眠中ばかりでなく覺醒時にも經驗するもので、憂鬱や其他の不快な心理は覺醒時における一種の惡夢とも見做し得る。一般に快夢が精神症的であるとすれば、惡夢は神經症的であると言ひ得る。佛敎で說く地獄界と極樂界とは吾々の夢の世界卽ち無意識界における心理機制を詩的に表現したものであつて、極樂が快夢であるとすれば、地獄は惡夢であらう。卽ち善人は超自我に反した行爲をせず、罪障感がないから阿彌陀如來の掌る蓮華國（胎內の象徵）に往生する事が出來、昇華せられた願望滿足の樂しみを味はふ事が出來るとされるのであり、惡人は焰摩天（閻魔王）に罪の輕重を問はれ、その輕重に應じて地獄の苦しみを味はされると言はれてゐる。地獄の苦しみは贖罪であり、閻魔王は超自我である。そして地獄と極樂との間に六道（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間天上）能化の地藏菩薩が介在して諸苦の救濟をなすと說かれてゐる。かゝる往生思想は、機根の低い者に對する象徵的な應機說法であつて、機根の高い者に對する佛心宗（禪宗）の樣な方面では「如來擧心の相は世間の情に順ぜんが爲なり。人の斷見を生ぜんことを恐れて、權に虛名を立す。」と言ひ、又佛を愛し魔を憎む凡人の心の境界を「幻化上頭に模を作し樣を作す」と批評してゐる。從つて佛敎と言ふ樹木はエスの中に廣汎に根を張り、巨大な幹（自我）を持ち、多種多樣な枝葉（超自我）を擴げてゐるが、その眞髓はフロイド博士の無意識心理學（精神分析學）と完全に一致する樣に思はれる。この地獄、極樂思想はキリスト敎のそれよりもやゝ巧妙さを有してゐる。しかし佛敎とても東洋思想であるから、死の本能の滿足に力を入れ、生本能の積極的實現の方は比較的に輕視してゐる傾きがある。これに反しキリスト敎の方では、佛敎の樣に精神分析と一致した見地は持たないが、生本能の積極的實現と言ふ方には頗る特徵がある。これは東洋人と西洋人との民族性の特徵が現れてゐるのである。*

註 ＊これに關しては大槻憲二氏著『精神分析讀本』の內「精神分析學から見た宗敎心理」及び拙論の「東洋と西洋との無意識論理」を參照せられ度い

少し脫線したが、本論に戻り、次に健康な夢と言ふ問題を考へてみやう。前に快夢と惡夢とを論じたが、快夢にも非ず、惡

夢にも非ざる健康な夢と言ふものが存在するであらうか。吾々が夢の問題で嚴密に言へば、吾々は睡眠中のみならず、亦覺醒中も絶えず夢見てゐるのであり、例へば人類が飛行機を發明したのは飛中飛行の夢と深い關係があるのであつて、その夢が發明の動機になつてゐる點では、願望の現實的實現である。しかしそれは空想的實現ではない。健康な夢と言ふ問題もこの點に暗示を得れば、容易に解る樣な氣がする。卽ち覺醒中の生活における現實的に强固な自我、建設的な生活意志と關係が有りさへすれば、如何なる夢でも健康な夢であると言ひ得る。それが快夢として現れ樣と或は惡夢として現れ樣と、問題ではない。心配な事が實際にあれば、或はそれとの苦鬪の夢を見る事もあらうし、又それが好適に解決されたところの願望滿足的な夢を見る場合もあらうし、時には失敗した夢を見る事もあらう。しかし自我が現實的に强固であれば、如何なる夢でも氣に掛からないものである。その夢の意味が解つても、氣にかゝらないのが健康な狀態である。自然に氣にかゝらないのと强いて氣にかけないのとでは、丁度天才と狂人「聖人」と愚者との類似の樣な外見上の類似があるが、區別は判然と存在する。强いて氣にかけない方の正體は抑壓による抵抗である。「聖人に夢なし」と言はれるのは、文字通りに解すべきではなく、寧ろ如何なる夢でも氣にかゝらないのだと心解すべきである。これは佛の心を俗情で「知らぬが佛」と解するのと同じで、佛は精神界の現象を知り盡してゐるので、しかも完全に分析されて氣にかゝらないのであるから、俗情が外見すれば佛や「聖人」は不知の如くであつて「大聖は愚の如し」と言はれる所謂である。「聖人」とか佛とかは畢竟悟後の大平凡人の事であつて、佛教特に佛心宗とフロイド博士の精神分析學とはその目的において完全に一致し、その手段においてそれ〴〵の特徵がある。かように健康で自我が現實的に强固であれば、快夢も惡夢も問題にならない。そして唯だ健康な睡眠があるばかりで、その間に生命の時計のゼンマイが明日の活動に備へて卷き還されるであらう。ところが、自我が現實的に軟弱で、退行してゐると、快夢だからとて喜び、惡夢だからとて嫌ふ樣になる。佛教でも「怪を見て怪とせざれば、その怪自ら壞す」と言つてゐる樣に、快夢も惡夢も怪であるが、自我が現實的に强固であればその怪は自ら消滅するのである。それ故に自我を現實的に强固にし、健康に働く事が最も根本的な安眠法であると言ひ得るであらう。

三、不眠症と貪眠症及び安眠法

晝は夜との關聯において始めて晝の意義があり、又逆に夜は晝との關聯なしには考へ得られない。これと同樣な事が生死及び覺醒と睡眠等についても言へる。試みに晝のない夜、或は夜のない晝と言ふ現象を想像してみるに、その場合の晝なり夜な

りは現在吾々が經驗してゐる如きものではなくて、丁度晝と夜とを混合した狀態である事が推定せられる。その狀態から晝夜が分裂してゐる以上は、兩者が相關聯する事は辯證法のＡＢＣである。ヘーゲルは「眞の闇は明に等しく、眞の明は闇に等しい」と言つてゐるがこの論法でゆけば、眞の生、眞の覺醒は眞の死、眞の睡眠に等しく、後者は又前者に等しいとも考へられる。しかしかゝる純粹の狀態は抽象的に想定し得るのみで、實際には存在しない。實際には一定の質の量的發展はその反對物への質的轉化に了るのであつて、晝から夜へ、夜から晝へ、或は生から死へ、死から生へ、或は覺醒から睡眠へ、睡眠から覺醒へ等の轉化はこの一例である。從つて吾々は、吾々が一生涯を眞劍に生拔く事は嚴肅にして安泰なる大往生をなす事であり又大往生を遂げるには現實を眞劍に生拔かなければならない事を知る。これと同樣に、吾々は覺醒中の心遣りのない純一無雜な努力こそ最も根本的な、しかも唯一の安眠法である事を知る。蓋し吾々の生活において死の本能が生の本能と等しい意味をもつ樣に、睡眠も覺醒と等しい價値を有するのであり、又一日（朝晝夕夜）は一年（春夏秋冬）の縮圖であり、一年は一生の縮圖でもあるので、就眠時、特に十二月三十一日の夜は死の嚴肅なる瞬間にも比すべきものである。

健康なる睡眠が健康なる覺醒と關聯する如く、不健康な睡眠は不健康な覺醒に伴ふものである。卽ち快夢を伴つた貪眠と共に惡夢を伴つた不眠は不健康な覺醒の證據である。貪眠と不眠との兩傾向は共に覺醒中に、本能が自我によつて實現不充分な結果であり、卽ち本能が無意識定着されて、自我が軟弱になり、現實を甘く視過ぎたり、或は超自我の强い者はそのために現實を甘く視過ぎる事に罪障感を感じ、本能が覺醒中に自我の現實的奮鬪によつて實現せられないと、それが睡眠中に夢となつて空想的に滿足せられるのである。フロイド博士は「夢は願望の滿足である」と喝破してゐる。その際に超自我とエスとが妥協し、巧妙な夢の作業たる象徵化の方法で檢閱作用が弱められ、快夢として充分に願望が滿足せられると貪眠の傾向となり、又超自我が自我と妥協し、睡眠中も尙その檢閱作用が緊張してゐるが、本能たるエスはそれに抗して願望を滿足せむとし、その間にある自我は夢の作業によつて超自我とエスとの相鬪ふ傾向を調定し安眠に到達せむと苦鬪してゐる狀態が惡夢を伴つた不眠の狀態である。後者に對しては旣に不眠症と言ふ用語があるが、私は更に前者に對して貪眠症と言ふ用語を使用する事をこゝに提唱して置く。不眠症と貪眠症との關係は丁度神經症と精神症との關係と同じである。文化現象或は民族心理において東洋人が精神症的であるのに對し西洋人が神經症的であると言ひ得るとせば、又これを換言して東洋人は貪眠症的であり、西洋人は不眠症的であるとも言ひ得るであらう。神經症や不眠症は自我がエデイポス期（幼兒期）に退行した狀態であり、苦痛が伴ふが、精神症や貪眠症は自我がエディポス期以前（乳兒期母定着）に退行した狀態で、快感が伴ふものである。從つて、

前者よりも後者の方が症候として深刻であり、病氣へ逃避する快感利得が多く、治療も困難である。何故ならば、自我が全くナルチスムス的に成り切り空想城に籠居して、一向に外界の對象にリビドーを纒綿せず、コムプレクスを轉嫁、投出しないからである。不眠症や貪眠症、或は神經症や精神症を如何にして治療するかと言ふに、先づ第一に强烈な刺戟を與へて自我を現實的に覺醒せしむる事が必要である。その爲めには、その刺戟も病氣へ逃避した原因に遡り、それに卽應してゐなければ效果がない。卽應してゐれば、腦が器質的に破壞せられてゐない限り、必ず刺戟の效果があるもので、效果があれば、自我が逃避から現實へと轉換し、その際苦痛不快な經驗が反復され、それと正面から取組む事が可能となるのである。第二には抵抗を克服する事が必要である。理論鬪爭を吹掛けるのは一種の理窟付けで、抵抗である。之の抵抗はエスの側から發せられるものである。第三に抑壓を解除する事が必要である。抑壓と言つても、それは現實の必要から發するものではなく、無意識的なものを言ふのであつて、これは超自我の側から發せられる。禪門で「不立文字、敎外別傳」を掲げるのも第二の様に抵抗の一種たる理窟付けを防ぐためで、知解に墮する事を嫌ふのがそれである。又「大道規則を存せず」とか「行かむと要すれば卽ち行き用ひんと要すれば卽ち用ひよ」と言つて第三の様な抑壓解除に意を用ひてゐる。更に第一の如く自我を覺醒せしむるために、或は棒喝を行じ、或は所謂禪問答を行ふが、これは抑壓の解除や抵抗の克服にも役立つのである。棒喝や禪問答が不可解なのは、それが無意識に應じて行はれるからで、この東洋的象徴主義は精神分析の科學的說明とよき對照をなす。しかし目的においては全く一致する。以上は不眠症や貪眠症を治療する方法で、消極的方面であるが、更に積極的な安眠法を考へてみやう。

積極的な安眠法とは、畢竟積極的な自我實現法である。換言すれば、大地を掘つて鑛產物を搬出し、或は耕して農產物を獲たりする様に、本能（心理的大自然力）を自我（心理的社會性）として實現し、或は超自我として昇華する爲に積極的に努力する事が唯一の安眠法である。かやうに人生の海を滿帆を張つて航海出來る人は、心に一點の想ひ遺す事もないから、何時死なうと、又何時まで生きやうと氣にかゝらない。これが眞の極樂であり、生死一如の大往生であらうと想像される。かゝる心境に到り得れば、睡眠に關しても唯だ「睡くなれば眠る」と言ふ事以外に問題はないであらう。「聖人に夢なし」とはかやうな心境を言ふのであらうか。佛敎ではかゝる大往生卽ち安眠の境地を佛像において藝術的に表現してゐる。卽ち蓮華（胎盤の象徴）上に佛が安坐してゐるのは安眠の心境を象徴したものであり、更に又佛が兩掌を示し、片方は指端を上向して高く保ち（施無畏印）片方は指端を軟かに下向して低く保つてゐる（施願印）のは、超自我と自我とエスとが完全に統一された境地を示すものである。施願印はエスが抵抗なしに自我を通じて現實化される様に超自我の抑壓解除を示すもので、又施無畏印はエ

への抵抗が克服された境地を示すものであらう。これは正に分析者の態度と完全に一致する。これは私が以前から直觀してゐた事であるが、今では確信して言ひ得る様に思はれる。そしてかやうな境地が健康な覺醒（努力）と睡眠との統一であり、又生死一如の心理狀態であらうとの想像にも確信が持てる様に思はれる。最後に繰返して言へば、最善の活動こそ最良の安眠法である。

（一五・一一・二八）

夢と睡眠（Dream: A. A. Brill）

平野直人譯

夢は我々の精神的傾向の眞の通譯者であることを余は信ずる。然し夢を品定めし理解するには、技術が必要である。――モンテイヌ。

夢は總ての正常の人に於いて見られるものであるが、それにも拘らず正常の意識過程から懸離れる第一歩である。夢は何時の時代にあつても常に非常に興味のある問題であり、ずつと昔から色々考へられて來た。夢は、日增しにそれに注意しゆく現代文献には勿論、あらゆる昔の書物にも、夢に就ての言及が在つた。

注目す可きは、夢に關する文献に於いて實に樣々の觀念に逢著すると云ふことである。喜ばしい事に、その或るものには、學問らしい徵候さへも見られるのである。最近の文献は、個々の特定の問題が調査されてゐるので、特に有益であり敎へられるところが多い。然しながら、大抵の材料には夢の性質や意味についての、明瞭な、判然たる概念が殆んどない。古代の人々が、夢をば全く或る外部の力に歸した事、卽ち夢は惡魔か神自身のせいであるとしてゐた事實を讀者は御存知の筈である。聖書には、「神が成さんとせしものをファラオに示せり。」とある。ギリシヤ人は夢を司る善玉惡玉の神がゐると考へてゐた。かゝる考へは傳統的に我々の上に懸つて來た。そして夢に關する現在一般の信念は、古代ギリシヤや古代エヂプトの信念と少しも異つてゐないと言へる。一般人の間では、今尙夢を重大に考へてゐると言ふ事は注目に價する。ヨーロッパに於ては賭博をする連中は、大抵夢判斷の本を持つてゐる。彼等は夢と一致する數字を出し、若し勝てばそれを夢の故にする。

外的及び內的刺戟と夢

誰でもが夢を見てゐるのである。自分は夢を見ないと思つてゐる人でも、實はやはり見てゐることは、非常に簡單な實驗ですぐに判明する。そんな人は寢る前に、若し夢を見たら必ず思ひ出すぞと決心して寢る事だ。さうすれば翌朝、自分も夢を見る人間である事が分るだらう。私は、初めの中は絕對に夢を見ないと主張してゐたくせに、直きにその主張を變更せざるを得なくなつた多くの人々を知つてゐる。

夢は胃が惡くて起るのだ、と信じてゐる人がある。この考へがどんなに違つてゐるかと言ふ事は、夢を注意深く硏究し、觀察することにより容易に判明する。胃の條件は夢の心理的決定素とは何等の關係も持つてゐない。然し若し睡眠が妨げられると、妨げられない時よりは夢がよく想ひ起こされるのは事實である。何故ならば、夢を見てゐる人が夢幻的又は朦朧と通常呼ばれてゐる狀態、卽ち夢を想起するのに最も都合のよい狀態へと入るのは、その時であるからだ。この事實は一般人の夢の考へ方を說明するものである。人々は通常自分の睡眠が妨げられた時に夢を見ると思ひ、その爲に夢の現象の起源を胃の條件に結びつけてゐる。

然しながら、內的及び外的刺戟が夢を起させる事は疑へない。例へば、目醒まし時計を枕頭におけば、起きて自分が夢を見てゐた事が分る。然し之等の刺戟は夢の心理的內容迄は決定せず、單に夢を誘引するのみである。同一の刺戟體が、異れる場所で、異れる夢を、異れる人に誘引するものであることは、多くの硏究者の實驗により確證されて、廣く知られてゐる事實である。かくて、刺戟體として働く目ざまし時計にあつては或る人は日曜の朝早く自分が敎會に行き、敎會の鐘の音に聞き入つてゐる夢を、又或人はブリキ鑵の一杯つまつた車と自動車との衝突してゐる夢を見るかも知れない。此處で注目すべき大切な點は、一瞬間の刺戟に依つてさへ、それを記述するに三十分も要する樣な夢を見ることがあると云ふことである。

數年前バリー發行の『哲學評論』に、或る夢について、その夢を見た人が次の樣な面白い說を述べてゐた。「フランス革命最中のことであつた。彼は國民議會の會議の席上に在る自分を見た。王室の人たちが續々とそこへ引き出されて死刑の宣告を受けた。彼等は馬車につまれて行き、ギロチンで首を撥ねられるのを、彼は見る事が出來た。突然今度は彼自身がある罪に問はれて逮捕された。彼は議會に現はれて己を辯護した。そして自分の成した辯論、如何にして檢事と爭つたか、如何にして死刑を宣告せられたか、等をよく覺えてゐた。彼は直ちに二輪馬車につまれて牢獄からギロチンへ送られ、次いで刄が首の後を打つたのを感じた。そこで彼は眼をさまして見ると、寢臺の板が落ちて頸筋へ當つてゐた。」

當然此處で起つて來る問題は、如何してこんなに短かい刺戟がこんなにも長い夢を生んだのだらうか、といふ問題である。

その夢はどの位時間が懸つたのか、又書付けるにこんなに時間を要する總ての材料を、たつたこれ丈の二三秒の間に如何してつめ込む事が出來るのだらうか。板が頸筋に當り、彼が目をさまし、そして夢を思ひ出したのである。それに對しての說明がたくさん提出されたが、夢を一般的に解くに成功したフロイド教授を除いては、何人もこの機制を確實に說明出來なかつた。分析により、その夢を見てゐる人がフランス人である事が解る。少年の頃彼はフランス革命の事を讀んだ。そして總ての少年と同じく、この騷然たるロマンチックな時代を忘れ得なかつた。私は嘗て他のところで同一化の心理的機制に就いて述べたことがあつたが、その時同一化とは、我々が愛したり尊敬したりする人の生涯を自分自身の生涯のやうに思ひ込み、際立つた本能感情を味ふのだと述べておいた。讀書に於て我々は通常男主人公女主人公を選び、彼等に對して著しい興味を覺えるのである。時折はまた自己を惡黨と同一視するとさへ私は敢て言ふのである。我々は如何なる個人にもせよ、その人と同一化してゐる時には彼と共に深く感じ、彼の深遠な哀しみや喜びの瞬間を彼と共にするものである。謂はゞ彼の生活を生きてゐるのだ。劇場で物語りの中の好きな人物の深刻な悲劇に對し淚を流すのは一向珍らしくないことである。自己を他人の生活へ投出する氣持。卽ちより深い經驗に對するこの深刻な力强い同情の念は、全然無意識のものであり、生涯續いてあるものである。アメリカ・インディアンのことを讀んでゐる少年は、剛氣で勇敢なインディアンか、スカウトと自ら一身同體になつてゐるであらう。自分達の生活の道を或る本か、又は特殊の著者の一聯の書によつて定めた、多くの婦人達が私の處置を受けに來た。その婦人達は無意識的に、時には意識さへして、自己の生活を、物語の中に描寫されてゐる性格、特に强く彼女等にアッピールした特別の性格に從つて支配した。

さてこのやうに、同一化の機制により我々は、我々にアッピールして來る總ての場面や立場に對して、或る種の本能感情の熱と調子とを賦與する事が出來る。嘗ては非常に我々を亢奮させた或る場面や立場は、一見忘れられた樣に見えるかも知れないが、夫は常に無意識の中に停まつてゐて、我々の一番奧の思想や感情に根ざして我々の一部分とさへなつてゐる。如何なる意識的、或は無意識的の聯想も、それを以前の鮮明さを以て我々の心へ引戾して來る。

右の夢を見た人の場合もその通りである。少年としての彼は革命の話を息をもつかせぬ樣な興味で耽讀した。ギロチンで首を撥ねられた不運な人達は特に彼を感動させた。彼は彼等の立場の悲哀、恐怖、戰慄を一杯に吸收した。そして今板が彼の頸筋へ落ち、それの聯想により、昔讀んだ物語の立場全體が非常にはつきりと、それにまつはる感情をさへも伴つて、呼び戾されたのであつた。死刑執行に關する思想と感情は心に深く刻まれ、その場に於て外部からの刺戟で表面へ出たのであつた。そ

の行動は我々が劇場内に於て見出すものと同一の物である。即ち、舞臺監督がボタンを押して、道具方が適當なる場面を繰出すのである。外的刺戟が偶然的の聯想によつて、以前に強く感じた觀念や情緒の全體を繰出すための役目をする。

内部からの刺戟も同じ様な働きをする。例へば若し諸君が五年前に胃に感じた感覺を今日胃に感ずるなら、昔と何處かしらん似た夢を見るのは、有りさうな事である。この事を心得て置くと、或る人が或る種の夢により、自分が病になるらしいと豫言し得ると云ふ事實を説明する爲に、超自然的理由を探して來る必要がなくなる。自分が病になつたと氣付くずつと前に、例へば鼻とか咽喉の粘膜が非常にはれて痛みだす一寸前に、充血が起り、過去の似た狀態を思ひ出させる聯想を心の中に起させる。それ丈で人に病の夢を見させるに充分である。一人の婦人は實際に頭痛がする前は、何日でも同じ型(タイプ)の夢を見た。この現象は日常の生活に於いても異つた形で見られるのである。或る病苦――かりに週期的に起る頭痛としておかう――に就て私に話をする患者は、三ヶ月もその頭痛が起らないので嬉しいと語る事がよくある。私は之を聞いて少しも嬉しくない。と言ふのは、こんな患者がその頭痛に就いて語るその事が、頭痛の起らうとしてゐる前兆であり、而もそれを明瞭に意識してはゐない事が分るからである。果然、翌日になると頭痛をうつたへられるのだ。病といふものは突然現はれ出るものではない。人が意識的に自分が病氣だと氣付くずつと前に、その健康狀態の心理的意味に就いて無智な人に前兆の感じをもたらす處の、意氣消沈と不快の感じを、ぼんやりとではあるが感じさせるものである。その事に依つて疑もなく、原始人にあつても現代人にあつてもくしやみの後では惡魔ばらひをやると云ふこととの説明がつく。原始人はくしやみが始ると病が起る、故に殆ど總ての病は鼻風邪から始まる事を經驗から會得したに相違ない。原始人は現代人よりも、肺炎その他の傳染病に打ち勝つ場合が少かつたに違ひない。それで、くしやみは必ず最後には命に關るやうな病を伴なうので、自然呪文によつてそれを防がうとしたのだ。この事はくしやみの儀式につき、ウォレス博士の「くしやみのロマンスと悲劇」と云ふ面白い論文よりも、一層簡單に又事實に近く説明し得てゐると思ふ。

精神的生活に於けると同じく、肉體的生活に於ても、或る種の反動が生れるには或る種の刺戟が必要とされてゐる。諸君の中で心理學を專門に研究された方は、感覺の強度に對する刺戟の關係に就いてのウェーバー、フェヒネルの法則――感覺の強度は刺戟の強度に比例する――を思ひ出されると思ふ。我々が患者を檢査する時、特に患者の注意の度合を確めようと思ふ時に行ふ實驗の一つは、非常に迅速に彼等にいろいろの繪を見せる事である。そしてその繪はほんの二三秒間丈見せて引込める。そして彼等に何の繪であつたか尋ねるのである。大抵の人は最初何の繪だか分らなかつたと答へるだらう、然し何でも思ふ通

りに云へと強ひると、彼等は皆大體その繪の事に近いものを云ふ。私が日本の場面を見せると、彼等は最初何か分らないと言ふ。是非考へて見る樣にと言ふと、「さあ、支那の事だと思ふんだが。」と言ふ。彼等は意識して繪を見てゐなかつたとは言へ似通つたものには氣がついてゐる事がこれで解るのである。諸君に向つては、地下鐵の中でしやべる程、聞いてもらふ爲にがなり立てる必要はないだらう。然し若し私が小聲でさゝやいたら、諸君は聞き取り得ないかも知れない。だが刺戟は存在し音もちやんと在るのだ。言葉を代へれば、諸君は見る前に既に見て居たのであり、聞く前に既に聞いてゐたのである。併し刺戟は諸君に感覺の意識化を感ぜしめる程に強くなかつたのだ。

因みに、若し諸君が心理學に於けるこの重要なる法則を覺えてさへゐれば、人々が通常非常に重要だと考へてゐる多くの出來事を理解する事が出來ると云つておかう。例へば、「噂をすれば影」と云ふ諺が度々本當になるのはどう云ふわけかと諸君はよく訊かれるであらう。實は諸君は噂の人に就て語る前に彼を見るか彼の事を聞くかしてゐるのである。我々の感覺は我々が通常考へてゐる以上に我々に物を知らせると云ふ事を忘れずにおけば、その感覺は殆ど信用せられずともなほ自ら作用し、我々が實際意識するはるか前に、我々に知識を與へるのである。鋪道を友人と語りながら歩いてゐる時、突然諸君の頭に或る聯想を起させる何物かゞ過去る事があらう。諸君は實際に意識して見たのではないけれども、何となく或る男に就いて語り始めると、驚く可き事には、諸君の前に眞實の彼が立つてゐるのである。「噂をすれば影とやら。」然し彼は諸君が實際に彼を見るよりはずつと前から諸君の視覺範圍内にゐたのである。

然し、私は次の如くつつ込まれるかも知れない。卽ち、「家に居て彼の事を話してゐたら、本當に彼はやつて來たのだよ。」と。通常我々は人が近づいて來た音を聞く事が出來、又而もその或る人をよく知つてゐる人を探すやうになるのに、その足音を聞き分ける事が出來ない。家に在つては我々は何時でも、誰がやつて來るかゞ分る。例へば、父親か、母親か、又は他の親しい人かゞ分る。之を根柢として次に述べる特異の一例を說明出來る。卽ちその例は「永い間音信不通になつてゐた女の人から手紙を貰つたが、不思議にも昨日その人の事について話をしたばつかりだ。これはどう云ふわけであらうか。」と云ふのだ。調べて見るとその事情は何等不思議でも靈的でもなく、或る同じ様な機制の含まれてゐる事が解る。諸君は既に或る時期に心の中でその人の事を、或る種の關係で考へてゐたのだ。その或る種の關係と云ふのは、所謂「催眠後の暗示」と云ふ言葉で云はれてゐることである。つまり一定の時が經つと、過去に受け入れられた或る印象が再び起り、古き聯想を呼戻すのだ。

夢は眠りの守り神

夢の奥底に存在する性質と意味とは、フロイド教授がその學說を提示するまでは分らなかつた。あらゆる種類の解釋が下されたが、一般的な根本概念は全くなかつた。患者を分析するに當つてフロイド教授は、患者達の全部が夢を見て居ることを知り、かくて「夢とは心理的機制であらうか、或ひは個人の心理生活に何等關係を持たぬ單たるノンセンスであらうか?」と云ふ疑問が起きて來た。それに對する答へには根本的概念が含まれてゐた。卽ち心理的及び精神的の双方の生活に於て、總てのものには理由がある。物理的分野に於けると同じく、心理的分野にも何かの機能を持たぬものはない。涙は單に泣く時の爲のみならず、絕えず眼を洗ひ濡ほしておかんが爲にも存するのである。涙なしでは眼はほこりで一杯になり、視力を失つてしまふ。汗線は體溫を平等にする爲にあり、唾液は通常嚥下力と消化力を助ける爲にある。それと同じ理由で、心理機能もその存在理由を持つてゐる。そこで「何故夢を見るのであらう。」と云ふ事が問題になつた。フロイドは夢の問題に關する文献を徹底的に調べたが、そこからは何も得られなかつた。彼がその問題の解釋の到達に向つたのは、患者の徵候をぐん〲深く洞察し、夢との深遠密接なる關係を見出す點にあつた。彼はやがて、夢とは完全な心理的機制であり、氣まぐれなものではなく、個人の心理生活と一定の關係を持つてゐる事を知つた。彼が夢を深く探れば探る程夢の智慧と隱れて居る秩序の感覺が一層現はれて來、遂には「夢は抑壓せられた願望の祕かなる充足なり。」と云ふ說を形成した。言葉を代へれば、夢は人が覺醒狀態では實現出來なかつた願望である。

さてこの結論に就いて說く前に、夢の機能をもう一度眺めて見度い。晝間我々は凡百のことを考へる。何百とも知れぬ思想が精神を通つて走り行くと言つたとしても誇張ではないと私は確信する。卽ち、それ等の思想は何時の間にか過ぎて行き、我々はそれ等を意識さへしないのである。然しそこに我々をして沒頭せしめる問題が常に起つて來る。若し何等かの問題が我々の注意を強く引いてゐるとしたら、我々は寢に就く事が不可能であるのは良く知られてゐる事である。諸君御存知の如く、何か強い或は鋭い情緒は、それが快樂の感情だらうと苦惱の感情だらうと、我々を眠らせないのは事實である。非常に意氣の揚つてゐる人は眠る事を欲せず、そしてその事の爲に眠る事が出來ない。と言ふのも、彼の五官が餘りにも活氣づき興奮してゐるからである。眠らんが爲には、總ての器官からあらゆる感覺を除去する事が必要である。我々はくつろがんが爲に眠るのである。それで、總ての感覺的刺戟を排除せんが爲に光を消すのである。實驗によれば、眠りは通常、感覺刺戟が上述の如く除

去されると起つて來る。あらゆる感覺的印象を排除してやると、動物は眠りに陷るのが普通である。かくして、心を占めるやうな問題があると、眠られない傾向がある。さて、我々をして眠らせないでおくものは一體何であらうか、それは通常、我々には捕へられなかつたものであり、解く事が出來なかつたものである。人は自ら次の樣に考へながら何かの問題を解くのである。卽ち「若しやり通せたら幸福だし、又私の幸福は保證されるだらう。しかし若し出來ないとどうして良いか解らない。自分の地位も失ふし家族も養つて行けない。」と彼は寢に就きながらその問題に氣を取られる。若し眠る希望がなかつたら彼は一晩中その問題を氣に續けるであらう。そこで實際に起るのは、心が問題を取り擧げてそれを夢に組直すことである。その時その夢は願望を實現し、かくして睡眠が可能となるのである。

一度問題が解けると、その問題にそれ以上とらはれて居る必要はないと云ふ事は、我々が日常生活の中にしつて居る事柄である。問題なのは單に存在する問題の解き方如何である。子供が泣きながら眠りに就く。人形が欲しいのである。母親はその欲するものを與へることによつて素早く子供を鎭める。それ迄はそれで好い。しかしその同じ子供が今や成長して、母親が簡單には協へてやれないものを欲する樣になる。その子は欲するものを持つ事なしに居なくてはならない。然し子供に眠りの願望が起きて來ると、問題は別の方法で解決される。自然は我々の願ひを如何にも充足させてくれたかのやうに見せかけて、我々を眠りの中に落着かせる。子供は今や現實には得られなかつたものを獲得した夢を見る。之と同じ樣に、我々も今夜非常に鹽辛い料理をたべて後に眠りにつくとすると、疑ひなく夜中に水が欲しくなるであらうが、然し若し部屋でも寒いと、なるべく眼はさまさないで、何か清涼飲料水で咽喉をうるほしてゐる夢を見るだらうし、又若し我々の體質がもつと都合よく出來てゐると、何かもつと強い誘惑的な飲料で渇を醫して居る夢を見るであらう。之は極めて普通の「都合のよい」夢である。我々が空腹のまゝで寢に就くと、何か食べて居る夢を必ず見るであらう。私はかつて北極へピアリーと連れだつて赴いたマクミラン教授と語り合つた事があるが、氏は夢の中で二人で、實に大きな快樂をもつた事を私に語られた。理由は至極明瞭である。ニューヨークのレストランの美味な料理を知つて居たこの二人が、肉膏だとか素朴な北極地帶の食物を食べて生活するより外はなくなつたわけであつた。彼等は夢の中で高級な葉卷をふかし、ハイボールをのんだ。子供達は自分等がおきて居る際貰へなかつたものゝ夢を見るとよく云ふ。兒童の夢と成人たちの例の「都合のよい」夢とは、かくして、腹藏なき願望である。然し夢がこの型でないものである時、事態は全く異つて來、こゝに於て我々が夢を理解するのに非常な困難に直面する。

夢が如何に睡眠を守護するものであるかを理解するために、次にのべる一會社員の場合を共に考へて見よう。彼はその會社

に數ヶ年働いて居り、才能は認められて居たが、その會社の計畫されて居る改革が行はれると、彼にとつて椅子がなくなるのが明らかであつた。新たな組織の中に止まらうとする爲には、自分は新組織の中に於ける一要因であり得るし、又自分が處理する事の出來る特別な部門が有ると示ふ事を示さねばならない、さもなくば自分が椅子を失はねばならぬことは分りきつたことであつた。彼は翌朝評議員の前で披瀝すべき計畫をたて、絶えずその問題を考へながら寢につく。彼は自分がその重役連の前に居る姿を想像し、二人の反對者の議論を豫期し、如何なる最上の答をしようかと考へて居る。時計が一時を、二時を、三時を報じたが、彼は未だ眠れない。然し遂に疲れ果てゝ眠りに陷ち、次の樣な夢を見た。——彼はニューヨーク灣内で板に乘り、それを恰かも立派なモーターボートのやうに自分で操縱しつゝ泛き廻つて居る。汽船が出入りして居るが彼は少しも慌てない。大きな船が近づくと何時でも彼はそのコースから非常に器用に漕ぎ出るか、波にのつて安々と樂々と進んでゆく。彼は水の上の遊戲を非常に樂しんで居る。——彼は滿足の感情をもつて眼をさました。翌日、彼は私の所へ來てその夢が一體如何なる願望を表はして居るのか不思議がつた。私はたゞちに夢は必しも腹藏なき願望とは限らず、抑壓されたる願望の祕かなる實現であると告げた。解釋は極めて簡單である。彼は翌日、私が前に云つた樣に、評議員の前へ行き、その前でその會社の改革に對して自分のプランを示す事になつて居た。若し彼が評議員達に自分の計畫を納得せしめる事が出來ないと、自分は椅子を失ふ運命にあると云ふ事をしつて居た。又その上或る重役連は自分と相容れず、如何なるプランを彼が提出しても見向きもせず、反對を唱へるであらう事も知つて居た。又一方、大部分の委員たちは彼に好意を寄せて居る事も知つてゐた。眠りに就くのに時間がかかつた。彼の心が絶えずその事態全體に拘泥して居たからである。彼は夜中眠りたくなかつたかも知れないが彼は疲れて睡眠を欲したので、己れを惱まして居る問題は何等かの方法で解決されねばならなかつた。これは彼の本能感情的に高調されてゐる觀念を、彼の願望の成就として夢に織り出す事によつてのみ果され得た。その夢に就いて何を想ふかと尋ねた所、彼が少年時代にオハイオ河で水泳競爭大會があり、それに出場するのを常として居て、その大會で彼が非常に有能であつたと語つた。こゝでお解りの如く、彼は如何にして重役連（ボード）を制壓しようかと考へて居た爲に、自分が實際に船板（ボード）を巧みに處理し、勝利を得たと云ふ過去の一場景が彼の前に現はれて來たのだ。"double entendre" 即ち一語兩義の機制に依つて彼の心に、船板を完全に操縱した少年時代からの一場面が再びうつし出されたのであつた。夫は固より別のボード(board) であつたが、そんな事は無意識にとつては大したことではなく、重要な事は彼が總ての障害を克服して夫を導いてゆく事が出來たと云ふ事である。その夢に依つてたゞに彼は眠れたばかりでなく、翌日の不安に對しての苦痛が彼の遠い過去

の快い感情によつて置き換へられた。かくしてこの夢は睡眠の生産者であると共に保護者でもあつた。

上にのべた夢から我々は夢の分析に於ける第一の困難にぶつかるであらう。卽ち、夢の言葉は視覺的であると云ふことである。我々は影像を見、觀念を象徴で表現する。覺醒狀態にあつて「見る」(to see)と云ふ語は文字通りの意味と共に「理解する」と云ふ幾分比喩的な意味にも使はれてゐるが、睡眠狀態ではそれは全く文字通りの意味で使はれてゐる。我々は夢の中では論理上の意味に於て考へる事はしない。我々は過去に自分の心に蓄へられた影像のつながりを單に見て居るだけである。さもなければフランス革命の夢を見た人があのやうにほんの數秒の中に、かくも多くの考へを凝縮するのは不可能であつたらう。その夢が實際に成した事は、彼が實際に歴史の書物から拾ひ集めた繪、或ひは彼が讀本に熱中して居る間に彼自身の想像がこしらへて居た繪を甦へらす事であつた。

夢に於ける抽象觀念はたゞ寫像的にのみ表はされうる。この點に於て、夢は兒童か藝術家の如く行動する。私は多くの人々に例へば慈善と云ふ抽象觀念を如何に畫布の上に、或ひは大理石に表はすかと尋ねて見たことがある。ところがかう描寫すると云つて全く同じ答をした者は二人とはなかつた。彼等が常に自分の心に思ひ浮ぶ最初のものを描寫する事は注目に値する。或る人は「やつれた老衰せる女が肩かけで肩をつゝみ、手を差しのばし、それに對して身なりの整つた婦人が小錢を與へて居るのを想像するかもしれない。或る人は、ボロを着て凍へて居る小さな乞食女の子と、それに對して憫みを與へようと立停つてゐる紳士とを見るかもしれない。かくして繪は人によつて夫々に異る。併し分析が示す重要な事は、總ての人が例外なく自分が以前に經驗した事を何か再出すると云ふ事である。例へば、右に述べた第一の描寫をなした人に、何が彼にその繪を思ひつかせたかと尋ねた際に、彼はイタリー旅行で自分が實際に或るアメリカの婦人がイタリーの乞食を助けて居る、かゝる場面を屢々見かけたのを思ひ出した。誰でも抽象的な觀念に對して自分自身の思ひ出の像をもつて居る。そして夫が無意識とは云へ、彼にとつて獨特の特別な意味をもつて居り、その元の型で夢の中に表はれて來る。

かくして私の患者の一人は、哀しみを持てる女として知つて居る一婦人のことを夢に聯想した。と云ふのは、彼は覺醒狀態では彼女の事を「葬ひの鳥」と思つて居たからだ。同じやうに、人々はその夢の中に如何なる立場(その立場は彼の心に於いて或る觀念や情緒を代表してゐる)をも或る種の感情や氣分に對する象徴として利用する事がある。夢をば或る特殊な人の心に於いて特殊な影像が表はすところのものゝ知識を以て他の人の夢を解釋するのが過りであると云ふのは、このためである。勿論それに一定の意味を歸することの出來る人種的象徴を示す夢があるにはあるが、これ等のものに對しても細心の注意を拂

はねばならない。それ等も個人個人で異つた意味をもつて居るかもしれない。言葉を換へて云へば、夢を見る人の事が分析者によく分つてゐないと夢の意味は解らないのが普通である。

次に示す夢は、如何に抽象的な考へが夢の中でがつちりと視覺化されるかの見事な例である。S孃は「その中から煙がたつて居る非常に高い建物の所を通つてゐた。その時焰がめら〳〵と出て來て、非常に熱く感じた」と云ふ夢を見た。

分析＝S孃は戀愛に於いて行き惱んでゐる。彼女は立派な敎育をうけ、聰明で、顏立ちもよいが、一般の青年とつき合ふには餘りにも遠慮勝ちである。彼女に好意を持つ人は多かつたが、何うしたわけか適當な男性が見つからなかつたり、話が結婚へと進展しなかつたりした。その夢を見た前日、彼女は或る友達を訪問した。その友達は彼女に好意を寄せてゐる一人であるTについて冗談を云つてからかつた。Tさんはその友達に云はせると「着實な來訪者」であり、何時婚約を發表するか知りたがつて居た、など聞かされた。S孃は當惑して、その噂は全然出鱈目にすぎないと云ひ張つた。しかしながら祕かに彼女はTが結婚してくれるかも知れないと云ふ考へを懷いた。二人の會話はその友達の口から出た重要なる言葉で終つた。彼女の云つた言葉とは「火のない所に煙はたゝぬ」と云ふのであつた。夢が彼女の願望を充足したのである。非常に高い建物とは彼女自身である――彼女は非常に脊が高い。彼女は煙を見、ついで焰を見、非常な熱さを感じる事が出來る。「火のない所に煙はたゝぬ」の格言がその夢によつて單に具體化され、その夢見る人が、その夢の主役であるので、彼女は高い建物(ビルディング)となつた。我々もよく知つて居る如く、建物とか家とかは體に對する昔からのシンボルである。我々はよく自分の身體の事を自分の住む家として語る。火と熱とは愛の象徵である。

火と愛と同一視する事の興味ある例が、モーパッサンの一短篇中に見出される。卽ち多くの諸君は讀まれたと思ふが、『戸締りは嚴重に』の中にである。或る老獨身者が、その戀愛に於ける最初の實際の冒險が、戸締りを嚴重にしなかつた事のために失敗に終つた話である。彼は或る日戀人を私室に招いたが、弱つたことに、煙突がいぶつて居たため火がなかつた。彼は話續けて云ふのに「友達を呼んだすぐ前の日に、私は煙突の事を元店主の屋主にはなしたところ、彼は一日二日の中に煙突屋に云つてちやんとして貰ふと約束した。彼女が入つて來るや否や「煙突がいぶるので火がないんですが」と云つた。彼女は私の云ふ事を聞いた樣にさへ見えず「そんな事どうだつて好いわ、私もつてるんですもの……」と口ごもつた。

夢の言葉が視覺的であると云ふ事實は別として、夢の分析に際してもう一つの難事は、夢が何か隱されたものを表はさうと欲する時、我々が覺醒狀態にあつて何かを間接的に云はうとして用ひるのと同じ機制に依ることがある。卽ち、「一語兩義」

(double entendre)、歪曲、類似機制などを利用する。例をあげる必要もあるまい。例へば劇場に就いて考へて御覧なさい。又諸君が見聞きする種々の「しやれ」に就いて考へて御覧なさい。すると諸君は、何人も或る意味では正しく自己を表はして居るものはないことに氣づくであらう。文筆家は上品な社會に對し粗暴で厭味に響く何事かを云ひたい時には、あらゆる迂廻婉曲の辭令記號表示等に屢々頼るものである。かくして股とか杖とか云ふ語は、聖書にあつては、屢々男性の男性たるところを現はすに使用される。空腹の際に食物を攝るのを恥ぢたり、咽喉の渇いて居る時に渇を醫すのを恥づるものはない。それこそ「都合のよい」夢が大つぴらに出て來る理由である。然しそれは他の自然的必要物や性に關する場合には非常に異る。大概の人は性的衝動の一切の顯現を匿すやうに敎へられてをり、その結果、性に關する限りでは、總ての表現が間接的となり、覺醒狀態にあつても歪められて居る。例へば、月經と云ふ肉體的機能を誰も恥づかしがる必要がないのに、月經の事を婦人たちは「呪ひ」とか「お婆さん」とか云ふ風に間接的に表現してゐるのは注意すべきである。我々が性機能について語る際のこの祕密の言葉が我々を面喰はす事の非常に屢ゝあるのは、驚くに足りない。

例へば、一婦人が次のやうな夢を見たと云つた。「私は非常に不愉快な老婦人と眠つて居り、全くいやになりました。」と。彼女はどうしてこのやうな夢が願望を示すことになるか分らないと云ふのであつた。私が聯想に就て尋ねると、何も思ひ浮ぶことはないと答へた。この老婦人にあてはまる樣な人は誰も居ないと云ふのであつた。そこで彼女がその夢を見る前日にどんな事があつたかと尋ねた。夢の決定要素を最も近い過去に求める事を忘れてはならぬからだ。決定要素はきまつて夢を見た前の日の出來事である。五官の一つを通じて來る何かの刺戟か印象が心の中の何物かを、云はば、打つのである。するとその心の中はその何物か（本能感情的な）で一杯に充たされてゐるので、そのために夢が起きるのである。私はやがて、その婦人が前夜或る夜會に出席し、そこで或る男が日曜に乘馬に彼女を誘つたと云ふ事を知つた。彼女が續けて云ふ所によると、彼女は殘念ながらその招きに應ずる事は出來なかつた。どう云ふ理由でその招きを辭退せねばならなかつたかを尋ねると、暫く逃げて後、その日曜日に月經が來さうに思つたからと告げた。そこで私は彼女が如何にこの機能を云ひ表はすか尋ねて見ようと思つた。「そりやー私達は〝不愉快なお婆さん〟と云ひますの」と答へた。成程、これでこの夢の分析は出來たわけである。靑年が彼女を日曜に乘馬に招いた時、彼女は行きたかつたのだが、その日に月經を見るかもしれないので、不明確な答へを與へねばならなかつた。彼女は自分を解つてくれる妹に向つて云つた。「私、あのお婆さんが來さうに思へるの。」然し彼女は非常に行きたかつたので、旣に月經が過ぎた事、この不快事も通り拔けた事、例の「お婆さん」がもう彼女の許に來てしまつた

事に夢に見たのである。浅薄な檢査では夢が願望を現はす等と云ふのはナンセンスであらうが、一度夢見る人の心に起つて居るものを理解すると、より深い意味がはつきりしてくる。そこで夢を分析する爲に夢を見た人を好く知る事が絶對的に必要であると云ふ事を繰り返す次第である。しかも、よそゆきの彼のみならず、本當の彼自身を知る必要がある。彼の心底の個性と、云はば彼の慣用的表現とを知らねばならぬ。

如何に夢の分析が歪曲の機制によつて困難にさせられるかの例として、或る患者が私に話してくれた次の夢を考へて御覽なさい。「彼はラテン語を譯してゐた。私が whine（悲しい聲を出す）と云ふ語を使つたら、先生はそれは whine ではなく、when（時）だらうと云はれた」と云ふのである。分析により、夢に於ける先生とは私を意味し、私との分析對談により彼は再び學校へ行くことを思ひ出し、先生としての私の所へ來て尋ねて居るのを思ひ起してゐることが解つた。更に續けて聯想をとつて居ると、彼はやがて一週間前に、非常に氣がふさいだことを思ひ出した。彼は私の所へやつて來て、非常に不平を云つた。私は彼に哀しい聲を出す（whine）のではない、きつと好くなるから、しかし夫は單に時間（when）の問題なのだからと云つた。然し何故彼はラテン語を引張り出さねばならなかつたのであらうか。その事に就て彼の心に先づ來た聯想は、ラテンの時間になると彼は何時も神經を使つて居て、「虎の卷」を使用して居たことであつた。そこで私は彼が私の目をごまかして居るに違ひないと云ふと、彼はさうだと認めた。彼は私に打明けることが出來ないやうな感じのすることがあり、又人は醫者には何から何迄打ちあけねばならぬと考へるのは愚かな事だと云つた。お解りの樣に彼は又「虎の卷」を使用せんとしたが駄目に終つた。私は彼に悲しさうな聲を出すのを止めた時によくなると云つた。何時（when）か？　それは君が眞實を告げる樣になる時、君が「虎の卷」を使はなくなる時、君が外からの助力から喜んで獨立してゆく時さ」と云つた。

夢の中に見出されるもう一つの歪曲の例は次の場合に見られる。私の患者の一人は、自分の父親が家族全體に與へる習慣になつて居る例年の大晦日の晩餐に出席した樣子を話した。適當な時間に家族の頭が起立し演說を始め、そこで彼はいつもの溫和な調子で家族一人一人に就て語つて行つた。過ぎ去りゆく年の成行を一まとめにしてその老紳士は云ふのに「今年家族のためになつた事（asset）と、家族の迷惑になつた事（liabilities）とを大觀して見ると、諸君達は總て家のためになつたのであると云つた。こゝでその患者は苦笑しつゝ自分の事を考へて見た。「一體貴君の息子はどうです？　非常な迷惑を貴君にかけて居る家族內での黑羊である息子は？」この息子は父親にとつて全く重大な問題であつた。彼は家族の黑羊と思はれて居た。彼はやくざ者であつた。と云ふのは、彼は眞實を云ふことが全く出來なかつた。彼は第一流の病的噓つきであつた。この問題が

あつて後、その患者は自分が貸借對照表を見て居る夢を見た。資産（asset）の側には家族のものの名が已に出て居り、負債（li bilities）の方には息子の名だけあつた。然し liabilities と綴られる代りにその言葉は "Lie-abilities"（嘘つき能力）となつて居た。この夢に於ける歪曲は「しやれ」に見られたのと同じ性質のものである。例へばニューヨークの批評家は芝居を見、その第一幕第二幕は非常に好いと明らかに思ひ、第三幕は貧弱だと考へて、「最初の二幕は資本（capital立派）であり、第三幕は勞働（labonr苦しい）なり」と批評したが、この批評の云ひ廻しは巧妙であるけれども、このやうな技巧は夢では一向稀らしくないのである。（完）

（後記）右は友人荒川建夫君と私との共同譯である。こゝに記して君の友情を深謝する。（譯者）

不眠症への醫學的理解

高水力太郎

一、醫學から見た不眠症の條件

睡眠及び不眠症への精神分析學からの理解に就いては卷頭の二論文で殆ど盡されてゐると思ふが、醫學からの理解をこゝに紹介してそれへの精神分析學からの批判を加へて見ることも必要であり、且つ興味あることであらう。

新聞雜誌に散見してゐる諸家の醫學的見解を隨分澤山集めて見たが、何れも失禮ながらあまり要領を得たものはない。中に就いてやゝ優れたものと思はれたのは、昭和十年八月中の東京朝日新聞に揭げられた慶應醫科大學病院神經科主任敎授植松長九郎博士の說であつた。この論文の中に不眠の原因が四つ擧げてある。引用して見ると、

◇第一に身體的原因――更に細かく分けると、鼻がつまるとか、咽喉がはれたとか、或は肺炎とかで呼吸困難を來たすと眠れないものである。◇第二は血管及び心臟障害などの場合。

◇第三は胃腸障害の場合で、その理由は寢てゐる間に腹中に瓦斯がたまり、それが橫隔膜を壓迫して呼吸困難を來たす。

◇第四には泌尿障害――卽ち攝護腺肥大、膀胱カタールの場合、また凡ゆる種類の痛み、發熱、腦疾患（腦腫瘍の初期）などを眠れない。

第一のものだけに「身體的原因」と名付けるのはをかしくはないだらうか。第二も第三も第四も、全部が身體的原因に外ならぬのではないか、揚足とりをするやうに思はれるかも知れないが、かう云ふ常識的に考へてさへをかしいやうな分類方法を學問の内に取入れると云ふことは看過しておくべき事ではないやうに思へる。かく分類するなら、分類することの根據を闡明しておかないと、單なる分類のための分類に終始するのでは、學問的意義がないであらう。併し分類の根據は、第一は呼吸器系統の病氣、第二は循環器系統の病氣、第三は消化器系統の病氣、第四は秘尿器系統の病氣である。これだけ擧げれば、殆ど

身體のあらゆる部分の病氣が網羅せられたことになる。たゞ洩れてゐるのは神經系統だけであるが、それは精神的病氣による原因の内に入れられてゐるのである。

その精神的原因の病氣としては神經衰弱、ヒステリー、躁病などであり、第三には中毒性の原因によるもの、即ち亢奮劑、亢奮性飲料などを用ゐた場合である。即ち、不眠の原因としては、(一)身體的の病氣、(二)精神神經的の病氣、(三)中毒性亢奮などに分類せられる。これを要するに一切の心身の異常又は亢奮が不眠の原因になると云ふわけになる。して見ると、生理學的に不眠症の原因などを云々して見ても、一向意味のないことになるのではないか。生理學的には不眠症の條件は論ずることは出來るが、その原因を研究する方法は立たないと云ふのが、窮極の結論になるのではないか。その條件を研究することが全然無意味と云ふわけではないが、それは不眠症ではなく、單なる一時性の不眠狀態を除くためには(それも對症療法的に)意味のあるだけで、不眠症の原因は精神分析的に研究するより外に途はないと云ふことになるであらう。少くとも、今までの醫學の方法では結局不得要領なものになると云ふことを斷言しておいても差支へなさゝうに思へる。

二、不眠症の分類

次にその形態の分類であるが、(一)寢つきの惡いもの、(二)寢つきはよいが途中で眼の醒め易いもの、(三)寢つきも惡く、眠りの深さの足りないもの、以上三種が區別せられてゐる。これは植松博士ばかりでなく、他の醫家(例へば、原一徹博士、昭和十一年四月中、東京日々所載)も擧げてゐるところを見ると、醫家の間では一般に通用してゐる分類法であるらしい。併しこの分類法も全然無意味とは云はぬが、大して意味があるとは考へられない。第一寢付きが惡いと云ふのは、寢付いて了へば、あとは深く眠れると云ふなら、一つの種類として擧げておくだけの意味はあるが、植松、原兩氏とも、その點に就いては明言してゐない。たゞ寢つきのよしあしだけ擧げたのでは意味がない。恐らく大部分の不眠症は寢つきの惡い方であらう。第二の、寢付きはよいが、途中で眼を醒まし易いと云ふのと、第三の寢つきも惡しく、眠りの深さが足りないと云ふのとでは、結局眠りが淺いと云ふ點では同じではないだらうか。

私は不眠症を統計的に研究して見たことはないが、健康者でも何かの一時的原因に依つて大體右のやうな症候を一時的に呈することは確にあらう。寢つきは惡いが、寢てしまつたら深く眠れたと云ふやうなことは、我々にも、時々、酒や煙草の喫ひ過ぎ、會合などあつての亢奮の後などには時々ある。寢つきはよいが途中で眼が醒め易いと云ふやうなことも、明朝旅行に出

ゐると云ふやうな意圖があつて神經の緊張してゐる時には我々にもある。寢つきも惡く、眠りも淺いと云ふやうなことは、やはり何か重大な心配事などある場合には一般の健康者でも、時々は示す一時的症候である。

要するに、睡眠障碍の精神的原因があつて、睡眠の律動性、週期性に亂れが生じてゐる狀態と云ふ點では、以上三種類とも共通してゐることであつて、結局は精神的に原因があるのであらうと思はれる。その原因が精神的であると云ふことは、健康者の一時的症候に就いて見ると非常に判然としてゐる。これを以て病者の場合に類推することは固より尙早であるけれども、一概に根據のないことゝは云へない。何となれば、健康者と病者との間の現象的差異は認めるが、その本質的差異を認めないと云ふのが、精神分析學徒の立場だからだ。

そんなことを云つたとて、現に肉體的に故障のあるものが不眠に陷るではないかと云つて反駁して來る人もあるかと思ふが、併し、そんなことを云ふならば、肉體的障碍（大怪我）などのある人がスヤ／＼と眠る場合もあるではないかと云ふ反駁も此方からは出せるわけである。結局、肉體的原因によつて不眠になつてゐると思へる場合でも、それが不眠となるためには精神的作用が多く參與しなければならないと云ふ結論を下しても、大過ないやうに我等には考へられる。

三、醫學的療法

その療法について植松氏は次のやうに說いてゐる。

「さて療法に就いて述べると、元來眠りといふものは、動物の本能ではあるが或る程度までは習慣づける事が出來るから、子供の時から正確な時間を定めて寢かし、そして起すことが必要である。それから寢る時には部屋を暗くして音響を遠ざけしかも適當の濕度を保つやうに心をくばりたい。また晝寢をすると夜眠れぬとよくいふが、決してさういふことはない。故に神經衰弱の人は晝の邪念が夜になつて邪魔するのだから晝間腦を休めるため三十分乃至一時間寢ることを勸告する。また胃腸の惡い人は夕飯を早く食べること、殊にさういふ人は朝便所へ行つて排便するよりも夜習慣的にやつた方がよい。

神經衰弱者の人は何をするにも性急で、いら／＼して昂奮を高めるのだからこの種の人は一日の間に是非とも休息の時間を割り込ませることが必要、その他適度の運動（過度はいけない）入浴が大切だ。殊に寢る前に微溫湯に長く浸ることなどは最も効果がある。睡眠藥はねむりを助けるが、適度のものを選ばねばいけない。一般的にいふとモルヒネ、ベロナールなど習慣性となるものは用ゐて危險である。又藥の中には寢つきをよくするものと後になつて睡眠を深くするものと二種類あ

り、用ゐる人はこの二種類をうまく調合しなければいけない。それをせず、盲滅法に用ゐるため朝起きた時に、身體がフラ〳〵するとか頭が痛むことになるのである。また藥は個人的に分量も變へねばいけない。出來ることならば晝間起きてゐる間に鎭靜劑を服んで過敏性を少くしておき、夜寢る時成るべく睡眠藥をのまぬ方がよい。」

併しこのやうな方法で不眠症と云ふ難物が根治されるとは考へられない。說いてゐる植松氏にもあまり自信のないであらうことは明かである。その點に就いては、原氏の方が、も少し精神的意義の重要性を認めてゐることが分る。原氏は曰ふ。――

「不眠症の對策としては、先づ精神的興奮を來す原因を、出來るだけ除去する事が最も必要である。危惧、煩悶、心勞、自責、悲愁、失望等を來す家庭の紛糾とか、職業上の不滿とか、事業の蹉跌とかを出來るだけ早く解決除去するやうに努力せねばならぬ。これは當人だけでは非常に困難であるから、周圍から大に援助してやらねばならぬ。

これは非常に困難な事であるが、これが完全に目的を達した時には、永久的の治癒も望み得ることが出來る……原因的因子を去らないで無暗と藥品に依り睡眠を求めんとするのは最も愚策である。」

併しそれ位の事は醫師に云はれるまでもなく、患者自身の百も承知してゐることであらう。神經症患者殊に不眠症患者が睡眠藥を用ゐる態度を見てゐると、多くの場合、强迫性があるやうに思へる。中毒を覺悟の上で服用してゐるやうに見える事がある。またその藥に對する依賴心には多分の病理性があると云ふことを氣付かねばならぬ。それ等の點を不問に對しておいてたゞ徒らに「愚策」だと云つてきかせても意味はないであらう。原氏はまた「神經衰弱殊に過勞による消耗があるやうな場合には、一時職業を離れて靜かな場所に轉地すると好い。然し此の場合、海岸や高山は避けねばならぬ。それは却つて不眠を來す事が多いからである」と說いてゐる。私も同感であるが、原氏は何故に海岸や高山への轉地は不眠を來たすかと云ふ理由は述べてゐない。その理由は卷頭の二論文を讀まれたならば自ら明かであらう。

これに對し林暲博士(東京朝日、十五年八月二十日)は更に一層精神療法的な說き方をしてゐることを見出す。

「先づ眠るには餘計な恐怖を除き色々な小細工、工夫を棄てること、眠れなかつたら眠らぬ迄と覺悟を決めて、成り行きに任せることであります。死ぬ迄眠れぬことは決してないし、ウトウトしただけでも相當眠つたことになるのですから、少し眠つた時間が短いと思つても氣にせぬことです。それから一晩睡眠が足りなくて翌日不快な氣分でも、其の爲に自分がなすべき仕事を避けたり減じたりせぬこと、倒れる迄といふ位の積りでやるだけのことはやらなければいけません。それで案外自信を取り戾し、又次の睡眠を容易にすることになります。」

一讀して森田正馬式方法であることは明かに分る。森田療法は醫學的方法ではなく、既に精神療法であるのだが、多くの醫家はこれを醫學だと思つてゐる。森田法に就いては我等はこれまで幾度も批評を加へて來たが、その意義は幾分は認めるが、理論的根據のない點が如何にも惡い意味での日本的である。これに理論的根據を與へ得る人材が森田門下にないならば、分析學派の方からこれを提供してあげてもよい。併し森田療法で不眠症が根治出來るとは我等に信ぜられない。

森田派の古閑義之氏は不眠治療を說いて次のやうに述べてゐる。

「一旦不眠を氣付けば神經質の人は欲張りだから、こんな事では能率は擧らぬ、すつかり治してから勉强をやらうと考へるやうになるのは當然で、かうなつたらもうすつかり神經質症狀に陷込んでしまつたと云つて良ろしい。卽ち當然起るべくして起つてゐる不眠なり不安なりに對して、夫れを原因的に考へずに 單に直接に取除から消失させようとあせれば、益々逆になります。卽ち睡眠と云ふ狀態は、體から力がすつかり脫けてだらりと全身がなつて、頭は何も纏つた考がなくなり、ぼんやりとした時に起る現象であります。色々あれこれと考へながら體に力を入れて睡つてゐる人は居ない。……然るに世の多くの人が、中には醫者迄も、この本人のやうに、そんな些細な事は氣にかけるな、平氣になれ、と訓へるのであります。之では柱と角力を取れと訓へ、壁に馬を乘りかけよと命ずるやうなもので、實際患者はとても不可能の事に益々自信を失ひ、自己嫌惡に陷り、悲觀し、所謂神經衰弱を增惡させるばかりであります。」と。

私も悉く同感であるが、本人に對して柱と角力をとらせるべく命じ、壁に馬を乘りかけるべくけしかけるものは何か、彼の心の內に如何にして彼自身にそのやうな無理難題を吹きかけるものが出來たかと云ふことの調査は少しもしない。たゞそれは難題だから從ふなと訓へるだけである。それでその訓へに從ひ得る場合もないとは云はぬ。併し、到底從ひ得ぬ場合もあらうし、またその無理難題を課するものゝ正體をつきとめることが治療を絕對的に徹底させる所以であると云ふことを我々は主張せむとするのである。さうしてその正體を突きとめる方策は森田療法では立たない、それが森田法の缺陷だと云ふのだ。(完)

兒童分析に於ける轉嫁の役割

（アンナ・フロイド）

馬場由子譯

最初に、先日の講話の內容をもう一度簡單に述べさせて頂きます。

私達はまづ兒童分析の方法に注意を向けました。患者自身の報告ばかりに頼らずに、患者の家族の報告から病歷を知ることも必要であるのが分りました。また、兒童はすぐれた夢の解釋者であることや、晝間の空想や自由畫は技法上の手段として意義あることを認めました。ですけれども、皆樣を失望させるやうなことを報告致さなければなりませんでした。それは、兒童は自由聯想するのを厭がるので、此れを斷られては、成人分析では重要な此の方法に代るものを厭でも應でも探さなければならない、と云ふことでありました。一つの代用法のところで話を切つて、その代用法の理論的批判は今晩に延ばしておいたのでありました。

クライン夫人の考へ出された遊戲法は、疑ひもなく、兒童を觀察するために大きな價値を持つてゐます。骨を折つて時間をかけて兒童をその家庭に訪問するかわりに、兒童にお馴染みのあらゆる世界を一擧に分析者の部屋に移して、その中で兒童を活動させるのでありまして、分析者が見て居る處でさせるのですが差當り干渉はしないのです。其の樣にして、私達は兒童のさま〴〵な反應、すなはち兒童の攻擊傾向なり同情能力なり、また、種々の對象や人物に對する精神的態度などが人形によつて表現されるその強弱を知る機會を得るわけであります。現實の世界で兒童を觀察するより有利な點としては、猶、此の玩具の世界は兒童には手頃であり思ふ儘になると云ふことが加はります。つまり、現實の世界では、世界が兒童にとつて壓倒的に大きくて強い爲に、空想生活の中だけに限られたまゝでゐる總ゆる行動を、此の玩具の世界では實行出來ると云ふ點であります。此の樣に好都合な點がありますので、クライン式遊戲法の使用は、未だ喋つて色々表現することの出來ない兒童を知る爲に缺くことが出來ないも同然に思はれるのであります。

然しクライン夫人は此の技法の使用に當つて、もう一歩進んで重要なことをして居られます。クライン夫人は、此の兒童の

遊戯の思ひ浮びのそれ〲に對して、大人の患者の思ひ浮びに對した時と同樣の態度で向ふよう要求して居られて、兒童が斯の樣な遊戯の世界でする行動を、絶えず適當な思想に飜譯して居られます。詳しく申しますと、夫人は、遊んでゐる樣な行爲のそれ〲の底深く潜む象徵意義を探さうと、骨折つて居られるのであります。若し兒童が、玩具の街燈柱なり人形のどれかなりを投げ倒せば、夫人は恐らくその行爲を、父に向つた攻擊的傾向を示すものと解釋されるでせうし、玩具の車を衝突させた時は、兒童が兩親の性的交渉を視てゐることを示すものと解釋されるでありませう。夫人の仕事の本質として重要なのは、兒童の行爲に平行してそれを飜譯し解釋することであります。此の解釋も亦、――大人の自由聯想の解釋の場合と同樣に――これから先患者の內的なものがどんな方向にむいた經過を辿るかを、ざつと敎へてくれるものです。

けれども、兒童の遊戯行爲と大人の聯想を同一視することとの根據を、もう一度吟味致しませう。大人の思ひ浮びは勿論「自由」でありまして、患者は意識の指圖や思想過程の干涉は一切取除いて了つてはゐますが、それでもやはり同時に、かうやつて聯想しつゝある自分は分析中なのだといふ明瞭な目的觀念に捕はれてゐます。然し兒童には此の目的觀念が缺けてゐるのであります。私は最初の講話の時、兒童患者にも何の爲に分析を受けるのかと云ふ目的觀念を解り易くしてやらうと、どんな遣り方で骨を折つたかを勿論皆樣に御說明致しはしました。然し、その兒達の爲にメラニエ・クライン夫人が遊戯法を完成された樣な年頃の兒童達は、なかでも性の第一開花期の兒童達は、私が致しました樣な遣り方で何とかしようとしても、餘りに幼な過ぎて駄目なのです。クライン夫人は、その遊戯法によつて、私の申した樣な、兒童を分析に適するようにする準備が不必要になつて手數が省けることとも、夫人の方法の重要な長所であると感じて居られます。さうしますと私達は、メラニエ・クライン夫人がされた、大人の思ひ浮びと兒童の遊戯行爲の同一視に、次の樣な異議を申し立てたいやうな氣が致します。なる程夫人の方法は優れたものではありますが、然し、兒童の思ひ浮びが大人の持つのと同樣な目的觀念に支配されてゐない時にはその思ひ浮びを何時でも大人の思ひ浮びと同じものとして取扱ふのは、恐らく正しく無いのではありますまいか。その遊戯に象徵意義を見出す代りに、時々はそれを氣まぐれな無邪氣なものと解釋しても差支へないかも知れません。街燈柱を投げ倒した兒童は、其の前日の散步の時、何かその樣なことを經驗したのかも知れず、車の衝突は街で見た事を繰返すのかも知れないでせう。また、婦人の訪問客のところへ走つて行つて、その人のハンカチを擴げてみる兒童は、母親のお胎に又新しい同胞が隱れてゐるかどうかと云ふ好奇心を、その行爲で象徵的に表現してゐるのだとクライン夫人は云はれますが、さうではなくて、恐らく前日に誰かがそれに似たハンカチに、ちよつとしたお土産を包んで持つて來てくれたので、その經驗と結びつけて

ゐるのだらうと見た方が當つて居さうに思はれます。大人の場合でも、彼の行爲なり思ひ浮びなりのすべてを象徴的な意味にとつてはならないのでして、たゞ彼が承諾した分析といふ狀態の影響の下に生じたものだけに限つてゐます。

然し、クライン式技法を分析に使用することに對して斯んな風に異議を持出しましたが、それでも別な方面から見ると、また力のないものになりさうです。兒童の遊戲に只今述べた様な無邪氣な解釋を許すのも、勿論正しいのです。正しくはあるのですが然し、それではなぜ兒童はいろ〳〵の經驗の中から、特に街燈柱なり二つの車なりが出て來る場面を選んで、繰返すのでせう？　此の觀察の裏に隱れてゐるものが既に象徴意義ではなかつたのですか。その象徴意義は分析遊戲室內に於いて他の觀察よりも先づ第一にこの觀察に優先權を與へてそれを再現させてゐるものです。更に次の樣なことも云はれませう。種々の行動をしてゐる兒童には（大人だと分析を受けてゐるのだと云ふ考へに引き摺られがちな）目的觀念と云ふものが缺けてゐることも、亦その通りです。然し、多分兒童にはその目的觀念は全く要らないのでありませう。大人は意識的意志の努力で思想の支配を取除かなければならないのであつて、思想の干涉は全部、彼の內部に活動してゐる無意識感動に讓り渡さなければならないのですが、兒童は斯の樣に恣いまゝに立場を變へる要求は少しもないやうであります。兒童は多分いつでも、そしてどの遊戲の最中でも、彼の無意識が命ずるまゝになつて居るのです。

御覽の通り、兒童の遊戲の思ひ浮びを成人患者の考へる思ひ浮びと同一視するのは、正當であるかどうかと云ふ問題は、理論的根據や理論的反證によつては容易に決定され得ないのであります。此の決定は明らかに、實地經驗による再吟味次第といふことになります。

猶、別な點を批判してみませう。聞くところに依りますと、クライン夫人は、幼い兒童が與へられた玩具を使つてする行動の他に、兒童が夫人の部屋に在る對象物なり夫人自身の身體なりでしたことも、全部解釋に使用して居られるさうです。此の點に關しても、夫人はやはり几帳面に成人分析の例に倣つて居られるのです。實際、成人分析では、患者が分析中に私達に示した態度や、ちよつとした行爲は、——さうしようとして爲たのも何氣なしに爲たのも——全部分析するのが正當であると考へて居ります。何故さう考へるかと申しますと、患者が陷つてゐる轉嫁狀態と云ふことがあるからなので、普通の場合なら何もない行ひにも、此の轉嫁狀態では象徴的意義が加へられてゐるものであります。

然し玆で疑問が生じます、兒童は結局、大人と同樣の轉嫁狀態には陷らないものなのかどうか、兒童の轉嫁感情は、どんな風に、どんな形で表明されるのだらう、どの樣な方法でその感情を解釋に使用したらよいのか、といふ疑問であります。そこ

で話は私達の主題の中で最も重要な、兒童分析に於ける技法としての轉嫁の役割といふ、第四の個所に到達したことになります。此の疑問を解決すれば、同時に、クライン説を確證する材料か、或は無効にする材料かが手に入るでありませう。

私に對する強い結び付きの感情を兒童に持たせて、兒童を私との實際の從屬關係に入らせるためにどんなに骨を折つたか、最初の講習の時にお話したのを憶えていらつしやいませう。兒童分析が斯の樣な轉嫁なしでも行りおほせると思ひましたなら私はあの樣に精力を使つたり大層さまざまな手段を用ひたりして、此の計畫を遂げようと努めはしなかつたでありませう。然し、感傷的な結び付き、分析用語で云ふ積極轉嫁は、それから後の總ゆる操作の豫備條件なのです。好きな人達だけ信じ、好意の持てる人の爲にだけしか仕事を爲ないと云ふ點では、兒童は大人よりずつと徹底してゐるものであります。

其の上、兒童分析では、大人の時と比較にならない程、此の結びつきを色々に使ふのです。兒童分析は、分析的意圖を追求すると同時に、多少は敎育的効果も擧げるよう努めなければならないのであります。此の敎育目的に就いては、後で猶詳しく研究いたしませう。が、敎育効果といふものは、兒童分析に限らず、どんな場合にも、敎育當事者に對する子供の感情的結び付きによつて生じ結び付きによつて永く續くものであります。轉嫁それ自身をつくり出しさへすれば、それで私達の目的には充分なので、その轉嫁が好意的な性質のものであらうと憎惡的なものであらうと、どちらでもかまわないとは、兒童分析の場合には申せません。私達が承知して居ります樣に、大人の場合には長期間に亙つて消極轉嫁で濟ませることが出來まして、私達は矛盾撞着のない解釋をして其の轉嫁を本源に還し、この消極轉嫁を私達の目的に利用するのであります。けれども兒童の場合には、分析者に向けられた消極感情は——多くの點でいろいろ啓發してくれますが——私達にとつて何よりも邪魔になるのです。私達はこれを出來るだけ速く和らげて除きます。實際に効果ある操作は、常に、積極的な結びつきがある時に捗るでありませう。

感傷的結び付きを作ることに就いては、分析の準備の話の時、詳しく述べました。空想や、ちよつとした行動、めぼしい行動などの中に、この感傷的結び付きが表明されることは、大人の患者のさうした經過と殆んど相違がないのであります。私達が抑壓されてゐるものを少し無意識から解放して、自我の抵抗を招いてゐる時は、どんな場合でも消極轉嫁を感じさせられます。此の瞬間、兒童には私達が危險な恐しい誘惑者に見えるので、こんなおせつかいをされない時には兒童が自身で禁斷した本能感動に向けてゐた憎惡と拒否は、全部私達の身に引受けることになるのです。

次にもう何邊も話した小さな强迫神經症の女兒の感傷的轉嫁空想を、詳しく申し述べようと存じます。その轉嫁空想のきつ

かけは、明らかに私自身が與へたのでした。と申しますのは、私は家庭にその兒を訪ねて行つて、お風呂に入つてゐるところに暫く居たからであります。翌日の分析時間に、その兒は先づ斯う申しました。「フロイドさんはあたしがお風呂へ入つてる時いらしたから、今度はあたしがフロイドさんのお風呂の時來るの。」それから暫くして、前日私が歸つた後で眠る前にベットの中で考へた晝間の夢を話してくれました。その兒自身が說明した傍註を括弧に入れて附け加へておきます。

「お金持の人は皆貴女が嫌ひだつたの。貴女のお父様もお金持だから、やつぱり貴女が嫌ひだつたの。（これは、あたしが貴女のお父様を恨んで居るつてことでしよ。）さうして貴女は誰のことも好きじやなくて、誰のことも分析してやらなかつたのそれから、私のお父様やお母様はあたしを憎らしがつてたし、ハンスやヴルターやアンニーもやつぱりあたしを憎らしがつてて、世界中の人がみんなであたし達を憎らしがつてたの。その上、あたし達のこと知らない人や死んじやつた人までもなの、それで貴女はあたしだけが好きで、あたしは貴女だけが好きで、あたし達は何時も一緒に居たの。他の人達はみんなとてもお金持だつたけど、あたし達二人は本當に貧乏だつたの。あたし達はなんにも持つてなくて、着物も一枚もないの、なぜつて云ふと、お金持がみんな奪つてつたからなのよ。ソファーだけが部屋に殘つてゝ、その上にあたし達二人眠たの。だけどあたし達は二人とも倖せだつたの。それからあたし達、赤ちやんを拵えようと思つたの。それで、赤ちやん拵えようと大きいのと小ちやいのを一緒に混ぜたの。だけどそれから、こんなもので赤ちやん造るのは素適ぢやないと思つたの。それで、葩とそれから別な物を混ぜてしたら、あたしに赤ちやんが出來たの、なぜつて、赤ちやんはあたしのおなかに居たんですもの。赤ちやんは隨分ながいことあたしのおなかに居て、（赤ちやん達はとつてもながい間お母さんのおなかに居るんだつてあたしのお母様話して下さつたのよ）それからお醫者さんが來て赤ちやんを出したの。だけどあたしはちつとも病氣ぢやなかつたの。（お母様が仰有つたんだけど、斯ういふ時は普通お母さん達病氣なんですつて。）その赤ちやんはとても可愛らしかつたので、あたし達もこんなに可愛らしかつたらいゝなと思つたら、あたし達とつても小ちやくなつたのよ。あたしはこんな大きさで、貴女はこんな大きさだつたの。（これは、ヴルターやアンニーみたいに小さいといゝなとあたしが思つてること、あたし達が見つけたからだと思ふのよ。）それから、あたし達なんにも持つてなかつたので、すつかり薔薇の葩のお家を造りはじめたの、ベットも薔薇の葩で、お蒲團やマットはみんな薔薇の葩縫ひ合はせて作つて、小さな穴が殘つたところには白いものを詰め込んだの。壁紙の代りはこれより薄いのはない位薄いガラスで、壁にはいろんな模様が彫つてあるのよ。安樂椅子もやつぱりガラスで出來てるの。だけどあたし達は、その椅子に腰掛けても大丈夫な程輕かつたの。」（昨日あたし

お母様のこと怒つてたから、この中にあたしのお母様はちつとも出て來ないんだと思ふの。」
その先に猶、ありとあらゆる家具やその他その家のために作られた物の詳しい描寫がありました。その兒は眠入るまでこんな方向に晝間の夢を繰りひろげてゐたのです。その空想の中で、私達のはじめの貧乏が遂に全く清算され、それからは、最初に話したお金持のよりは素適な物を澤山持つたことに、その兒は特別重きを置いてゐます。
然し此の女の兒が別の時には、どんなに私に用心するよう。心の中から注意されてゐるかを物語つてゐます。心の中のものは斯う云ふのださうです。「アンナ・フロイドの言ふことときいちや駄目よ。あの人は嘘つきよ。助けてなんかくれないで唯あんたを悪い子にしちやうだけよ。あの人はあんたのお顔も變へちやうのよ、さうすると醜いお顔になることよ。あの人の云ふことはみんな本當じやないのよ、あの人今疲れてベットで靜かに寐てるから、今日はあそこへ行くのおよしなさいよ。」然しその兒は何時もその聲を默らせることが出來て、そして、これは全部分析時間のはじめに云つて了ひなさいと自分に命じるとのことでした。
或他の少女は、その兒のオナニーについて話し合つてゐた當時に、私を、乞食や貧乏なお婆さんなどといふ、出來る限り輕蔑的ないろ／＼な姿にして、（空想の中で）見たのでして、一度は、私の部屋の眞中に立つ私の周りを惡魔が騷々しくさわぎながら跳ね廻つてゐるといつた、他の姿ではない私も見たのであります。
ですから、私達は御覽の樣に、その時の事情に從つて患者の親密な感動なり憎惡の感動なりが向ふ標的になるのでして、これは大人の場合と同樣であります。只今の少女の例を見れば、兒童は充分な轉嫁をするものだと申し度くなります。が、それにも拘らず、この方面でも亦、失望させられる意外なことに直面するのであります。勿論、兒童は分析者と生々した關係を續けはします、さうした關係の中で、自身の兩親との關係で得た澤山の反應をやはり繰返します。感情の變化や强弱や表現で、兒童の特質の形成がどうであるかの重要な暗示を與へてはくれます。然し兒童はやはり轉嫁神經症にはならないのです。
私が云ふ轉嫁神經症とはどう云ふものかは、皆樣どなたもおわかりでありませう。大人の神經症者は、分析取扱ひが進む中にそも／＼その症候のために治療を思ひ立つたのであるのに、段々その症候を變へるものであります。彼は、これまで彼の空想がしがみついてゐた對象を放棄して、分析者を中心にした新たな神經症をつくります。私達はこれを指して、彼はこれまでの症候を轉嫁症候によつて代償し、彼のこれまでの神經症が如何なる種類のものであつても、その神經症を轉嫁神經症に移し、今や新しい轉嫁人物である分析者との關係のなかで、あらゆる異常な反應を演ずると申すのであります。分析者が居心地よく

感じ、個々の症候が發生し增大して行くのを患者と一緒に辿れる此の新しい地盤の上で、つまり淸められた作戰地で、終局の戰ひが進行するのであります。すなはち、徐々に病氣があるとの洞察が深まつて、無意識內容が發かれるのであります。

幼い兒童の場合には、仕事を右に述べましたやうな結末になぜ簡單に導けないのかといふ事については、二つの理論的根據を擧げることが出來るかと存じます。一つは兒童自身の機構の中に、他の一つは兒童分析者の中に探すことが出來ます。

兒童は、大人の樣に自分の愛情關係の新版を出さうなどと云ふ用意はしてゐないのです。なぜかと云ひますと、古い版のが云はゞ、未だ賣切れてゐないからであります。兒童の最初の對象である兩親は、大人の神經症者の場合の樣に空想中にあるのではなく、未だ實際に愛情對象として存在してゐるので、兩親と兒童との間には日々の生活の關係が生じて、兒童が體驗する滿足や失望はすべて猶兩親に關係があるのです。分析者は此の樣な立場の中に新人物として入り込んで行つて、十中八九は、兒童の愛なり憎惡なりを、その兩親と分け取りしなければならないでありませう。然し、兩親と分析者をすぐ取換へよと云ふ强要は、兒童の爲には落第で、大人の場合ですと、患者は空想の對象を實際の人間である分析者と換へる時に、分析者の長所を認めるのですが、兒童の場合には分析者は最初の對象と一緒に並ぶので、その樣な長所を兒童の眼に付くようにすることは出來る筈がないのです。

茲でクラィン法に話を戻しませう。若し、最初の分析時間に兒童が憎惡的な眼をしたり、拒否的な態度をとつたり、又、その上打ちかゝつて來たりしたら、それを、兒童が母親に對してアムビヴァレンツな精神態度をとつてゐることの證據として差支へないであらう。そのアムビヴァレンツの分力が、分析者に眞直に向けられるのだ、とクライン夫人は云つて居られます。が、私は、實情は異つてゐると思ふのです。幼い兒童が母親に感傷的に結び付いて居れば居る程、知らない人に對して懷く親愛の情は益々少ししか殘らないことになります。私達は、母親か或は養育者以外の者には、誰に對しても唯不安さうな拒否だけしか示さない子供達の場合に、今述べました樣な實狀を最もはつきり認めます。さうです、そればかりではなく、クライン夫人の云はれるのとは正反對なのであります。家庭でも殆んど愛のない取扱ひをされつけてゐて、强い情愛を表明したり受けたりすることに慣れて居ない兒童達の場合に、あつさり積極關係が出來ることがよくあるものです。この兒童達は、最初の對象から貰へるかと永い間むなしく期待してゐたものを、遂に分析者から貰ふわけであります。

然し一面、兒童分析者は、やはり陽性轉嫁の對象には殆んど不適當なのです。成人分析の場合、私達が此の目的のためにどんな風に振舞ふか御承知でありませう。私達は人間としての個性を出さずに、影のやうに、云はゞ何も書いてない紙としてじ

つとして居ります。さうすれば患者は此の紙の上に、映寫機で白い幕の上に映像をうつし出すやうな風に、彼のあらゆる轉嫁空想を書き入れることが出來るのです。私達は禁止したり滿足させたりすることは避けます。それにも拘らず患者には、私達が禁止したり要求を叶へてくれたりする人に見えるのですから、私達をそんな風に見る材料は、自身の過去から取つて來たものであることを、患者に説明してやるのが容易なのであります。

けれども兒童分析者は、影でありさへすれば良いのではないのです。彼は兒童にとつて、感服に耐へない魅惑的な特徴に富んだ、興味ある人間であることは、既にお話しました。やがてお話し致しますが、分析には敎育問題が混じつて居りまして、この敎育問題の必然の結果として、兒童は、分析者が願はしく思ふこと、又願はしくないと思ふのはどんなことか彼は何を是認し何を非とするかを、ちやんと知つて居ます。けれども斯の樣な輪廓のはつきりした、眼新しい點の多い人物は、殘念ながら不完全な轉嫁對象であります。すなはち、轉嫁の解釋次第では、殆んど役に立たない對象であります。玆でも先程の樣な比較をしてみれば、映像を寫さうとする映寫幕に、もう他の繪が書いてあるのを見つけた時と同じやうな困難が生じるわけであります。その繪が充實してゐればゐる程、色が美しければ美しい程、それだけ其の上に寫し出されるものの線を消す助けになるわけであります。

つまり、只今述べました理由で、兒童は轉嫁神經症にならないのです。分析者に對して總ゆる感傷的攻擊的感動を持つてゐるにも拘らず、兒童はこれ迄と相も變らぬ場所、すなはち家庭といふ環境で、その異常反應を演じ續けます、分析者の見てゐるところで思ひ浮べたり行動したりしたこととの分析解釋だけに限らずに、神經症的反應が見出されるところ、すなはち兒童の家庭にも分析が注意を向けた結果、兒童分析に對し技法上の重要な要求が持ち出されます。然し、玆で話は兒童分析の實際技法の障碍の巨大といふことに立ち到つたわけでありますが、只今はこの障碍に就いて一々説明せず、ざつとおめにかけるだけにしたく思ひます。注意を家庭に迄向けるといふ此の見地に立ちますと、私達は兒童に就いての家庭からの不斷の報告だけを唯一の賴りにするのでありまして、兒童の周圍の人達を知らなければなりませんし、兒童に對するその人達の反應も、或程度確かめて置かなければなりません。若し玆に理想的な場合を想像致すとすれば、兒童の實際の敎育當事者と手分けしてする仕事といふことになります。以前に、兒童の愛情なり憎惡なりも敎育當事者と分かたなければならないと説明しましたのは、此の事なのです。

外的な事情なり兩親の人格なりで、斯の樣な共同の仕事が不可能である場合は、その結果、分析中に材料の不足を感じさせ

られます。共同の仕事が不可能だつたので、殆んど夢と晝間の夢ばかりで行り通した兒童分析があつたことを憶えてゐます。轉嫁の中には解釋出來るやうなことが何一つ起らず、症候の中に現れる神經症の材料も、私が困つた程その多くが有耶無耶になつて行きました。

けれど此の個所でも、やはり分析の開始の場合の樣に、兒童の立場を、分析の遂行にはずつと適當してゐる大人の立場と同樣にする手段、つまり兒童を無理やり轉嫁神經症にする方法があるのです。これは、分析の時に重い神經症の羅病なり兒童に激對してゐるその環境なりが問題となつた場合、恐らく缺くことが出來なくなりませう。その樣な場合には、兒童を家族から遠ざけ、何か適當な制度の處に置くことはどうしても必要でありませう。斯の樣な制度は只今のところ未だ無いのですから、自由に想ひ描いてみることが出來ます。兒童分析者自身が院長をつとめる設備も考られますし、――これ程空想的でないものを考へますなら――分析の原則に支配されてゐて、分析者と共同の仕事と調子が合ふ學校でもよろしいでせう。此のどちらの設備でも、私達は先づ第一に、症候から解放される時間を得るのです。兒童はその間に、新しい、都合の好い、差當りは無關心でゐられる周圍に慣れるのであります。兒童が此の期間を快く感じれば感じる程、益々分析には不適當になり、分析に對して不機嫌になるのが認められます。私達は此の時期には全然兒童の邪魔をしないつもりです。兒童が慣れて了つた時、詳しく云ひますと、現實の日々の生活の影響を受け、新しい周圍に結び付けて、――此の周圍に比べて最初の對象は段々色褪せて行くのです――此の新しい周圍の中で再び症候を復活させ、異常な反應を新しい人物の周りに集中した時、つまり彼の轉嫁神經症が出來上つた時にはじめて、兒童はまた分析出來る樣になるのです。分析者が院長をつとめる設備ですと、――斯の樣な形式が望ましいものかどうかは、只今のところ未だ判斷しかねますが――成人分析の場合に使つてゐる意味での實際の轉嫁神經症が眼目でありまして、分析者が轉嫁對象になりますでせう。學校の場合には、家庭の環境を簡單に上手に修正いたすでありませう。と云ふのは、云はば私達が上から覗き込める樣な代りの家庭を創るつもりなので、さうすれば、その家庭の人々の兒童に對する反應を監督し調節することが出來るでありませう。此の樣な家庭は、分析の仕事にとつて是非必要である樣に思はれます。

この樣に兒童を兩親の家庭から遠ざけることは、技法上實用的な解決であるやうに思へます。けれども分析の終結に就いて話をお聞きになれば、此の、兩親から遠ざけるといふ事に對して、どんなに多くの疑念が生じて來るものか、おわかりになりませう。兩親から遠ざけるといふことは、自然的發育の重要な個所に、先まわりして手を出すことになりまして、私達はまだ

早過ぎるのに兒童が兩親から離れることを强要するのです。此の時代には兒童は未だ感情生活の獨立能力も具へてゐないのですし、新しい愛の對象を勝手に選ぶ自由も、外的な事情に依つて、一つも持つて居ないのです。たとへ私達が分析に非常な長時間を要したとしても、大抵の場合、分析の終了と思春期との間には、まだ空白の時間が殘ります。あらゆる意味で敎育と指導と庇護が必要な思春期までの間が空きます。けれども、私達が轉嫁の解消に成功した後は、兒童が獨りで正しい對象への道を見つけますよなどと、誰が受け合つてくれませう。それ故、兒童にとつて分析者がもう他人になつて了つた時は、兩親のところへ還りますので、それから先の指導は今や、前には骨を折つて無理に兒童をそこから引き放したその人々に委ねられることになります。內的な理由に依つても、兒童は獨立出來ないのです。それで私達は兒童を新たなむづかしい立場に追ひやるわけで、その上兒童はさうした中で、また〳〵最初の葛藤條件を見出すのであります。彼は、嘗て通つたことのある神經症への道をもう一度とるかも知れませんし、分析治療が大層うまく行つて其の道が遮斷されてゐる場合には、反對の道をとるかも知れません。反對の道、すなはち公然の叛逆であります。これは病氣といふ見地から見れば好都合なことでありませうが、兒童の場合は窮極に於て問題になる社會秩序の見地から見れば、たしかに困つたことでありませう。(第三講終り)

心理家としてのシュニツレル（テオドール・ライク）

黒子昌彦譯

作家と妄想症患者との比較

我々は、シュニツレルの作品の多くの主題の中に見られる「念慮の全能」に立返ることにしよう。前に、「念慮の全能」はナルチスムス的な心的態度の保有から説明出來ると述べた。この解答は、シュニツレルの作品に於ける、二三の不明瞭な點を解明するのに適當してゐると思ふ。『豫言』の中で、ユダの手品師が一人の士官の未來の運命を、圖面で示しながら豫言する。士官は何としても早死をしたくないと思ひ、圖に示された立場に到る全ゆる機會を避けようとする。彼は、或る劇の中に登場する事になり、その劇に於いては生命の心配はなくてその圖面が實現せられてあるので、既に不吉な運命は離れて行つたと感じた。然しどんなに注意をしても駄目で、この憐れな男は上演中卒倒してしまつた。此處で取扱はれてゐるのは「念慮の全能」の典型的な場合である。これは明に、次いで物語られる悲劇の先ぶれである。何故かといふに、例の手品師は、士官達の或る仲間から侮辱をうけた事があるからである。マルコ・ポロー（これが彼の名である）は、其後士官達の一人である大佐に「貴方はこの春迄保ちますまい。」と云ひきつた。二週間後その士官は本當に馬から落ちて死んでしまつたのである。此處と次の男爵ウムプレヒトの場合とに、マルコ・ポローは豫言で、自分が受けた侮辱的取扱の復讐をしたのである。結局、この豫言は、云ひ換へてみれば、マルコ・ポローが自分の敵に向けた、そして必ず實現する不吉な願望である。そして結局のところ「念慮の全能」に絶對の信をおいてゐることが此處でも亦明瞭である。この物語の中で詩人の役割は特殊なものである。詩人は識らずに自身の脚本で、あの豫言せられた危險な狀態を創り出してゐる。彼自身は、男爵の報告を非常に恐しく思ひ、それを本當だと思ひ勝ちである。「私の内の何ものかが彼を信ぜよとさへ要求するのであつた。我々の上に力を振つてゐる意志の執行者だと自分を感ずるのは、馬鹿げた虚榮心かもしれない※。」

註※「全能の信念」がナルチスムスと結びついてゐることは、此處に明瞭に表現されてゐる。

このやうに詩人は或る程度に「念慮の全能」の信念を分けてゐるが、彼はあのユダの手品師を誘つて不吉な願望を起させた感情を、意識して或は意識せずに分けようとしたのではなかららか。此處に彼の本能感情的な願望が、次の事件を豫想して、彼が變裝した事によつて明瞭になる。『淋しき道』に於けるヨハンナさへも、母親が程なく死ぬかもしれないといふことを知つてゐたと確言する。母が患つてから母親が厭になつたといふ彼女の告白は、心理學上それと一つにして考へなければならないことだ。

強迫神經症患者も分析してみると、背後に敵意のある激情をかくした願望は、抽象的思想、假定、考察として同じやうな方法で表現されるといふことが判るのである。『レーデゴンダの日記』の中で一人の主人公が決鬪をして射殺された。そのわけは彼が空想の中で、他人の妻と熱情的な愛の全ゆる段階を經驗した爲めである。彼は自分が行はうとした全ゆる惡行に對し、責任があると感じてゐるのである。例の夫人が彼女の日記の中に、本當は話した事もない男との關係を書いた個所があるので、「念慮の全能」がこの小說の中では特に目立つてゐるのである。いつて見れば、それは戀する者の願望が、全ゆる幸福、苦惱を彼と共に彼女にも經驗させるといふやうなものである。私は、此處に『グストル少尉』の中に發見せられる願望力の最もすばらしい場合を忘れずに引用したいと思ふ。この力の爲めに、少尉の生涯の全ゆる幸福を破壞せんと脅してゐた肥つたパン屋の親方に卒中で倒れた。少尉のため突然から云ふ結果になつたといふことは、彼がその事を無意識に願つたからだと、我々が認めたとて別に障害にはならない。

若し詩人が自分の思想を彼の作品といふ自由な場所で思ふ存分活躍させる事が出來るとすれば、この力が屢々惡魔的に詩人自身に反擊して來る事があるが、これは不思議に思はれる。一八八九年、シュニツレルの、一つの短篇小說『吾が友イプシロン』(或る醫者の記錄より)が現れた。一人の文獻學者がその作品の中心になつてゐる。自分でこしらへた種々の人物が、詩人としての彼に向つて威嚇的妨害的な現實となつてゐる。コーラスガールをしてゐるおぼこ娘が泣きながら小說家の所に來る。その愛人は、女性の中でも最も美しく、何處かで皇子の愛をうけた印度洋の一孤島に住むチュルキザの爲めに熱を上げてゐる。チュルキザは死なねばならない。詩人は彼の空想が創作した事件の成行を遮止することは出來ない。死ぬかもしれないといふ考への爲めに彼は日夜惱む。人々は彼を戶外に連れ出さうとしたが無駄であつた。社會、自然は彼にとつては無意味で、彼は彼の作品を完成すべく家にゐなければならない。朝方彼は階段の所で死んでゐた。一つの紙片に「チュルキザは死んだ。全て

は終つた。」とあつた。

シュニツレルの最後の作中のハインリヒ・ベルマンは投出せられた戯曲の種々の人物によつて、生き生きとした方法で自分が取りかこまれてゐるのを見るのである。* 空想の所産は壓倒的な力を持つものである。詩人は、例へば「大ウルステル座」の中に於ける、空しき嘆きをもらしてゐる。

たはむれは終りぬ。何たる愚さぞ。
我自らの假りそめの姿より我を護る者は誰ぞ。
消え失せよ。見るに堪えず。
我より獨立して此のあたりに跳ね廻ることをやめよ。
今や汝が自己の生育を續ける程の魂を
余が汝に吹き込みたりしとせば、
かゝる大膽きはまる、不合理なる狂暴は
果して我が創造力に相應する感謝なるか？

註*かうした事は詩人にあつては屢々の現象である。フローベル、バルザック、ディケンズ、ポー、クライスト、アマデウス・ホフマンさへもがその事を傳へてゐる。「一九一二中央精神分析誌中のエス・コバクス述の取込みと投出」並に「一九一二パン誌上のライク述の(文藝と精神分析)」參照。

文藝の方向を示すものとして我々が文藝の中に認めた「念慮の全能」と、藝術家が自ら創造した人物の彼に及ぼす力とは、一體如何に調和すべきであらうか。文藝と神經症とが境を接する限界が此處にあるのだと私は思ふ。

詩人は意識の抑壓により出口のない自己の感動を、投出といふ心理的な機制に依り外化し客觀化するものだといふ事を、我々は知つてゐる。妄想症患者もやはり同じ事を行ふ。彼等も亦、自分自身の感動が人間の姿をとつて己れを包圍し來るのをみるのである。唯、彼等に缺けてゐるものはその擬人化の正體を認識する知的批判である。自分の作り出した生きものが恐しくなつた詩人は、批判力に依つてそれらの生き者から自分を護らうとし、それをカントの云つたやうに「想像力の遊戲」として認識しようとするのである。然るに尚、かうして獨立した空想的所産から、妄想症患者の狂想に通ずる小路は、決して見失ふことの出來るものではない。此處にこそ、あのアルツール・シュニツレルの作品に極めて特徴的な調子を與へてゐる現實と空

想、假象と實在、覺醒と夢想との間の動搖の精神的根幹があるといふのである。

詩人を强制して擬人化へ向はせた感動は、利己的、並に性的なものであり、それは彼の道德的意識と一致しない感動であることを、我々は知るのである。假象性格を消失して段々生々して來ることは、この無意識の力の壓倒的有力化を意味するに外ならない。無意識の力が、詩人の意志に反して彼の上に支配力を揮はうとしてゐる事に外ならぬのである。これを要約すれば、文藝は最早心理的なはけ口としては滿足せず、尙自らを貫徹して已まぬ、といふことである。（未完）

マンスフィールド論（アンドレ・モーロア）

岩倉具榮譯

（二） 作家としての生涯

彼女はロンドンに定住し、ワイルドを自分の先生としたのであつた、そして、ワイルドを讀むことによつて規律正しい青年の純眞さを以て、體驗に對する藝術家の義務についての危險な說を引出した。自分の藝術を豐かにするために人格を犧牲にしようと思つた。それを後悔する日は當然來た。「併し、それは體驗ばかりではないのであつた。そこには無駄があり――破壞もある。」と。

この樣にして彼女は不合理なロマンスの生活をした。彼女は偏見のない、自分を守つてくれるばかりではなく、自由な藝術家として生きるべき權利を尊重してくれる男と結婚するといふのが、彼女の信念であつた。唐突な提議を如何にも受入れたかのやうな一人の音樂教師を見出し、彼と結婚し、彼が出たらめなのを發見して、二三日後に別れた。極度の孤獨と失望の一期が續いた、「私は葬式の行列の中にまぎれ込んでビックリしてゐる子供の樣な感じがしたと云つた。」方がよかつた、健康は惡かつた。眞の家庭を持たなかつた、そして何處かいゝ逃げ込み場所はないかと空しく求めた。母は彼女に會ひにロンドンに來たが、母娘はお互ひに諒解しなかつた。彼女は今やその夫のではない一人の子供が生れさうになつてゐた。そして彼女は自分の狀態と來るべき生誕を隱すために海外に行かねばならなかつた。彼女はドイツのある村に送られた、そしてそこで彼女は一續きの短篇とスケッチを全部書き、それが彼女の最初の書物、「ドイツの宿にて」となつたものである。

それ等の作は現實的で、むしろ辛辣で、自然のユーモアが皮肉や悲哀と交叉してゐるものである。高度のアングロ・サクソン的筆致を以て彼女は、感傷性と大食、自負と貧乏とのまぜ物である、漫畫化された、不愉快なドイツ人を描いた。宿で、獨り食卓に坐つてゐる男爵が他の客からその貴い地位に對して遙かに敬意を表され、そしてその男は二倍も食べる時間を持つた

めに獨りで默つて食べるのだといふことをこの若いイギリス女に說明してゐる有樣を、彼女は描寫した。蠟燭工場の持主、フィッシェル夫人は、はげしい肉慾を持ち、凡ゆる人に向つて重々しくそれを話した。「近代人」のソニア孃は、敎授氏の胸の中で氣を失ふ……。それは凡て大變奇妙で、時には悲劇的である。その書物は巧妙に書かれてゐる。併しカェサリン・マンスフィールドは間もなくそれを嫌ひ始めた。彼女は「外國人」としての見地の氣取つた優越さを後悔した。確かに彼女は見たものを忠實に描いた。そしてドイツは、一部分、さういふ風であつた、併し確かにドイツはさういふ風ばかりではなかつた。後に彼女はその本の再版を禁じた、その時彼女は恐ろしく金が必要であつたにも拘らず。

併し之等の物語を書いた時、彼女はそれが週刊の、「新時代」に印刷されたのを喜んだ。ロンドンに歸り、一人で生き、そして仕事をした。或る日、若い作家ジョン・ミッドルトン・マリーから、オックスフォードで發行される小さい一文學評論誌に寄稿する樣にとの手紙を貰つた。マリーに會つて見ると、彼は熱烈な、辯舌さわやかな若い大學生であつた。彼等は度々會つた。そして間もなく「リズム」と呼ばれる新しい評論雜誌を發刊する計劃をしてゐた。彼女は本當は「新時代」には同感出來ないもの〻あることを話した。「あの人達は私が諷刺しか書けないんだと思ひ込んでゐます。ところが實は私はあまり諷刺的な人間ではありません――私は何ものかを信じてゐます。……それを眞理と呼びませう。それは甚だ大きなものです。吾々はそれを見出さねばなりません。それこそ藝術家の望む所です――眞理を見出すことによつて眞實となること……。眞理は大變重要ですからあなたがそれのほんの少しでも見出せば、あなたは他の凡ゆること――又あなた自身についての凡てを忘れるほどです。」

彼女は自分が住んでゐた小さい平割住宅の中にマリーも一室を借りたらどうかと云つた。彼は承諾した。そしてこの樣に隣り合つて住んではゐるが、長い間彼等は別々の生活を續けた。やがて二人は結婚したが、マリーは貧乏だつたからさうする前にためらつた。カェサリンは自分の家から多少の金を受取つてゐた。彼等は二人とも評價出來る何ものをも稼がなかつた。殆ど全ての若い評論誌が消滅する樣に、「リズム」は消滅した。カェサリン・マンスフィールドはその誌上で彼女のある物語を發表してゐたのだから、何處に彼女の作品を出すべきかを知らなかつた。他誌の編輯者たちは彼女が提供した原稿の面白味を諒解する樣には思はなかつた、そして多分彼等も幾分尤もではあつた。彼女がこの時書いたものはよいものだつたが、少し餘りによすぎた。それは彼女が凡ゆるものにも增して捕へんと望んだあの眞理の輪ともいふべきものを缺いてゐた。彼女のニュージーランドの幼年時代に存在した、最も强い印象の本源を、彼女は未だ發見せず、或ひはむしろ再發見しなかつた。併しそれ

等の印象から自由になつて彼女の書物にそれを再生することの出來るには、まだあまり身近に感じすぎてゐた。

　戰爭が始まつた。カェサリン・マンスフィールドの弟が入隊するためにニュージーランドから到着した。彼は確かに彼女が他の凡ゆる人にもまして愛した一人であつた。弟は二人の幼年時代の凡ゆる記憶をよびもどした。ありがたいことには彼女の日記によつて、吾々はロンドンの庭を歩いてゐる彼等を瞥見することが出來る。……梨が古い木から落ちた。……

「いつもあの古い木に生つてゐた驚くほど澤山な梨を覺えてゐる？」

「すみれの花壇の下手のところにね。」

「そしてサヾリー・バスターがあつた後で私達はきれの籠を持つてそれを摘みに行つたつけ？」

「そして私達がかゞんでゐると梨が私達の背中や頭にはずんで、落つこちて來たつけ？」

「私はあれ以來あゝいふ梨は一度も見たことないわ。」

「それは大變輝かしく、カナリヤの様に黄色くて——小さかつた。そして皮が大變うすくて黑い種は——黑玉の様に黑かつた……」

「種はおいしかつた。」

「桃色の庭敷きに席をとつて坐つたのを覺えてゐて？」

　かくて死んだ過去は、輝くばかりに生々と再生し、それが現在であつた當時には憎らしかつただけにそれだけ急に今や愛すべきものとなつた。弟は、自分はきつと戰爭から家へ歸つて來ると姉に語つた。彼にとつてこの戰爭は、神祕的であるが絶對に確實だつたらしい。「大變奇妙なことだが——私は歸つて來るといふ絶對的の確信がある。それはこの梨の様に確かなことに思はれる。私が歸つて來られないなんて。」彼は出掛けた、そしてすぐに殺された。

　この事は彼の姉の生命にとつて大きな苦痛であつた。彼女は永久に現實世界を離れた、そして記憶の中に、又彼女の弟の面影とからみ合つて、魅力ある所となつた過去の愛すべき世界を再び作ることに全く自らを捧げ盡した。「私は人生が私にとつては終つて了つたことを長い間知つてゐたと思ふ。併し私の弟が死ぬ迄私は決してそれを悟りもせず認めもしなかつた。私は彼が死んだと丁度同じ様に死んでゐる。現在と未來は私にとつて何の意味もない。私はもう人間に「好意を持た」ない、私は何處へも行き度くない、そして私にとつて何等かの價値ある唯一の可能事は、かつて生じた何事かを又は彼の生きてゐる時に存在した何事かを思ひ出させるべきことである。

「ケテイを覺えてゐますか。私は彼の聲を樹々や草花、香ひと光りと影の中に聞く。之等の遠くにゐる人々の外に、私にとつてかつて人間が存在したであらうか？……

「今――今こそ私は自分の國の思ひ出を書き度い。さうだ、私は本當に自分の思ひ出が盡きる迄自分の國について書き度い。私の弟と私がそこで生れた爲に自分の國に對して私が負つてゐるのは「神聖な負債」である爲ばかりではなく、私の思想の中で私は凡ゆる思ひ出の土地の上を彼と並んでさまよふからである。それから私は詩を書き度い。あめんどうの樹、小鳥、あなたのゐる小さい森、あなたの知らない草花、開かれた窓から私はもたれかゝつてあなたが私の肩の反對側にゐるのを夢みる。そしてあなたの寫眞が「悲しげに見える」時。併し特に私はあなたに長い哀歌の様なものを書き度い……多分詩ではなく。又多分詩ではなく。又多分散文でもなく。云はゞ「特種の散文」の様なもので。」

彼女は今や、しまひに彼女を殺すに至つた病氣、肺結核に惱み始めてゐた。そして彼女はフランスの南部バンドールに向つてイギリスを去つた。彼女の夫は彼女に伴つたが、間もなくイギリスに歸らねばならなかつた。どんな場合にも、彼女はその殘り少い晩年にしなければならない仕事の爲に孤獨を欲した。それはプルーストと同質同種の仕事、卽ち記憶を捕へること、過去への探求である。最も美しい藝術品は、この完全な脫離を、この死以前の死を要求するのかも知れない。

カェサリン・マンスフィールドが最初の新しい物語を發表した時に、そこに展開せられた獨特の性質を認めた批評家は極く少なかつた。戰後の大多數の人々と同樣、彼等批評家は奇妙なものが美しいのだと思つた。彼等はチエホフよりもドストイエフスキーを好んだ。そしてカェサリン・マンスフィールドは彼等には餘りにも單純に思はれた。幸にも彼女はD・H・ロレンスとか、シドニイ・シッフ（あのすぐれた小說家「スティーヴン・ハドソン」でありプルーストの友人である。）若い小說家ウィリアム・ゲルハルディとか、オットリン・モレル夫人等の趣味のある有力な讃美者を持つてゐた。尙いゝことには、概して自然性を受入れる大衆が、喜んで彼女を見出した。彼女の最初の物語集、「幸福」と「園遊會」は本當の「賣行上」成功のしるしを見せ始めた。

併し彼女は段々病氣が惡くなつて、プロヴェンスの露臺からイタリアの丘へとさまよつた。彼女の執筆を妨げた弱さは、單に肉體的のものではないといふ考へを彼女は持つてゐた。一種の抽象、卽ち、彼女の性質から凡ゆる利己主義を除去することによつてのみ、文學上の理想であつた極度の客觀性に、到達することが出來ると確信する樣になつた。この淨化は、彼女の進み得る前に、彼女が完全な眞理を表現する價値があると自ら感じ得る以前に、成就されねばならないといふことが大切であつ

た。

この精神によつて彼女は數人のロシヤ人によつて建設された、フォンテンブロウの「精神的同胞主義」に加入し、そこで彼女は完全な再生に達することが出來ると信じた。そこに三ケ月ゐてから彼女はミッドルトン・マリーに加入する様に手紙を送つた。彼は一九二三年一月九日に到着した。彼は次の様に書いた「私はその日の彼女程美しい人は何人も今迄に見たこともなく、又之からも決して見ないだらう。それはまるでいつも彼女のものであり又彼女を完全に捕へてゐた精妙な完全さの様であつた。彼女自身の言葉を使へば、「沈澱物」の最後の微粒、「地上の墮落の最後の痕跡」は永久に離れ去つたのである。けれども彼女はそれを救ふべくして自ら生命を失つたのであつた、彼女は午後十時に自分の部屋へと階段を上つて來た時、せきの發作におそはれて遂にはげしく出血した。十時卅分に彼女は死んだ。」（未完）

時評

映畫分析鑑賞二

大槻憲二

一、「風の又三郎」を觀る

東北の山間の小さな村落谷川の岸に貧しい小學校がある。そこへ夏休も後つた九月一日の朝、洋服を着た一少年高田三郎が轉校して來た。忽ち全校（と云つても十數名に過ぎないが）の驚異の的となる。九月一日の大風の日に來たから、風と同一視せられて「風の又三郎」だと云ふことになる。そしてこの何處より來り何處へ去るとも知れない見知らぬ少年に對して全校の少年たちが一種神祕な物の考へ方を投出して、これを超人間的なものに祀り上げて行く心理過程がこの映畫の内容をなしてゐるのである。原作は宮澤賢治、監督は島耕二である。

村の子供たちが又三郎に對して投出した無意識心理の内容は、第一に彼等自身の全能感である。その全能感は喜助と云ふ少年の幻覺に於いて最もよく體現せられてゐる。喜助は山中で雷鳴に會ひ、昏倒した間に、又三郎がガラスのマントを着て昇天したと云ふ幻を見た、また河原での角力の後に、又三郎が雨風を招き寄せて見せると豪語して、遂に偶然それが實現せられた場面に於いてもまた、全能感がよく體現せられてゐる。子供等はその全能感の投出對象である又三郎が角力に於いて極めてもろく佐太郎に負けてゐるのに、（卽ちその全能ならざることが實證せられてゐるのに）その事を深く追及しないで、偶然の雨風を必然の神祕の如

ABHUB

アブフウブ

他の學問がアブフウブ（屑）として棄てたものゝ中から、分析は眞理の黃金を探し出す。

睡眠の技術

不老泉院主

睡眠は生物の本能であるが、これを自由に驅使するにはやはり多少の習練が必要であり從つてまたそこに多少の技術が要るやうだ。

私も若い頃には人並みに神經症に惱んだものであつたが、幸にして不眠症には罹らなかつた。併し神經症治療には十分な睡眠が是非とも必要であると云ふことを本能的に直觀して、なるべく睡眠をとらうとした。殊に晝寢を自由にとることが出來るやうにしたいと思ひ、毎日晝食後に規則的に晝寢をした。晝寢は神經症治療方法の全部ではないまでも、確にその重要な一部分をなしたと信じてゐる。

くに考へてゐるところに、彼等の心理の矛盾（卽ち無意識性）が表れてゐる。

このやうに又三郎は風の象徴となつてをり、その風はまた子供等自身の全能感の象徴となつてゐるが、同時にまたこの風は、彼等の生命觀の象徴ともなつてゐる。風と共に來り、風と共に飄然として去つて行つた又三郎は、云はゞ、彼等自身の生命の何處より來り何處に去り行くか不明なる、その不安と恐怖とを體現するものとなつてゐる。又三郎が唄ふ風の歌に於いて、恐らくは原作者詩人が實によく子供等の生命に對する原始的な不安感と、虛無感とを表現してゐるのであらう。

「ドードドドドードドドードドドー
　甘い林檎も吹き飛ばせ！
　酸つぱい林檎も吹き飛ばせ！」

と云ふ歌は、善惡一切の現世的區別を笑殺して平等の死の世界へと運び込んで行く諸行無常の佛敎的生命觀を巧みに表現してゐる。この意味に於いて原作者は傳統的な日本詩人であると共に、また實によく子供の原始感情を代辯してゐる。

併しながら風のやうに去つて行つた又三郎の姿を大空の白雲に幻視しながら、「又三郎、來年また來いよー」と呼ぶ、子供等の悲哀と愛情とを含んだ叫び聲は實にまた子供等が自分自身の生命の流轉の相に對する不安と歡喜とへの投出的期待ではないか。私は魂の洗はれる思ひを味ひながら、この溫雅な作品を鑑賞することが出來た。原作は恐らくもつと詩情深く豐かなものであらう。

二、「美の祭典」を觀る

十一月二十六日、東和商事試寫室に於いて、オリムピック競技映畫『民族の祭典』編篇『美の祭典』を見る。この篇は主として水上競技であるが、幅跳びや、

當時私はまだ分析を知らなかつた。

私のとつた方法は、まづ眞直に仰臥して、兩手と兩足とをその手首、足首のところで出來るだけ力強く屈折律動させてその回數百に及ぶことである。とてもなか／＼百までは數へきれない、それまでに大抵疲れてしまふ。そのやうにして屈折律動の回數を一つ二つと數へて行き疲勞のためにその運動に堪へなくなつたら適當なところでやめるのである。さうしてそれをやめたら今度は深呼吸をゆるやかにし、同時に上半身の血液が漸次に下半身に移りつゝあると繰返し／＼觀念するのである。かく觀念することに依つて、實際血行は下行し、頭腦は漸次に貧血狀態に陷つて行くやうに思はれる。約五分乃至十分にして自分は睡眠狀態に陷る。

この方法は私が自分で考案したのではなく當時東京で有名であつた催眠術師古屋鐵石氏に敎はつたのである。氏の恩を感じて、私はこゝに氏の名を記錄しておかうと思ふ。お蔭で私は今日でも三十分だけ眠らうと思へば、丁度三十分晝寢することが出來る。今日では別に手足を律動させるやうな手數を用ゐない仰臥安靜にしてゐれば、いつの間にか眠つてゐる。世の神經症の青年諸君には自己催眠の

高飛びや、競馬などもあつて變化には富んでゐるが、前篇ほどの精神には何となく富んでゐないやうな氣がした。併し前後につけてある象徴的場面や光景に依つて何處となく國際主義的、人類的な調子が響き亙つて、流石に外國映畫には雄大な感じがする。日本文化もあまりせゝこましく獨善的なところに閉籠らないで、も少し雄大な、包括的なものを體得しないと、口先だけで八紘一宇のお題目を唱へてゐても、世界の進運に遲れをとるのではないかを不安に思ふ。

運動競技の結果は米國、獨逸、日本などが比較的に好成績を擧げてゐるのは、何となく偶然でないやうな氣がする。やはり今後の世界文化の主役を負ふのはこれ等の民族であると云ふことを意味するやうな氣もしないではない。その事が果して運動競技の成果に於いて如何にして顯現し得るかと云つて開き直つて訊かれても、私は堂々と答へるだけの科學的根據はないのであるが……。

有名な「前畑頑張れ！」の場面は、流石に我等を亢奮させるものがあつた。前畑孃が水中から上つて濡れた足を草履の上に載せた瞬間、その足と草履とが大寫しに出たのには我等は苦笑した。草履はドイツ人等の眼には如何にも奇異に、エキゾチックに見えるのであらう。

時々ヒトラー總統の上機嫌の顏も幕上に現れたが、私は彼の姿を眺めつゝこんなことを考へてゐた。所謂ユダヤ禍の內容は三政策と云ふのであり、それはスポーツとスクリーンとセクスとに依つて世界人類を亡ぼさうとするにあるのだと云はれてゐる。これが恐らく馬鹿げたデマであり煽動者の被害妄想に過ぎないであらうと云ふことは、拙著『世界人と日本人』の中に評論しておいたが、もしこれが妄想でないとすれば、ヒトラーは自らこのやうな國際主義的スポーツの音頭取りとなり、かつこれをこのやうに大袈裟な映畫として記錄してゐる以上、自らユダヤ禍の術中に陷つてゐるのだと云ふことになるのではないか。三政策のデマは

技法を習得せられるやうにすゝめる。

念佛睡眠法

催眠の技法としては、昔から算數法、深呼吸法、腹部按摩法、念佛法、算脈法などがあるやうであるから、古屋氏の方法は右の內の算數法と深呼吸法とを採用し、更にそこに手首足首の律動法と血行下流觀念法とを創案加味したものであることが分る。

右の內で念佛法と云ふのが一寸變つてゐる。仰臥して「南無阿彌陀佛」を連唱するのであらう。念佛は普通に、人々が死ぬ時に唱へると安心して往生出來ると云はれてゐる。少くともそのやうに佛敎徒、殊に眞宗門徒は敎へられて來たのだ。して見れば、不眠もまた解脫を得ざる心理狀態の一種であると云ふことを、人々は本能的に直觀してゐたのであると認めることが許されるであらう。

睡眠時の姿勢

眠る時の姿勢としては、勿論、仰臥が正常であらう。健康な幼兒はみな仰臥して、兩腕を折つて頭の兩側に並べ、兩脚を折つてくの字型にして兩股をやゝ打開いて眠つてゐる。から云ふ狀態が熟睡するには最も適當してゐ

何處から出たことが私は知らないか、もしドイツからだとすると、この競技と映畫とによつてヒトラー自らそのデマであることを證明してゐる結果になるではないかと云ふやうな考へであつた。も一つ考へたことは、我が國に於いてこのやうなデマに踊らされてゐる一部の連中のお人のよさに就いてゞあつた。ドイツ當局が、ドイツ民衆を踊らせるためにそのやうなデマを放つことには政治上の意味もあつて多少の同情も持てないではないが、ドイツ人が踊つてゐるからとて、日本人までがついて踊ると云ふことは殊に奇妙な光景であらう。笛を吹いてゐるドイツ當局もさぞや面喰つて目をパチクリさせ、次の瞬間には輕蔑的な苦笑を洩すことであらうと。

新刊紹介

△『童謠集』 都築益世氏作

著者は醫學博士で童謠の作者として著名である。この度菊版二百餘頁の單行本となつて竹村書房から公刊せられた。巻頭に濱田廣介氏が序文を書いて、童謠界に於ける著作の功績を保障し、巻末に著者自ら謙讓な筆で著者の態度を明かにしてゐる。

我等も自家の子供を育てる際に「コドモノクニ」などをよく讀んできかせたものであつたが、その際母親の口癖になつてゐたものが、氏の作品であつたことを今この著を手にして想起したものも少くない。「母さんほつぺに泣きほくろ、いつ母さんは泣きました、子供の頃に泣いたでしよ、ちいさいほくろでございます」などはその一つである。濱田氏は「ほゝづき」や「日の暮れぬ里」を賞揚してゐるが、私は「山椒の實」と云ふのが氣に入つた。「山椒の青い實、ピリリと辛い、知らずに嚙んだが、泣くほど辛い、ちつちやな粒だにくい程辛い、怒つて投げたら彈んでとんだ、」これは七八歳の憎まれざかりの男兒精神を象徴してゐるのであらう。(二圓五十錢)

ると見え夜尿の子供はみなこの姿勢に於いてすると云はれてゐる。熟睡せざる夜尿兒はない。否、あまり熟睡し過ぎて現實感覺の達しない深處に至るところに、彼等の病理は伏在するのだと云へよう。併し成人すれば、常に仰臥ばかりで寢る人は寧ろ少ないであらう。仰臥を主とし横臥を從とするのが大部分であらう。横臥には右を下にするのがよいと說く醫家がある。その理由は、その姿勢により幽門部が下になり、食物が胃から腸へ樂に進むことが出來るからであると、成程さう云ふこともあらう。原則的には、男は左を下に、女は右を下に寢るのが普通かと思はれる。

近頃の東京朝日の家庭欄に「私は寢る時にどうも横向きにならぬと寢つかれませんが、差支へないものでせうか」(芝・小村みな)と云ふ質問が出てゐた。これに對して某博士はさう云ふことは「實は末節のことです。各人が事情の許す範圍で勝手のよい體位をとればよいのでそれほど氣にすることはない」と答へてゐる。併しそんなことは問者自身十分に知つてゐることで、幾度もそのやうに自分に云ひきかせて後に、なほ氣になるまゝに質問して來てゐることは明かだのに、かう云ふ常識的な答辯は問者をイラ〱させるものでは

なからうか。そんなことを云つても、私には固より、これだけの簡單な質問だけでその原因が分る筈はないのである。併し問者が神經症的に非常に性禁制の强い婦人であるとすれば、その意味は大體察せられないではない。

冬眠動物の樣々

　冬眠動物の内で爬蟲類、龜類は捕はれの身では、冬眠しないのが普通であるが、冬眠鼠（ドルマイス）やハリネズミはそんな事おかまひなしに眠り、殊にハリネズミは冬眠期間の長さとその深さとで有名である。

　冷凍動物の蘇生實驗は約廿年前ロシアの科學者ペトロープ氏によつて行はれたのが世界最初のことであつたと云ふが、わが國でも數年前に青森市青森製氷會社支配人山本定一氏と青蛙研究家農林省囑託青森縣立師範學校敎諭和田千藏氏とが共力して行つた話が昭和十年十二月の「日曜報知」に出てゐた。氏等はモヒ青蛙、ヒキ蛙、青蛙のオタマジヤクシ、雨蛙、カナ蛇、カタツムリなどを冷藏庫の中へ入れて實驗したが、少くとも雨蛙とカタツムリとは蘇生したらしい。外國でも一八四六年に大英博物館にエヂプトの砂漠から持つて來られた蝸牛が四年後に蘇生したと云ふ話がある。「日曜報知」の記者は「やがて人間に炭素酸類を注射して冷血動物にすることが出來るやうになれば、冷凍した上で手術でも何でも出來る」と云つてゐたが、人間を注射で冷血動物にすることが出來ると云ふ假定の下に於いての話で、冬眠動物に就いて成功した事が人間に就いて行へると云ふ希望は今のところあまりお伽噺のやうな氣がする。

　蝙蝠のやうに餌とする昆蟲が全部冬眠するために餘儀なく冬眠を强ひられる動物もあり蜘蛛のやうに餌なしでも數ケ月は過ごせるため、特殊のトタテ蜘蛛を除いては冬眠しないものもあると云はれてゐる。動物の冬眠が食物や環境のために促さることは事實であるにしても、それが唯一の原因であるか。それは外因ではあり得るが内因ではあり得ないと思ふ。さうしてその内因を認めようとするのが我等の立場だ、が、その内因を科學的に證明することは容易でない。併し人間に死の本能が證明せられた以上、動物の冬夏眠を死の本能に基くものとの豫想の下に研究することは可能でもあり必要でもあらう。動物心理學徒の協力と奮起とを望むで止まない。

精神的對症療法

　或る藝者が或る旦那の世話を受けて五ケ年經つたが、これと云ふ理由もなく互に飽きが來たらしく別れたい願望を持つてゐた、併し御互に先へ云ひ出しにくいやうな心持になつてゐた。そこへ思ひがけぬ召集令狀が來て旦那は出征した。藝者は國防婦人團の襷をかけて見送り、それ以來彼女の心境に大きな變化が起きて、たとひ別れるにしても旦那が勇ましく歸還してからの事にするとて慰問袋をせつせと戰地に送り、小娘のやうにはしやいでゐた。旦那の方でも始めは彼女の心底を疑つてゐたが、漸次に色よい返事を寄起すやうになつた。かう云ふ心理は、藝者の心に旦那に對する愛憎相反（アムビバレンツ）があるためであるのは今更申すまでもないことで、憎惡面が强く出て別れたいと思ひながら、それが抑壓せられてゐた時、急に客觀的狀勢のためにその憎惡の目的（別離）が完成せられたので無意識面では罪障感が生じて、かくは反面の愛情面が表へ出て來たのであらう。

　森田療法の原理も人間心理のこの相反並存性（生死兩本能共存）に基くものであつて、患者を一週間位も暗い一室に閉ぢ込めて寢かせておけば、患者の睡眠願望、怠惰願望（死の本能）は十二分に滿足せられ、活動願望、

覺醒願望が反動的に强化せられて來るのは當然の事で、この反動的强化を利用して一氣に活動へと患者の心理を滑り出させようと云ふのが森田療法の原理である。うまく考へたものであるが、併し右の話の中の旦那が歸つて來た時に藝者との間がそのまゝ愛情面（積極面）を持續することは保障出來かねるやうに（顏見れば、また反面の憎惡が出て來るだらう）、神經症患者もその活動慾をそのまゝ永續させ得るかどうか保障の限りでないやうに私には思へる。少くとも患者をしてそのやうに退嬰的、怠惰的、消極的ならしめたものを分析解消するまでは……。要するに森田療法は精神療法としての對症療法（根治法でなく）であると云ふのが私の批評の要點である。

階段と無意識

岐美

　無意識を胡麻化す譯には行かないのは解り切つた事ながら、あまり美事に自分のそれを露出して間の拔けた行爲をしたので、自己分析かた〲報告して見度いと思ふ。
　丁度前號正誌十一月號が附錄の內容の點でその筋から注意を受けた。警視廳に出頭を命ぜられて係りの方から注意をされるのである此の役目は殆ど今まで代人でよい場合には私が引受けてゐた。種々の意味でその方が好都合であつたから。そんな譯で私はこれまで幾度となく警視廳檢閱課に出頭してゐたのであつて、云はゞ警視廳は馴染みの場所なのであるが、何度行つた事があるにしても正直の話喜んで出かけられる用事ではない。然し私としてはリビドー經濟のために、極く事務的な氣持ちで行くことにちやんと一人で決めてはゐるのだが――さて、その日夜七時半頃例によつて出頭した警視廳での事である。三階まで昇つた時ふと「檢閱課は何階？」と云ふ疑ひが胸に湧き上つて來た。それまで四階だと知り切つてゐたのに突然この疑問のために足が止つてしまひ、ためらつてゐるうちに、そこを通りかゝつた廳內の人に尋ねた「檢閱課は何階でせうか？」その人は上を指して云つた「此の上――四階です」と。私は輕く頭を下げた。「此の上、あゝさうですか、ありがたうございました。」そして邊りを見廻しながら小さな聲で、（さうするとどこから昇るのかしらあゝ、こゝからか）と呟きつゝ降りる階段に向いて步きはじめた「もし〱、こつち〱こつちから昇るんですよ」その人は呆れたやうな表情で私を呼び止めて再び指さした。そこには幅二間に餘る大階段が私を厭でも應でも四階に連れて行く可く目の前にそびえてゐたのである。私は苦笑して禮もそこ〱に階段を駈け昇つた。一時性の部分的明盲症かと自分をひやかしながら――。
　前にも書いたやうに私はこの役目に對して意識的には大して異存も持たぬやうに訓練されてゐた筈だつた。それなのに、無意識はこの役目を嫌つてゐる。その割れ目にのさばつて來たものがこんなに馬鹿げたことをさせたのだ。これだから無意識によく手入れをして置かないと、これ位の失敗ではすまされぬ過失を引起さぬとも限らないと分析自戒した次第であつた。然しこの場合、階段を昇ることの拒否は單にその時の役目への抵抗とのみ解するわけには行かないらしい。他のもつと深い意味があつて、それとコムプレクスされたものが、思はぬ所へ不意に現はれたと理解するのが正しいやうに思ふ。私は時々、昇れば非常に明るく美しい場所に出られると知りながら、その階段を避けて昇らずに孤獨で憂鬱な感じのする道を步き遠去かつて行く自分の姿を夢に見る事がある。分析はこゝからもつと奧にゆかねばならないのだが、誌上は分析室ではないのだからこの邊でごめんなさい。

精神分析學入門講話（十六）

ジグムント・フロイド（K・O・生譯）

夢と內外の刺戟

我々は姑く夢の「意味」は不問に附しておいて、種々な夢に共通するものを求め、それに依つて夢への理解に一步を進めたいと思ふ。睡眠狀態に對する夢の關係からして、我等は夢が睡眠障碍の刺戟に對する反應であると云ふ結論に達したのであつた。これはまた精密實驗心理學が我等に助けとなり得る唯一の點であると云ふことも、既に我々は知つた。さき程その名を擧げたムルリ・ヴォルドの實驗を入れて、さう云ふ研究は澤山にある。我々の總ても恐らく自ら時々これを體驗することにより、この結論を確證する立場にあるのだ。私は二三の古い實驗を擇んで報告しておかうと思ふ。マウリはそのやうな試驗を自身で行つた。夢の中でオー・ド・コロンの香水を嗅がせて貰つた。すると、彼はカイロのヨハン・マリヤ・ファリナの香水店にゐるところを夢見た。そしてそれに續いて種々の馬鹿げた冒險がなされた。また、誰かに彼の頸を輕くつねらせた。すると、夢の中に發泡膏と幼時に掛つた醫者が現れた。或は、額に一滴の水を落して貰つた。と、彼はイタリーにあつて額に汗をかき、オルヴィエトの白葡萄酒を飮んでゐた。

これ等の實驗的に作り出された夢の特色を考へると、他の一聯の刺戟に依る夢を、多分一層判然と理解するやうになるであらう。雋敏なる觀察者ヒルデブラントが報告してゐる三つの夢がある。醒眼まし時計の音に反應して生じたものである。——

「かくて私は春の朝そゞろ步きしつゝ、靑々とした野原を超えて隣村までやつて來た。そこには大勢の村人たちが祭の日の晴着を身につけ、讃美歌の本を小脇に抱えて教會の方へ行くのを見た。成程、今日は日曜だ。さうして朝の勤行がやがて始まるのだ。私もその行に加はらうと決心したが、少し逆せ氣味なので、教會を取圍んでゐる墓地で凉をとらうと思つた。こゝで種々の墓碑銘を讀んでゐる內に、鐘樓守が塔を登つて行くのを聞いた。見ると、塔の頂きに小さな村の鐘があり、そこからやがて祈禱の始まる合圖が鳴り出すのである。

暫くの間、その鐘は動かずにあつたが、やがて搖り始めた。そして突然、鐘ははつきりと耳をつんざくばかりに鳴り響いた。あまりにはつきりと耳をつんざくばかりであつたゝめに私の眠りは妨げられたほどであつた。鐘の音は、併し、眼醒まし時計から來たのであつた。」

「第二の結びつきの話。晴れ渡つた冬の日である。街には雪が深く積つてゐる。橇の遠乘に參加する申出をしたが、橇が戸口に來たとの知らせのあつたまで、隨分待たされた。今や乘込みの準備をする。毛皮の外套を着、足袋を穿き、橇の中に席をとる。併しなほ手間どつてゐる。遂に、待機してゐる馬に感じられるほどの相圖が手綱でなされる。今や馬は動き出した。小さい鈴が激しく動き、あの有名なトルコの軍樂を奏で始めた。その奏樂の音があまりに力強く、そのために一瞬にして夢の織目の糸は斷ち切られた。これまた眼醒まし時計の音に外ならなかつた。」

「なほ第三例がある。臺所の女中が二三ダースの皿を積上げ廊下に添つて食堂の方へ行くのを、私は見た。皿の柱は彼女の腕の中で平衡を失つて危なさうに私には思へた。氣をつけろよ、手のものが滑り落ちるぞと私が注意する。勿論、感謝の挨拶などあるわけはなく、こんなことは朝飯前ですと云ふ位のところが落ちである。その間も私は心配さうな目付で彼女の足どりを見送つてゐる。果然、食堂の閾に躓いた。こわれ易い瀬戸物は落ちガラ〳〵と音を立てゝ床の上一面に粉微塵となつた。併しその音はいつまでも續いてゐるので眼がさめて見ると、それは瀬戸物のこわれる音ではなくて、金屬の響きであつた。さうしてこの響きは眼をさましてよく見ると、眼醒まし時計がその任務を遂行してゐる音であつた。」

これ等の夢はなるほど美事な、十分に意味のあるもので、大抵の夢のやうに支離滅裂なものではない。これ等に共通するものは、夢いて別に異存はないのである。我々はそれに就の立場がいつも一つの音から由來して居り、それを人が覺醒の後に眼醒まし時計の音だと知つてゐる點である。かくて我々は夢が如何にして作られるかを知るのであるが、併しそれ以外の事をも知るのである。夢は眼醒まし時計を認識してをらず時計は夢の中に現れて來てもゐない。夢は眼醒まし時計の音を他の音に置きかへ、眠りを破る刺戟を解釋するが、いつも別のものに解釋してゐる。何故であるか。それに對しては答へは與へられてゐないが、それは氣まぐれなものであるやうに思はれる。併し夢を理解するためには、夢が覺醒への刺戟を解釋するに特にこの音、かの音と定め、他の音としなかつたかと云ふ點について答辯が出來なくてはならない。同じやうなやり方で、我々はマウリの實驗に對しても抗議したくてはならない。與へられたる刺戟は成程、夢の中に現れては居るが、併し何故特にこの形で現れたかと云ふことは分つてゐない。さうしてそれは睡眠障碍の刺戟の性質からは出て來ない形である。またマウリの試驗に於いては、直接的な刺

戟の結果に大抵は更に一群の別の材料が附加せられてゐるではないか。例へば、オー・ド・コロンの夢に馬鹿げた冒險が續いてゐるが、あれに就いては何とも說明がつかないではないか。

そこで諸君はかう考へられるであらう、覺醒させる夢は睡眠障碍への外的刺戟の影響を確める最上の機會を供するものであると。大抵の別の場合に於いては、それを確めることはもつと困難になるであらう。あらゆる夢が眠りを醒まさせるわけではない。で、朝になつて夜の夢を想起した時に、多分夜中に襲つて來た障碍的刺戟を如何にして發見することが出來るか。私はかつてそのやうな音の刺戟を後になつて確めるに成功したことがあるが、それは勿論、特殊な事情のお蔭によるのであつた。ある朝私はチロルの高峰で、夢に法王が死んだと見て眼が醒めた。私はその夢を自分に說明することは出來なかつた。併しやがて妻は私に訊ねた、あなたは朝がたになつて總ての教會や禮拜堂から鳴り亙つた驚くべき鐘の音を聞きましたかと。いや、私は聞かなかつた、私の眠りは頑强であつた、併し私はこの報告のお蔭で自分の夢を理解したのである。そのやうな刺戟は如何に屢々睡眠者をして夢見させるものであらうか、而も本人は後になつてもその刺戟の事は何も知らないで過ごして了ふものである。さう云ふ事は多分屢々あるであらうが、また存外屢々でないかも知れない。さう云ふ刺戟の有無が後になつて確められない場合には、それに就いての確信も得られない。刺戟の有無の確證がなくとも、睡眠障碍の外的刺戟の評價に我々は戻つて行く。何となれば、外的刺戟はたゞ夢の一部分を說明し得るのみであつてその全的反應を說明し得るものではないことを我等は知つてゐるからである。

是れ故に我々はこの理論を全的に放棄するには及ばないのである。なほそこから別の考へを引出すことが出來るのである。睡眠が何によつて障碍せられ、心理が夢へと刺戟せられるかと云ふことは、明かにどちらでもよいことである。それが常に必ずしも外部から來る感覺刺戟であり得ないならば、內部器關から發する所謂肉體刺戟がそれをなすと云ふことにならう。この想定は極めて馴染深いものであつて、これは、やはり夢の成生に就いての世俗的な見解に符合するものである。例へば、夢は胃から來ると云ふやうな說を屢々聞く。遺憾ながらこゝでまた、夜中に働く內臟的刺戟は覺醒後にはもう早何とも證據がなく、從つて證明の仕樣もないと云ふ場合が屢々であらうと想像せられる。併し我々は多くの夢が內臟的刺戟から導き出されることのよき經驗の多くを看過したくない。內部器關の狀態が夢に影響を及ぼし得ると云ふことは疑ひの餘地がない。多くの夢の內容が膀胱の充滿とか性器關の亢奮狀態と關係があると云ふことは極めて判然としてをり、看落すことの出來ないものである。このやうに一見明白なものもあるが、さうでないものもあつて、それ等の場合に於い

ては、夢の內容からして少くとも一つの當然の想定を導き出すことが出來る。卽ち、そのやうな內臓の刺戟の影響に依つて夢の中に或るものが生じ、その或るものはそれ等の刺戟の變形、表現、解釋として考へられ得るものであると。夢の研究家シェルネル（Scherner, 1861）は夢が內臓器關の刺戟に由來することを主張して、それに關して二三の美事な實例を擧げてゐる。例へば、彼が或る夢の中で「ブロンドの頭髮と柔和な顏色を持つた美少年達が二列になつて對立し、相互に喧嘩をしようとする。双方から歩み寄り、相手につかみかゝり、そしてまた元の位置に戻つて全體の過程を再び始める。」と云ふ場面を見、この少年の列を齒並と解釋してゐるのは如何にも尤である。而もこの夢の場面のあとで、本人は一本の長い齒を顎から引抜いた」ところを見たのは右の解釋を確證するものと思はれる。また「長い狹いうねうねした通路」を腸管の刺戟と解釋したことは、如何にも尤であつて、夢は刺戟の發する器關をそれに似たものを以て表はさうとするのだとのシェルネルの說を裏書きするものである。

このやうな次第であるから我々は、夢に對して內的刺戟が外的刺戟と同じ役割を果すことを認める用意をしなければならないが、遺憾ながら內的刺戟の評價に對しても同じ抗議が起きて來る。非常に多くの場合に於いて、この內臓刺戟に對する解釋は不確實であるか、或は證明不可能である。內的器關の刺戟が夢の成生に參與してゐるのではないかと思はしめるものは總ての夢ではなく、極一部分の夢であり、そして遂に內的刺戟も外的刺戟と同樣、夢に就いて多くを說明することは出來ず、たゞ出來るのは刺戟に對する直接的反應に就いてだけである。夢の中のそれ以外のものは何處から來るかと云ふことは、依然不明である。

併しながら、これ等の刺戟の效果を研究して見て表れて來る夢の生活の一つの特徵に注意するやうになる。夢は刺戟をたゞ單純に再現するものではなく、それに變化を與へ、そこに何物かを加工し、そこに一つの秩序を立て、他の何物かを以てそれに代へるやうにする。それが夢の仕事の一面でありそれが我々の興味を牽かざるを得ない。何となれば、それが多分我々をして夢の本質に近付かしめるものであるらしいからだ。もし何人かゞ或る刺戟に依つて何かの仕事をしたとすると、その刺戟だけでその仕事がなされたとは云へないであらう。例へばシェイクスピアの『マクベス』は時の英國王が三つの國の王冠を自分の頭上に統一し得た時の際物劇であつたのである。併しこの歷史的契機だけで劇の內容が被ひ盡されてゐるであらうか。作としての偉大さと謎とはそれに依つて說明し盡くされるであらうか。多分、睡眠者の上に及ぼす內外の刺戟はたゞ夢への刺戟に過ぎないもので、その本質はそれに依つても我々にはなほ未知であるだらう。

夢のそれ以外の共通點、その心理的特殊性は、一方に於いて把握し難いものであると共に、他方に於いては更にそれ以

上追及の手掛かりを一向に與へてゐないものである。夢に於いては、我々は大抵の場合、何かを視覺的形態に於いて體驗するが、その時實際視覺に於いて何かの刺戟が働いてゐるのであらうか。我々が體驗するのは實際に刺戟であらうか。それでは何故にその體驗は視覺的となるのであらうか、眼の刺戟が夢を惹起することは極めて稀であるのに……。或は何かの會話を夢に見てゐるとすると、我々はその睡眠中に何かの對話か或はそれに類した音を耳に受けてゐるのであらうか。そんなことは到底あり得ないとして、私はこれを拒否する自信がある。(未完)

精神分析學語彙(四六)

一、注意(Aufmerksamkeit)——注意は心理裝置に於ける意識系統の一つの機能である。この系統は感覺器關を手段として外界を定期的に探索し、かくて何か急を要する內的要求が生じた時に、外界の種々の事項が前以て承認せられるのである。この活動は感覺的印象に對抗して進むものであつて、それに隨順するのではない。注意は本來たゞ外界にのみ向けられてゐるが、たゞ後になり、抽象的な思考の言葉が造られるに及んで、內的過程にも向けられるやうになつたのである。注意は現實原則の確立と共に發展して來たものである。

「隨伴的注意」と云ふ言葉をフロイドは用ゐてゐるが、これは分析者が患者取扱中にその語るところに對する心理的態度を云ふのであつて、つまり分析者が聽いてゐなくてはならない一切の事に同程度の心を向けてゐることで、特に或る點に注意を高めたり、自分が何かに氣をつけてゐるかと云ふやうな事に心を煩はないことである。これは患者が從はねばならない受分析時の根本規定(聯想を極度に自由にし、意識的統制を絶對に加へないこと)に對應するものである。テオドル・ライクに依ると、この隨伴的注意に依つて分析者は患者の供述する材料に對して、かの無選擇受容的心理態度をとることが出來るやうになる。隨伴的注意に依つて患者供述の印象材料が集積せられ、それ等の間の一層深い關係はずつと後になつて分析者の心內に無意識加工に依つて出來上り、さうして分析者自身の思ひ浮びとして後にその心に擡頭し來る。それに反し、能働的、氣まぐれ的注意は觀察し得べきもの、受容し得べきものゝ中から一部分を選んで切取り、從つて他の部分(その部分から新しい、一層深い關係が勿論無意識的加工の後に知られるのだ)を等閑に附するやうになり勝ちである。

一、支出(Aufwand)—支出と云ふ語は、精神分析學の力學的(動的)觀念體系の中から生じたものである。支出とは、つまり、心理裝置內の平均狀態を正しく保たうために利用せられることになつてゐるか、或は利用せられてゐる心理的エネルギーの一定量である。で、例へば、或る觀念を抑壓狀態に保つておくためには自我の方に於いて不斷に心理エネルギーの要求が提出せられることになるのである。さう云ふやうな場合の心理エネルギー要求を、「抑壓的支出」と名付けるのである。機智の說に於いては、支出が大きな役割を果してゐる。何故ならば、フロイドに依れば、機智、滑稽、諧謔などに於いては、或る支出が急に中止せられ、又

は思ひもかけず節約せられた場合には、その効果を生ずると云ふのだからである。機智の場合には禁制に於いてエネルギーが節せられ、滑稽に於いては纒綿に於いて節せられ、諧謔の場合には感情に於いて節せられ、かくて笑ひの言動的行動に於いて快樂となつて發散せられるのである。

一、眼（Auge）——眼はその形態のために、その鋭い動きのために、その高度の心理的價値のために、またその鋭い感受性のために、特に性器の象徴となりやすいものである。それ故に本來、性器に集約せられねばならない本能感情や纒綿は、轉位の機制に依つて下方から上方に移され、眼に關係を持つやうになつた。從つて失明は去勢を意味し、その事はエディポス神話に於いて極めて判然と示されてゐるのである。エディポス王は兩眼を抉り出してその贖罪をした。

一、アウラ（Aura）——アウラとは何れかの感覺分野に於ける一つの煽情的な興奮を云ふ。さうしてその興奮は一つの癲癇的發作の前觸れ的徴候として常に必ず同じ形で現はれる。アウラは苦痛であることもあるし、四肢の何れかに於けるムヅカユサであることもあるし、幻覺であることもあるし、空氣（アウラとは「空氣」の意）に吹かれてゐるやうな感じであることもあるし、特殊な趣好であることもあるし、筋肉痙攣であることもある。

一、表現（Ausdruck）——直接的には知覺出來ず、その存在を我々が間接的に知り得る如き何かの内容を人に知らせるやうにすることとを云ふ。心理的過程の最も普通の表現は言語である。言葉及び文章の意義を受容するためには意識的心理過程に關する知識と云ふ手段が必要である。併しそれと共に、心理的なもの丶表現としてはなほ態度身振りなどがある。この方の表現は言語的表現の内容ほどには本人によつて統制せられ得ない。併しまた言語的表白に於いては、内容の他に、言葉の選擇に於いて、音調に於いて、テンポに於いて、更にまたそれに隨伴する身體に手振りに於いて、心理的なものが表現せられる。殊に精神分析操作に際しては、言語的報告の意味や内容以外に、その他の表現を、例へば態度や様子の中に現はれるものを、特に注意するのである。かくて相手の意識を超えて知られざる心を理解するやうにする。實際に、精神分析は話されてゐる言葉の内容と知られざる心の別の表現との間の矛盾を一層高く評價するのである。何となれば、後者の方が深部心理上の立場を一層確實に表示するものだからである。心理的表現の分野は、精神分析の研究によつて今までに考へられてゐたよりは一層廣く發見せられた。かつてヒステリーの肉體的症候は無意識心理の表現であり、反復と動作とは無意識心理内容の表現としてのみ理解せられるのである。——未完——

内外彙報

獨文國際分析學雜誌

▼一九四〇年第二册、英京ロンドンにて發行。

一、「メヅサの首」――ジグムント・フロイド遺稿。

一、「ヒステリーの發作の理論」――ブロイヤー及びフロイド。

一、「分析に際して慢性的に沈默する者」――マルヤシユ。

一、「男子同性愛に於ける口唇性感的要素」――ビブリング。

一、「自我及び超自我の本能纒綿に就いて」――ヘルマン。

一、「精神分析裂症及び躁病に於ける言葉の役割」――カータン。

一、「生命的本能と肉體的本能とに就いて」――レーヴェンスタイン。

一、「遺精の病源及び體質に就いて」――ヒッチマン。

一、「イスラエル・キリスト教史に於ける不安及び强迫の問題に就いて」――オスカー・プフィスター。

一、「死を敵視する心理（首狩りに就いて）」――マリア・ワイグル・ピスク。…………一、新刊紹介批評――

英文國際文析學雜誌

▼第廿一卷（一九四〇）第一部、英京ロンドンにて刊行――卷頭にはアーネスト・ジョーンズがフロイドへの長文の弔辭を揭げてフロイドの意義を論じ、その他は殆ど全卷を擧げて、フロイドの「精神分析要綱」を揭げてゐる。この論文は數ケ月前に本誌本欄で紹介した獨文國際雜誌の內容の英譯であるから、こゝにはその章節の名を一々細かく紹介することは控へておく。卷頭にはフロイドの恐らくは最後の肖像を揭げてゐる。

▼第廿一卷第二部――

一、「喪の心とその鬱憂狀態への關係」――メラニエ・クライン。

一、「神經症及び神經症性格に於ける早期環境の影響」――ジョン・バウルビ。

一、ショック療法に於けるショック間の心理的經驗」――イシドール・ジルベルマン。

一、「言語に於ける心理生理上の問題（譬喩に就いての一試驗）」――エルラ・フリーマン・シャープ。

一、各種心理學雜誌所載論文批評―― 一、新刊紹介――

精神肉體醫學

▼フランツ・アレキサンダ、フランダース・ダムバーその他諸氏編輯の米國醫學誌――

一、「アドレナリン及び、メコリルに對する精神神經症患者の主觀的反應」――リンデーマン及びファインシンガー。

一、「動脈の過度緊張に於ける精神肉體的起源は多分心臟脈管叢に存すべきこと」――エトワルド・ワイス。

一、「椎骨の神經病」フェッテルマン。

一、「ヒステリー性憂鬱に關聯する潰瘍性結腸炎患者の處置」――ヂョーヂ・ダニエルス。

一、「視丘下部に關聯する情緒的障碍」――バーナード・アルパーズ。

一、「精神療法及び精神療法家の新指標」――ヂーヂ・アレキサンダ。

一、新刊圖書雜誌論文批評――

精神分析季刊

▼米國雜誌、第九卷（一九四〇年）第四册

一、「患者の分析理解に舊時通りに見たる夢を利用すること」——レオン・サウル。

一、「婦人の極端なる盲從の分析」アニー・ライヒ。

一、「神經症的優柔不斷の四つの型」エトムンド・ベルグラー。

一、「精神症の分析取扱の經驗」——バラート。

一、「救助願望に於ける攻擊慾」——リヒヤード・ステルバ。

一、「お前及び貴方の心理學的意義」——ジルフエルベルグ。

一、「社會と個人」——ゲザ・ローハイム。

一、「ゲルトルード・ヤコブの死」一、新刊批評。——

メニンガー診療所報

▼米國カンサス、トペカに於ける精神分析診療所報、昨年九月號——

一、「精神病院學校の機能」アール・サクス。

一、「遊戲技法を用ゐる精神病學診療所に於ける兒童の取扱」——キリアム・カメロン。

一、「兒童の精神分析」——マリー・ホーキンズ。

一、「精神衞生研究所に對する兒童の模倣」——諸家。

國內關係時事

▼「精神分析療法に就いて」丸井淸泰氏稿——『診療と經驗』十月號

▼「夢の話」闘寛之氏稿——『安田貯蓄』十一月號。

▼アイヌ民族の祭典旭川市近文の熊祭りも、新體制の風潮に乘つて今後廢止の運命となつた。每年十二月盛大に行はれる傳統の神事も觀光客の需に應じて隨時行つてゐた熊祭りも全く見られなくなり命拾ひした熊公のみ大喜びだ。（旭川）と十一日廿一日東京朝日に出てゐた。わが國に於けるトーテミスムスの重要な名殘の一つもこれで消滅したわけである。

▼大槻憲二氏文筆近業一束——

一、「幸福の心理」——新刊批評欄參照。

一、「善惡の硏究」——『人生創造』十二月號。

▼本誌前號（册子）及び前々號の內容に就いては廣告欄を參照ありたし。

研究會例會

十一月例會は十八日夜、例により神田アメリカン・ベーカリにて催された。食前、大槻氏は「贅澤は敵か」と題する論文を朗讀して一同の批評を求められた。また例により本誌前々號（正誌）所載語彙の解說を試みられた。

食後、新來會者として中村透氏と伏屋睦子さん（共に高橋鐵氏の友人）の紹介があり、續いて睡眠及び不眠の問題に關して諸氏の意見が交換せられたが、大槻氏は本號卷頭所載の論者をまだ體系づけないで話された。田中虎男氏は藥種硏究者としてビタミンBが缺乏すると眠くなると云ふ事を說かれた。大槻氏卷頭論文中に言及せられてゐる長尾忠氏報告のヒステリー性不眠症患者は、この席で報告せられたのであつた。今夕は纏つた硏究談は少なかつたが、出席者みなよく發言して非常に賑かな會合であつた。出席者は右言及諸氏の他に立川玄一郎、有馬秀雄、馬場由子、大槻岐美、高橋鐵、長尾忠、小野田幸

雄、平野直人、瓶子喜巳、大久保眞太郎の諸氏であつた。小山良修、櫻井文子兩氏から鄭重な缺席挨拶を頂いた。

講習會例會

十二月例會は例年の如く、忘年會、執筆者慰勞を兼ねて本郷江知勝樓上で催された。司會者大槻氏は、この數ヶ月あまり多忙であつたゝめに會の前二三日病臥してゐられたが、當夜はやうやく起上つて出席せられた。從つて講習準備が出來なかつたことを謝して、その代りに書きかけの本卷頭論文の重要の個所を朗讀して批評を乞はれた。土屋舒廣氏も第二論文の中心の部分を朗讀せられた。土屋氏は今夕の催しのためにわざ〳〵宇都宮から上京せられたのである。

酒はいさゝか水つぽかつたが、とにかく人々の顏を染めるに足り、炭火は乏しかつたが、とにかく鍋と室とを暖めるに不足はなかつたのであるから、物資缺乏の折柄、結構な宴席であるに相違はなかつた。宮崎正路、長尾忠、小林一の諸氏から果物の寄贈を受けて一同脂つ濃い食後の口を淸め、やゝ遲れて出席した高橋鐵氏はまた新たに女中を口說いて酒の追加を寄贈せられた。一同上機嫌になつて上品な洒落を交した。その一つをこゝに紹介すると、大政翼賛會宣傳部に關係してゐられる高橋氏に向つて或る人が、「大政翼賛會の一番上の人は誰ですか」と尋ねたに對し、高橋氏は「それはやはり近衛さんでせう」と答へると長尾氏は側からすかさず「コノウヱはないわけだ」と洒落れば、田中虎男氏はまた橫合ひから「コノウヱはあるにはあるがコノヱだ」と叫んだ。實に美事で上品な洒落で氣持がよかつたからこゝに紹介しておく。例年以上に本年度のこの集りは一層朗かで愉快であつた。出席は右言及諸氏の他に、宮本縣、平野直人、小野田幸雄、馬場由子、高木統他郞、長崎文治、大槻岐美の諸氏であつた。大場嚴、宮田戊子兩氏から缺席挨拶を頂いた。

研究所だより

▼本年度のフロイド賞牌は大內靑坡氏を煩はすことになり、その作品は既に十二月中上野美術館に開かれた「新協」展に出品せられてありました。

▼小山良修博士は日本橋病院小兒科主任を辭し、和光堂研究所長に就任せられ、主として乳幼兒の榮養品並びに藥品研究に專心勤務せられることゝなつた由。氏の榮轉を祝します。

▼文獻維持委員石栗榮次郞氏（小樽市）は、紀元二千六百年の記念の意を含めて更に文献維持費一口分を寄贈せられ、誠に恐縮に存じましたが、折角の御厚志故有難く拜受いたしました。氏の挨拶文の一節に「大きな變化、大きな流れ、そして精神分析の聲をきゝつゝ生きて行ける私達は惠まれたものと心から感じます」とありました。

▼御覽の通り本號には皆樣の一方ならぬ熱意のこもつたお便りが集りました。この學問がどう云ふ意味かで役に立てばこそかうして熱意を示されるのでありますけれど、その熱意は私共の勇氣の源であります。洵に學問をする者等にとつては、自分等の研究が現實生活に役立ち、皆樣方の支持にいさゝかなりとも報いるところのある反響を聞くほど深い歡びはございません。いよいよ多難な時代を迎へるに際し、新年の御挨拶に代へてます〳〵努力することをお約束すると同時に、皆樣方の一層の御聲援と御協力を御願ひする次第でございます。

通信

▼飯田巖代治氏（千葉縣）――

冊子中、大槻氏の「分析を受ける人の覺悟」大變有意義に拜見しました。患者の全人格に革命を來たさしめ、更生させやうとする分析者の忍苦は察するに餘りあります。ステーケルの「技法入門」には樣々の患者が登場して來て、達識老練のステーケル博士を色々な手段で惱ます場面が面白く描かれて居ますが、それにしても分析は骨の折れる仕事であることが思ひやられます。そのことは學校敎育にも或程度あてはまるのではないかと思ひます。グラ／＼な生徒のエス的の人格をともかく社會に出て立つて行けるやうな人間に五年間位でつくつて行かうと云ふ小生等の中學生敎育も人知れぬ苦心があります。結局眞のよき敎師はよき分析家たるを要すると云ふ事になると信じて居る次第です。

▼國吉眞一氏（那覇市）――

先日注文の「性格改造法」早速御送り下さいまして有難う御座いました。先生の御著は册を變へる每に興味をそゝり、今眞理探求の喜びに浸りつゝ貪る樣に讀んでゐます。先生の御著に接してから一年そこらで御座いますが、其の間に自分の性格や人生觀が如何に變化改造され、又現に改造されつゝあるかを思ふと只感謝の念に堪えません。――（一）、少年時代から惱まされがちだつた日常生活の細事に於ける「去勢恐怖」がなくなつた事。（二）、實質的自惚れを再建すべき努力の重要性を知つた事。（三）、日常生活に於ける對人的感情の經濟をなし得た事。（四）、今まで兎角嫌惡しがちだつた社交的なものに、今では分析的の溢るゝ興味を持つて積極的に社交的なものを求める樣になつた事。（五）、生きてゆく信念みたいなものが明瞭に形造られてきた事。等々が特筆すべき收獲だつたとも思ひます。そして社會には自らの性格の爲に破滅してゆく人々が如何に多いかを眼前して自分の幸福を感ずると同時に、此等不幸な人々を救ふ爲に精神分析が廣く一般的に普及さるべき事を痛感致しました。それから最近嬉しかつた事は、親友の破綻しかけた戀愛問題（女性二人と男性一人の間に起つた）を私が分析的に解決してやつて今ではうまく行つてゐるとの事で感謝された事です、今一つは、自分の性格をもてあまして惱んでゐる友達に分析法をすゝめて今では性格改造の光明を見出して更生の意氣に燃えてゐる事です。其他、感情問題や性格問題に於て分析的に解決してやつて感謝された事が二三ありました。これで自分も意外な所で他人の爲に盡す事が出來たといふその喜びは大なるものでありました。

▼賀屋壽巳氏（南支出征中）――

「育兒心得」號に載つてゐた、『中央公論』所載小說「乳の匂ひ」は私も讀んで一通りの分析はしてみましたが、それがはからずも本誌上に分析されてゐたので、自惚れのぼせた次第であります。每月送られる册子、正誌共にインテリ戰友に讀ましてをります。一人でも獲得したいと思つてをるのですが仲々。……以前送つてもらつた「續戀愛」は初年兵にかしてゐましたら、○○出張に持つて行き失くしてかへりましたので殘念やら腹が立つやらしましたが、拾つた者がそれにより斯學入門の端緖にでもなかつたらと思ひ返してをります。

精神分析 前號要目

前號（正誌）正誤表

頁	行	誤	正
五	九	total	total
一二	二二	句括	包括
一三	三	原則	原素
一六	七	善んで	喜んで
一八	五	政冶	政治
二二	一一	協力とが	協力が
同	一五	日木	日本
二三	一〇	上つて	よつて
二六	一六	解覺放	解放
同	一七	自覺他	自覺覺他
同	同	前者に	前者は
四九	一	を子供が	が子供を
五一	七	象微	象徴
五六上	一〇	あるが。	ある。
六五下	一四	彷徨	彷彿
六六下	二三	ゐる	ある
七五下	二四	學文	論文

（附　　　録）

Psychoanalysis and Suggestion Therapy

Their Technique, Applications, Results,
Limits, Dangers, and Fxcesses,
by

Dr. Wilhelm Stekel

精 神 分 析 技 法 入 門

ヰルヘルム・ステーケル原著
大槻憲二・飯田龜代治譯

第一部　精神分析及び心理療法の技法と適用

フロイドの初期技法——自由聯想——聯想法——病氣への意志——心理葛藤——精神分析と再教育——分析は物好きに非ず——不能症とアカシシヤ病——分析と暗示——催眠術の特殊能力——野戰病院での經驗——その他……

第二部　分析處置の窮極結果

抵抗の意義——抵抗の一形式としての轉嫁——或る患者の抵抗の夢——患者と分析醫との格鬪——性的外傷の意味——明盲症分析——外傷病源說とフロイド——分析三年——夢漁り——醫師の人格が治す——短期處置——その他……

第三部　精神分析の限界、危險、行過ぎ

最初の分析學會——精神分析の蔓延——分析の淺解——分析と群集本能——分析醫の精神症經驗——藝術家としての分析醫——分析實施に直觀の必要なること——分析學習方法——一方的習練の危險——神經症者はみな直るとは限らぬ——分析後の抑壓——分析と分裂症——その他……

誘發することに依つて感化が及ぼされる過程である」と。更に彼は云ふ「總べて暗示は催眠術者の存在を必要とする。そして彼が成功するか否かは被術者の信頼を捷ち得る彼の能力、相手を信頼させるやう取り入る彼の力、及びかくして反對の總べての疑ひや思想を消散せしめる力に懸つて居る。」と。此定義は暗示者の意志力が相手の意志力よりも強いことを豫想として居る。暗示とは、ジャネー（Janet）に依ると分裂せる精神の自動現象であり、リップスに依ると部分的自己の機能であるのだから、これはより強い自己意識的人格への服從を意味する。

ブロイラー（Bleuler）は部分的に此問題を解いた最初の人であつて、彼は「暗示は本能感情的過程である」と說いて居る。勝利を得るものは思想でもなく、想像でもない。傳達せられて、それと共に思想を連れ來して來るのは情緒又は本能感情である。

若し教師がその生徒の興味を惹き起すことが出來るならば、彼の話は熱心に傾聽せられ、生徒の上に暗示的感化を及ぼすことが出來る。

併し暗示者がその思想を傳達し得るために喚起せねばならない興味の性質如何？學校の例に立返つて見やう。若し生徒が教師を好いてゐるならば、教師の敎へることは生徒の心にたやすく這入り込んで行く。生徒は教師を崇め尊敬してゐなければなら

ない。彼を賞讃し、崇拜し、愛し、即ち別の言葉で云へば、教師を信頼してゐなければならない。教師は生徒の情緒を動かすことが出來なければならない。暗示とはそれ故情緒の傳達であり、暗示者が「相手を魅了(ファッシネート)する」過程である。併しこゝに云ふ魅了とは何か。それは愛と同情の急激な感情である。愛すると云ふのは「神を發見する」ことを意味する。暗示の作用する瞬間に於て、暗示者は相手が絕對的に彼を信頼する故に盲目的に從はなくてはならない神となるのだ。

吾々は常に何かを期待する氣分で生きてゐる。即ち絕えず或る奇蹟を待つて居る。吾々は實際は、奇蹟に對する信頼を失つて居ない。超自然物、魔法力ある者に對する吾々の幼年時代の信頼は、吾々の魂になほ秘かに宿つて居る。吾々の幼年時代には、兩親は偉大、善良、全知、全能なる總ゆるものを賦與されて居る魔力的力を有する驚嘆すべきもののやうに吾々の眼に映じて居た。時はかやうな幼年時の思想を消し去つて了ふ。吾々の兩親は吾々の眼からその神的屬性を失ふ最初のものである。そしてその屬性と共に全世界の榮光は消え去る。詩人ヘッベル（Hebbel）は彼の自敍傳の中で彼の父が或る日怖しい暴風雨の間、震へながら跪まつて、神に祈りを捧げて手を擧げて居るのを見る迄は、父の全能に對して絕對的の信頼を持つて居たことを語つて居

る。その時迄、此少年は彼の父より偉大なものが在ると云ふことを知らなかつたのである。その時迄、父親は彼の神であつた。併し幼年時代の最初の情緒は吾々の裡に永久に生存して居るのである。「總べて最初の物は兒童の中に永久に在る」とジャン・パウル・リヒター（Jean Paul Richter）は云つて居る。兩親への吾々の信頼は崩壞し得ないものであり、最後迄吾々に殘るものである。

二つの力が吾々の精神を支配して居る。それは權力意志と服從意志である。後者は非常に強大で、吾々の中の最も獨立的な性格の者の中にさへ認めらるものである。愛とは服從意志である。暗示を受け入れて服從するのは暗示者に力のある證據ではなくて、寧ろ吾々自身の弱點の存在を示すものである。吾々が服從するのは暗示者がそれを意志するからではなく、吾々がそれを意志するからであつて、それは丁度吾々が眠りたいから自然的睡眠に陷ると同様である。

例へば、暗示者が勢よく「君は腕を上げることが出來ない」と云ふとする。吾々は腕を上げやうと思つてもそれが出來ない。服從しやうとする意志は吾々自身の意志力を取り去つて了ひ、又その意志力は今や暗示者の使用するところとなり、吾々に彼の言葉を信ずるやうに命ずる。吾々は、幼兒が父に對する關係に於てその意志力を失つ

て了ふと同じやうになる。暗示はそれ故幼兒狀態への急激なる後退であり、吾々の信仰、愛、畏怖の感想の動員を意味する。總べての人間は多くの斷片的精神を持つて居り、その中に幼兒的精神がある。吾々の中の幼兒性は不思議を見やうと望んで居る。それは錯覺を抱いてをり、それが吾々の實際の願望の一部分となるから、暗示の力に服するのである。吾々は腕を動かすのを欲しないのである。「吾々は腕を動かすことが出來ない」と云ふのは本當ではない。吾々が出來ないからしないのではなくて、吾々が欲しないから出來ないのである。健康な人は神經症者よりも一層催眠術にかゝり易い。神經症者は幼兒的な自己の周圍に多くの防壁を築いて居り、禁制と恐怖のために、又頑固と反抗とが心的習慣となつてゐるために、一層服從し難くなつて居る。健康な人は、このやうな幼兒性に復歸するやうなことがあらうとは考へないから、服從するのである。

併し分析と暗示とはどんな關係があるのであらうか。若し私が患者に、コムプレクスが取り除かれゝば病氣はすつかり快くなるであらうと請合つたならば、暗示の力を疑問にしてゐる點で正當であらう。併し私は別に治癒を約束はしなかつた。私はたゞ治療への試みを暗示したに過ぎなかつたのである。

暗示は病氣の原因又はより深い動機を考慮に入れない。それどころか、精神過程に對する肆意的な、押しつけがましい干渉を意味する。分析は此れとは違つて、神經症の精神的根源を探査し、それ等を赤裸にし、患者を苦めて居るものゝ本態を彼に示してやる。又、分析以前には彼の意識の領域外に置かれて居た心的葛藤を率直に認めるやうに強ひ、また患者が病氣の最後的解決を試みるやう訓練する。

さて前の患者の事に立戻つてみる。アカシシヤ病は彼の妻と雇ひ少女の間に彼を彷徨させ、準無意識狀態の間に犯罪的空想に耽らせて居た。私は彼をしてその思想を冷靜に觀察することを得しめ、抑壓を放棄させ、犯罪的傾向を征服させ、又彼の苦惱を除去するために、その女中を解雇して彼の魂を自由にするやう斷然決心させた。私は病氣の裝ひの下に都合よく逃込んでゐるのを引きずり出し、健康に復歸するやう彼の心に變化を與へてやつた。

それに就いてから云ふ質問が起るかも知れない——同じやうな結果は暗示に依つて得られないであらうか。患者に催眠術をかけ、彼のコムプレックスに就いて質問し、彼が意識的には知ることが出來ないこと、或ひは知らうと欲しない事に就いて話してやれば、數日中に病氣は回復するのではないだらうか。君の方法では同一目的に達する

のに二三ヶ月を要するではなからうかと。これに對して私は答へる——此種の神經症患者に催眠術を施すのは非常に困難であると云ふ事實は別問題としても、彼等は催眠術狀態に於ても彼等のコムプレックスを露はされないものである。私は外傷性神經症の入院患者數千に就いて催眠術を施してみた。此場合、明瞭に詐病患者とみられる例外を除いては、多くの患者は、殊に健康者は(此點を私は特に強調したい)容易に催眠術にかゝつた。第二に、外傷性ヒステリーの場合は容易に催眠を施し得る。併し不安神經症、強迫神經症、不能症、及びヒポコンドリ(恐病症)の場合は殆んど催眠に無感覺であり、その狀態では彼等に殆んど近寄ることが出來ない。併し此の原則に多少の例外があると云ふことは確かである。其上、此特別な患者は催眠術やデュボアの方法を試みたのであつたが、不成功に終つたのである。

催眠術は抵抗を幇助し、何ら教育的仕事を成就しない。又、神經症患者の精神的構造に對しも何の洞察も得られない。フランク(Frank)ワルダ(Warda)レーヴェンフェルド(Loewenfeld)等に反對して、私は此點を強調しなければならない。催眠術と分析とは正反對なものである。

私はこゝに催眠術及び呪ひの技法の性質及び戰爭神經症の處置に關して數言を補足

してみたい。總べての神經病醫は、神經症者の取扱ひに自己の方法を持つて居り、自分の意志をそれに投入すれば希望の目的を達成してゐる。戰爭神經症に就いて述べてゐる大雜把な論文を一覽すると、大部分の醫師は此の種の病苦への妙法としてファラデック・ブラッシュ（電氣刷毛）を用ひたことが判る。技法の別は色々であるが、多くの場合、結局は一に歸する。卽ち電氣刷毛を治療に用ひて不快を惹起させ、患者をして病苦を訴へることを止めさせることである。神經症はその本質に於いて本能感情の定着である。前大戰後の神經症に於いては、定着した本能感情は戰線に立つ恐怖に依つて誘起される不安か、或ひは戰地の任務に對する內部的嫌惡かであつた。吾々は激烈な神經病を見たが、彼等は抑制出來ない身震ひの發作を表はし、その發作に惱んで居る者は豫備的任務（看視兵或ひは輜重隊等）にしか用ふることが出來ず、此のやうな發作は殊に彼等がその苦痛のために病院治療の恩惠に浴し得ると云ふことが判つた場合に一層激しかつた。總べての適當な種類の治療は正反對の本能感情を高めるやうになつてゐる。電氣刷毛に依つて起される苦痛の恐怖は塹壕の恐怖を背後におし込む。併し、誇りの感情は同樣の奇蹟を惹起すかも知れない。暗示は本能感情の傳達である（プローラー）。かく傳達された本能感情は、症狀を形成する核として作用して居

る神經症的本能感情を打破る。傳達せられた本能感情は時としては患者の醫師に對する信頼であり、或ひは愛情であることもあらう。多くの精神病醫が、患者に適當に暗示を與へて準備しておいた後に麻醉を施して良好な結果を擧げるのは、そのためである。それ故、醫者が患者に恐怖を起させることに依つてその目的を達するか、或ひは愛と信頼の念をたかめることに依つて達するかと云ふことは、或る範圍までは醫者自身の心理的素因に由るのである。私は後者の方法を選び、それが極めて良い結果を生ずることが分つた。餘り長い期間他の方法で荒されて居ない患者の場合には、總べて全治することが出來た。私は精神分析は稀にしか用ひず、催眠術と魅了法（醫師に信賴愛敬せしめる法）に私の方法を限定し、覺醒狀態の時は暗示を屢々用ひた。暗示の技法は極めて單純である。

一般的に云へば、殆んど總べての入院患者は催眠を施し易いものである。併しこれは陸軍病院の患者に就いてのみ云へることであつて、彼等の上官に對する服從的態度は此方法に有利であるからである。普通の患者の場合には、條件はそれ程に好都合ではない。

私は未だ極めて少數の神經醫にのみにしか認めて居られない今一つの事實を擧げて

おかなければならない。それは、健康者が催眠術に最も罹りやすいと云ふことである。或種の神經症の中には、その病氣の性質のために患者は人を寄付けないものがある。その中に強迫神經症や不安神經症の一層重い型のものが算へられる。經驗に依つて知つたことであるが、人は醫師と一人だけで居る時よりも、多數の人の面前、例へば病院等に於ける方が一層催眠術に罹り易い。何故と云ふに、患者と云ふ者はいつも不快なことが起りやしないかと云ふ不安に驅られて居るからである。たとへば、ヒステリー性の婦人患者の場合、彼女は性的暴行を恐れて居るかも知れない。だから醫者の面前で一人丈けでは眠る事が出來ない。事實彼女は催眠狀態の間、性的暴行を想像することがあるのである。何故なら、彼女はこのやうなことが起るだらうと云ふ空想を抱いて醫師の診察室に入ることがあるからである。それ故、此の樣な場合には、他の人々が居る場合を除いては催眠術を用ひることは止めた方が好いのである。

前大戰後の神經症に就いてノンネ（Nonne）の報告した良好な結果を私は大體に於て確認出來るし、私自身も患者が外國人であつても通譯の助を借りて催眠を施し得ることを平素から經驗して居ると附言しておきたい。此場合は、豫め患者に「さあ君は直ぐに眠らなくてはならない」とか或ひは簡單に「眠れ」と云ふだけで澤山である。

勿論、患者の國語が分つて居る場合には催眠を施すのはもつと容易である。併しワーグナー・ヤウレッグ（Wagner-Jauregg）の意見とは反對に、スラヴ民族の患者は、私の經驗では、醫師が彼等の言葉が分らない場合でも、他の民族に比べてずつとよく催眠させ易い。私が病院で施行した內、約六百人の患者の內でたつた一人丈けかゝらぬ例があつた。それは程度の進んだ詐病人であつたが、その事は後になつて容易に分つた。併しヒステリーは假病ではない。それは病氣で自分を持遊んで居るのであり、病氣への逃避であり、つまり無意識的な諸々の力の最終の結果である。

私の技法はいつも、凡そ想像し得る最も簡單なものであつた。私は數秒間患者をしつかり凝視して居る。それから莊重な口調で「眠れ」と彼に命令する。普通は看護婦又は他の患者がやがて起つて來ることがらに對して彼のために豫め準備して居る。彼の周圍の雰圍氣は施術に都合が好くなつてゐる。私は聾啞の患者達に催眠術を數回見させた。それから私は彼等の眼をしつかりと見すえて、二つの音を發した。すると、彼等はいつも「魅了された」狀態でその音を繰り返した。そしたら、病苦は間もなく去つた。

催眠術は或る場合には滿足すべき結果を生ずる。私は精神分析は病氣のより一層重

い場合に用ふることゝし、分析を避けやうと思ふ時には催眠術を用ふる。精神治療家は一方に偏して居てはならない。彼は病氣の狀態に應じて適した治療法を選ばなくてはならない。換言すれば、治療法の特徴を發揮しなくてはならない、デュボアの對話法――說得療法――が一番好い時があるし、催眠術が最も適して居る場合もある。私は精神分析は他の方法では効果がなく、再教育により長期間を要する病人の場合のためにとつときにしておく。

そこで問題は起きる――精神分析は何れの場合に最も適して居るであらうか、又精神分析の有効と認められる範圍は何處までゞあらうか、と。本來、フロイドは自分の方法を頗る限られた分野に適用した。彼はヒステリーと强迫神經症とのみを精神原因の病氣とみなし、從つて心理的方法に依つて治療し得るものと考へた。彼は性的生活の或る不調に依つて起る「實際神經症」（Aktualneurose）と、抑壓に淵源する本當の「精神神經症」即ち所謂「轉嫁神經症」とを區別した。實際神經症は神經衰弱、不安神經症及び、或種のヒポコンドリー等である。不安神經症は中絕性交（Coitus interruptus）又はその他の形式の有害なる性的享受によつて起る。所謂神經衰弱は、フロイドに依ると、判然たる臨床的樣相を呈する。その復合症候としては、壓迫感を伴ふ鈍

い頭痛、脊椎の疼痛、ガスに依る胃の澎滿及び便秘を伴ふ消化不良、性能力減退及び憂鬱等である。此の型の神經衰弱は、フロイドに依ると、過度の自慰の結果であるとされて居る。彼は『神經症學小論文集』第一卷の中で曰ふ「神經衰弱は常に過度の自慰又は夢精頻發に因る神經系統の狀態に淵源してゐる。不安神經症は常に性的影響から來てゐることを示す。その影響の特徴は滿足を得る前に中止すること、中絕性交の如き快感不滿足、强いリビドーがあるに關らず禁慾して居ること、又は所謂無駄になつた亢奮等の如きである」と。

フロイドの早期の意見に依ると恐怖症（フォビー）も亦「實際神經症」の範疇に入る。彼はそれ等が心理に發生するとの說を拒否した。「不安神經症」に關する彼の論文の中には次の樣な意見が述べてある。――「不安神經症の恐怖症に於ては病害は單調であつて、(一)いつも不安それ自身であるか、或は(二)その原因が抑壓されたる心象にあるのではなくて、却つてこれ以上更に細かく調べて見てその由來してゐるところを突きとめることの出來ないものだと云ふことが、精神分析の結果分つたのである。從つてこれは心理療法には適しないものである。症候が何物かの心理的代償となると云ふ機制はそれ故、不安神經症の恐怖症にはあてはまらないのである。」と。

此れ等の見解には、私がフロイドの直接仲間の一人であつた時分にでも強く反對してゐた。私は心理的原因のない「實際神經症」の存在を否定し、總べての不安神經症は心理的に決定されたものであるとして、これが心理療法には適しないとの假說を打破した。

私が治療した「外出恐怖症」（臨場恐怖）の患者は或る大銀行の出納係であつた。彼は若干の金子を携へてアメリカへ逃走する考へで居たことを私は證明することが出來た。他の語で云へば、ジャネーの所謂「無意識的固着觀念」に彼は支配されて居たのであつた。ジャネーはその銳い洞察力でこれ等の無意識過程を相當に正しく理解してゐた。第一回の分析對談で患者の犯罪衝動を暴いたので、彼は銀行の出納係の位置を辭職し、それ以上分析をすることなしに苦痛は消失した。

その次の場合は、夫と一所でなければ街上に出られない一婦人の恐怖症であつた。夫が全然インポテントであること、そしてその婦人は絕えず誘惑されることの考と闘つて居たこと、それ故彼女は襲ひ來る無意識誘惑に對する保護役として夫の同伴が必要であつたことなどを、私は發見した。そこで私は次の樣な定說をつくつた「總べての神經症は精神葛藤の結果である。」と。所謂神經衰弱及び不安神經症の多くの患者に

就いて、その根元に精神葛藤の存することを私は發見した。で、總べての神經症は心理的に發生するものであると云ふことの證據（その證據はこれまで不十分であつたのだが）を擧げることが出來たのである。フロイドは神經症の原因は心理的と肉體的との二つに分けて考へるべきだと云つてゐるのであるが……。

フロイドは最初私の診斷を疑つて居た。私の取扱つた不安神經症の患者たちは、實際はヒステリー症者であつた。併し患者が私の許に來る前に、フロイド自身が「不安神經症」と云ふ診斷を下したことを、彼に示すことが出來た。その時彼は、このやうに心理的原因での病氣の場合には「不安ヒステリー」と呼ばるべきで、心理的原因の無い場合は「不安神經症」と云ふ名稱が適當して居ると主張した。私は自分の判斷の方がいゝと思つたのだが、信念の前に理性を犧牲にして彼の意見に從つておいた。併しヒッチマン（Hitschmann）の頗る有益なフロイド說研究を讀んで見ると、今ではフロイドも實際神經症（肉體的起源の神經症）の心理的起原說を認める意志があるやうに思へる。

分析は出來る丈け短時間にその目的を達するやうに心懸けなければならない。實際神經症の場合には、最も早くその目的が達せられる。此場合には、心理葛藤は比較的

近い時期に發して居る。或る少女が三年間の婚約の後に、その婚約者から見捨てられ愛人なく、孤獨で、失望して、その結果、憂鬱に陷つて居るとすれば、此少女には、適當なる慰めの言葉を含んだ精神療法で充分である。こんな時には、條件が非常に惡いやうに見えても、深刻な精神分析はあらずもがなであり、ある場合には有害になることさへもある。そうしてこれは、葛藤が近い原因で起きてゐる神經症には、總べて通ずる言葉である。勿論、それぞれの場合に多少の手加減は必要だが……。野心と能力とが不均等な爲に起る精神葛藤に原因する神經症を扱ふ場合には、扱ひ方が違つて來る。此の場合の精神分析には、精神再教育を含めなければならない。卽ち、精神的手段に依る再教育の方法であり、兩者は並行しなければならない。此場合は、病人に病的感情を征服させ、人生に對する誤つた態度を正すやう助けてやるのが醫者の仕事である。

　不安神經症の治療經過は、一般に良好である。病氣は四週間から六週間で治癒出來る。强迫神經症はその三分の一は難症であり、もつと長い期間を要する。此等の病的狀態には精神分析がその病氣の心理的起源を認定する唯一の方法である故に、最も治療に適した方法である。

精神的イムポテンツの症狀には非常に好成績が擧がる。その場合、口頭の暗示が必要なる一切であることが屢々である。又、或る程度の精神分析を要することも屢々であるが、催眠術の助けを借りる必要は少しもない。他方、婦人の冷感症は一層難物であるが、精神分析で骨を折つて見甲斐のある分野ではある。

　種々の型のヒステリー症狀は一層長期の治療を要し、時には半年位かゝることがある。吃音は短時間に矯正することが出來、結果は良好である。癲癇の治療にも亦驚く可き好結果が擧がる。（次章參照。）此病氣を精神療法で取扱ひ、この方法が好いことを證したのは私が最初である。しかしこれは非常に難しいから、熟練した、經驗に富んだ分析者でなければ托されない仕事である。

　以上、私は精神分析と精神療法とを適用して一般に成功すると考へられて居る各部門の內、ほんの一部分だけを指示した。此等の方法で治療し得る病氣は、頭痛（所謂神經衰弱性及びヒステリー性頭痛）、頭が重い事、作業不能、注意集中不能、神經痛、厄介なリウマチ痛、神經性喘息、便秘、顏面痙攣、書痙、膣痙攣、神經性胃病、心臟神經症などゝ、總べて心理的に原因を有する病氣である。

　性的生活に起因する種々の神經症、性的倒錯症（變態）は分析學にとつては好個の

領域である。フロイドは倒錯症を幼兒性を保有して居るものとして記述して居るが、不幸にも分析學的にその心理起源をより以上に研究して居ない。フロイドには「神經症は倒錯症の陰性面である」と云つて居る。私は、職業的經驗に依つて、倒錯症は神經症として研究すべきものであることを知つた。此のことを私は同性愛症に關して多方面に立證した。同性愛症は精神分析に依つて治療し得るが、これは患者が熱心に治癒を希望して居り、自分の性的感情態度を放棄したがつて居る場合に限られて居るのだが、此の樣な場合は不幸にも非常に稀である。しかし成功した多數の實例によつて見ると、條件さへよければ、分析的治療がこれに適當であることが分るのである。

フェチシスムス（祟物症）として知られて居る錯雜した狀態の心理的起源を明らかにし記述したのは、私が最初である。これは癒る見込みがある。治療の期間は、複雜して居る症狀に於ては少くとも四ヶ月を要し、其間、婦人に對する忌避症狀は極端であり、性的滿足は祟物の代償物に依つてのみ達せられる。

モルヒネ中毒、コカイン中毒、及び類似の病氣も、その原因は心理的である故、分析療法の範圍に入る。つはり（姙娠中の過度の嘔吐）、失神症、眩暉、身震への發作、變態感覺、筋肉痙攣及び兒童の不安神經症は精神療法に適して居る部門である。

强情な、始末に困る兒童について、その性癖が精神病理的劣等點に起因せず、神經症の結果である時には、分析が滿足な結果を齎らすと云ふことを、特に注意しておきたい。此樣な場合には、殊に兒童がその神經症に依つて反抗して居る平素の環境から引離すならば、奇蹟的に癒るものである。兩親自身が神經病的の人達であり、或意味に於ては兒童の神經症に對して大いに責任があるのである。

精神病の處置には、ずつと强い疑惑がかけられて居る。憂鬱病には可成良い結果が得られたことを私は認めて居る。初期の狀態の間には、屢々良結果が擧げられて居るが週期的精神病は輕症でも手に負へぬことが多い。躁鬱病の分析中、不快なコムプレクスを取り去ると、その爲に憂鬱面の現れて來るのが見られるやうである。

偏執病（パラノイア）は初期のうちは、いつでもとは云はれないが、屢々治癒し得る。ビエール（Bjerre）はこの樣な一病例を報告して居る。私自身も二回好結果を得た場合があるが、その內一回では治療は完全でなかつた。しかし大體から云つて、精神療法は精神病の治療に好結果を期待出來ないと云つてよい。屢々、吾々は、情緒性精神病が早發性痴呆症と間違つて取扱はれてゐるのを發見する。情緒性精神病の場合には癒る見込みがある。これは終りには患者が仕事に復歸出來る位、治療効果が擧が

るが、眞性の早發性痴呆症――ブロイヤーはこれを精神分裂症と呼んでゐる――は、その精神的構造は容易に判別出來るが、殆んど回復不可能である。治療の試みはやつて見るもよいが、家族には、回復の望みがないこと、治療は單に試みに過ぎないことを警告して置かなくてはならない。

以上は、治療法としての分析療法の限界を大體に於て示したものである。しかし、總べての精神治療家は最初一週間は病狀の觀察に費やし、それ迄は病氣が分析治療に適するかどうかを決定しない方がよいと言ふことを忠告して置きたい。病氣の原因が明らかに心理的であつても、どんな療法でも拒む患者がある。彼等は「二重生活」の方針をかたく執つて居るのである。彼等は無意識或ひは前意識の傾向を全然知らうとは欲しないのである。彼等とても他人に此等の過程のあることに就いてはいくらかは感じて居るかも知れないが、自分達のことに關しては全然盲目であり、他人が彼等自身の内的精神生活に少しでも近寄らうとすると、それを拒むのである。このやうな病人は、その運命の儘に委せるより外仕方がない。

神經症であると思はれても、十日から二週間の觀察を經た後、それが精神症であることが分る場合がある。此のやうな時には、私は家族の者に、本人の病氣は精神症で

あり、治療が旨く行かないと事實を打開けて、再び連れて來ることを斷はることにして居る。但し、家族が治療を特に希望して居り、癒るか癒らないか、しつかりとは期待出來ないことを承知してゐる場合には別である。此のやうな用意を拂つておかないと、後になつて精神病の發病に對して精神分析は非難され、結局に於て職業的精神病醫の少なからぬ反感を招くことになる。

醫師達が精神療法について必要な知識を獲得すること、殊に精神分析學に理解を持つやうになるのは非常に望ましいことである。精神療法及び性科學を教授する部門が必要であり、兩科は同じ一人の專門家に依つて統制されることが望ましい。

此點に關しては、現今の教育施設は不完全である。醫師達が自分達の職業に最も必要な部門について教育を受けないで、專門の學校を通過して了ふのは、不幸なことである。性科學と精神療法が醫學校の正課に編入され、學生は此等の重要な學科について訓練され、考試される時期が今に到來するであらう。多數に存在する此種の患者の運命と幸福とは此施設の實施如何に懸つて居る。精神療法は藥物療法と同樣の正當の分野を有して居る。寧ろもつと大きな將來を有してゐるかも知れない。私は此の小論文が、此等の焦眉の急に對して識者の注意を喚起する一助となることを信ずる。

第二部　分析處置の窮極結果

一

隱されて居る本能的慾求の圖星をさしてそれを成程さうだと患者に觀念させることの如何に難事であるかは、總べての分析者の認むる所である。分析者が不注意で最初の診察の時に、心の中のさまざまの力の隱れたる相互作用を餘り暴き過ぎると、治療に對する患者の抵抗を呼び起し、後に色々な口實を設けて來ないやうになる。時には非常に注意してみても、此點に於て無効である場合がある。それはつまり患者が、初めて醫者の診察室に入る時に「負けるものか」と云ふ決心で來るからである。總べての神經症患者は自分の神經症の根源を貴重な所有物として、特別な寶として、後生大事に守り立てゝ居り、何としてもそれを奪はれてはならないと考へて居る。若し彼が自分の大事の夢想のお倉に火がつきさうな危險を感ずると、三十六計をきめ込むやうになるのである。非常に用心しても屢々死の中への逃避を防ぐことの出來ない場合がある。二三日して患者は最早よくなつたから歸ると云ひ出し、醫者に非常に感謝の意を

表明し、自分の親戚や友人にこの療法を紹介しようと云ひ足すのを忘れない。事實は最初と同じで、ちつとも快くなつて居ないのである。或患者は急に豫期しない旅行に出なければならなくなつたからと云つて治療を斷はり、或者は治療があまり「刺戟が强すぎる」から續行する前にしばらく休まなくてはならないと云ひ出す。さう云ふ風に、患者の言ひ譯は實に多種多樣である。だから分析者は病症に對しては相當の疑惑と愼重な注意を以て臨むのがよいのである。

醫者が自分の切札を手に持つて居り、手の內を相手に見せないやうにして置けば置く程、續いて起る結果は良好であると云へる。治療の始めの頃に患者に對し說明を試みるのは愚かなことであり、患者が精神分析の何たるかに就いて、及び醫者自分について、熟知して居る樣に見える場合でも、同樣である。却つてその反對が好いのである。よく知つて居る者が最も取扱ひ難い患者である。彼等は豫め警告されて居り、自分の精神分析の智識を、却つて分析の抵抗手段として逆用するのである。此點に關してフロイドは、精神分析を說明する目的で或ひは治療の迅速を助ける豫期のために、患者に說明する計畫を止めるやうに忠告して居るが、私も絕對的に同意見である。最初は此の方法は、治癒を早めるやうに見える。患者は分析學の書物を、一生懸命に讀

編輯後記

謹賀新年（編輯委員一同）

多難な紀元二千六百年は暮れて、愈々多難な二千六百一年が明けました。併し我々は毎日朝起きて「お早う」と云ふ言葉で互にその一日の幸福を祈願し合ふやうに、この年頭に際して謹賀新年のきまり文句で、またこの一年を戰ひぬく勇氣を勵まし合はねばなりません。

×

この時に當り、「不眠と快眠」の特輯題下にこの問題の研究を試みたことの意義は、今こゝで我等が喋々するまでもないでせう。不眠症は神經症の內ではその數に於いて最も多いと云ふのに、從來の醫學では殆ど何らの理論も方法も確立してゐないことを慨し、我々は僭越ながら新しい理論と方法とを提示して見ました。本號がわが國醫學史上に劃期的な意義を帶びることを信じ、且つ希望します。大槻、土屋、高水三氏の論は期せずして同じ論旨を別の言葉と別の方法とで展示してゐます。

平野氏の譯せられたブリルの論は分りよくて面白い論文であります。馬場さんの譯は愈々手に入つて來ました。黒子氏のライクは今度の部分で非常に重要な問題（强迫神經症の問題と別自我の問題との交錯點）に觸れて來ました。岩倉氏モーロアは、それとなくマンスフイールドの弟コムプレクスを突き、彼女の死の衝動の近親愛的背景を暗示するかのやうであります。

飯田氏のステーケル譯も益々面白くなります。その單行本化の早からむことを讀者から督促せられて困つてゐます。

×

大槻氏著書の內、「社會生活法」は第五版「精神分析概論」は第六版、「戀愛性慾の心理」は第四版を、譯書「日常生活」は第三版を、各々最近に新刷いたしました。「概論」は稿を新にすると云ふ著者の覺悟で、久しく品切れのまゝになつてゐましたが、著者多忙のためにいつの事か分らず、それに反し、讀者からの要求は熾烈を極めて來ますので、已むなく、殆ど第五版のまゝ、但し卷末に「フロイドの人物と思想」と題する附錄を添へて、第六版として刊行いたしました。增頁のために定價は一圓二十錢となりました。御諒承下さい。

大槻氏著「精神分析讀本」は目下第四版重版中ですが、初版のキレイのが數冊手に入りました。御希望の方々には至急御申出で下さい。初版は今は昔の美本です。（二圓、送料十錢）第四版も定價二圓であります。初版の希望の方はその旨、明記して下さい。

×

長谷川誠也氏著『國語國字及び文學の心理研究』が愈々近く三學書房から新刊せられます。別頁廣告御參照の上、なるべく多數讀者の御高覽を希望いたします。なかなか有益な内容です。

×

例により、新特別誌友の方々の御芳名を左記に御紹介申上げます。

▲名古屋市……中村廣次氏
▲山口縣……大村章夫氏
▲小石川區……木下正夫氏
▲瀧野川區……松澤富五郎氏
▲臺灣……三橋修六氏
▲牛込區……平館智司明氏
▲世田ヶ谷區……中村透氏
▲北支……高瀨秀康氏（北支小埜正夫氏紹介）
▲本郷區……伊東祐甚氏
▲横濱市……鶴園龜助氏（藤木義輔氏紹介）
▲カナダ……本多松平氏
▲福島縣……齋藤常藏氏
△朝鮮……牧徹氏
▲新京……天野博之氏
▲靜岡縣……氏原重信氏

新誌友を御紹介下さいました方々に御禮申述べます。このうち牧徹氏は嘗ての誌友でしたが又新しく加入されたのであります。繼續誌代を御送附下さいました方々にも厚く御禮申上げます。

×

次號は「教育の日本」と題して、廣く一般教育上の諸問題、殊にこの新體制に際しての教育の新方法と新精神とを考究するのみならず、舊來の日本の教育的傳統を分析的に再考すると共に、また現在の所謂教育家たちの意見にも嚴正な批判を加へて見たいと思つてゐます。

例により卷頭で數氏は堂々論陣を張られることゝ思ひますが、馬場孃譯のアンナ・フロイドも恰もよし「兒童分析と教育」と云ふ題であります。

先號に約束しました大槻、長崎兩氏共同執筆の「夜尿症の分析療法」は本號には間に合ひませんでしたが、次號にはなるべく掲げたいと思つてゐます。

平野氏は續いてブリルの夢の説を譯述せられますし、岩倉氏のマンスフイールド論、黑子氏のシュニッツレルなど、みな續行せられます。倍舊御愛讀下さい。

昭和十五年十二月二十五日印刷
昭和十六年一月一日發行
（月刊）定價 六十錢
（外地定價）六十五錢

東京市本郷區駒込動坂町三二七
編輯兼發行人 大槻憲二
東京市板橋區板橋町三ノ六四
印刷所 帝都印刷株式會社

定價一部 六十錢（送料共）
半年分 一圓八十錢（送料共）
一年分 三圓六十錢（送料共）

御註文規定

・本誌の御註文は一切前金に御願ひ致します。
・御送金はなるべく安全至便なる振替を御利用下され度く、振替口座東京七八八一七番へ御拂込み下さい。
・切手代用の場合は一割増に願ひます。
・本誌廣告に關しては、御照會次第部員を伺はせます。

東京市本郷區駒込動坂町三二七
發行所 東京精神分析學研究所
振替口座東京七八八一七番

大賣捌所 東京堂・東海堂・大東館 北陸館・（大阪）福音社

國語國字及び文學の心理研究

定價二圓・送料十錢
四六版三百餘頁
本研究所取次

長谷川誠也著

第一篇　心理研究ノート

（一）心身の問題
（二）もてなしをする作家
（三）變則的緊張生活の追求
（四）精神分析的文學論の一先驅
（五）スウィフトの描いた女神批評
（六）心理研究の不振
（七）運命と科學法則と餘暇
（八）バークの父母觀
（九）バークの迷信論
（十）二種の結論
（十一）カーライルの無意識說
（十二）私の妙な夢
（十三）少女の優越感
（十四）「慊」と云ふ字
（十五）思考といふ語の意味
（十六）母の十德
（十七）「時」と年配
（十八）大論の「笑ひ」の說明
（十九）大日經の心相
（二十）老子の母コムプレクス
（二十一）「人は盡く夭なり」
（二十二）笠女郎の歌
（二十三）エマスンの夢の說
（二十四）カーライルの夢
（二十五）カーライル夫人の夢業
（二十六）ソロモンの夢
（二十七）結草の故事
（二十八）夢の產婆マブ媛
（二十九）ヂュリエットの最後の語
（三十）戀愛問題と河流の夢
（三十一）象牙の塔
（三十二）男女兩性具有者
（三十三）漢字と支那人心理
（三十四）謠曲の山姥
（三十五）乳房の威力
（三十六）今日イエスがゐるならば
（三十七）言ひ損ひの古い例
（三十八）夜中の破戒
（三十九）オランダ人の催眠術
（四十）子を生むまじなひ
（四十一）フロイド說と新宗敎
（四十二）大論の對親違背觀
（四十三）お父さんとチャン
（四十四）最强・最賢・最大なもの
（四十五）英獨佛國民性の批評
（四十六）日本人の心理タイプ
（四十七）文豪スコットの大努力
（四十八）文明論ノート

第二篇　國語國字の諸問題

（一）言語の用法に關する感想
（二）國語問題について
（三）放送用語と漢字の發音
（四）漢字の慣用音について
（五）マイクの外に在りて
（六）漢字の略語使用について
（七）跛行の心理

第三篇　學藝雜記

（一）精神分析の新研究と文藝の進展
（二）ゴルズワージー作『白鳥の歌』
（三）漫談的文藝
（四）抑壓解除と世相
（五）フランケンスタインの怪物
（六）文學の非常時
（七）ショオ翁の橫顏
（八）文科大學無用
（九）故坪內先生の觀點
（十）良い頭と惡い頭
（十一）現代青年の讀書法について

長谷川誠也年譜（附、著作目錄）

あとがき…………本書編纂委員

圖　版

書齋に於ける著者（昭和十五年）（口繪）

神田區神保町三ノ三
振替東京167967番
三學書房

「精神分析」合本第六卷一部三圓五十錢・第七卷三圓七十錢・第八卷四圓・各送料共

第六卷（昭和十三年度）

第一號（一、二月號、正誌）夢と象徴
第二號（三月號、正誌）文藝と繪畫
第三號（四月號、册子）東洋醫學と分析
第四號（五月號、正誌）處女性の問題
第五號（六月號、册子）斷種法と優生學
第六號（七月號、正誌）貞操の心理
第七號（八月號、册子）受分析者の心得
第八號（九月號、正誌）自己愛の研究
第九號（十月號、册子）分析學邦文獻
第十號（十一月號、正誌）神經症研究
第十一號（十二月號、册子）分析學の勸め

第七卷（昭和十四年度）

第一號（一月號、正誌）金錢心理
第二號（二月號、册子）自尊心の再建
第三號（三月號、正誌）心理經濟
第四號（四月號、册子）精神衞生
第五號（五月號、正誌）自慰の處置
第六號（六月號、册子）全體主義
第七號（七月號、正誌）愛情と憎惡
第八號（八月號、册子）國民精神保健運動
第九號（九月號、正誌）精神病への理解
第十號（十月號、册子）ユダヤ問題觀
第十一號（十一月號、正誌）結婚の諸問題
第十二號（十二月號、册子）知識階級の覺悟

第八卷（昭和十五年度）

第一號（一月號、正誌）東洋文化心理
第二號（二月號、册子）性格强化法
第三號（三月號、正誌）日本女性心理
第四號（四月號、册子）神經病の城廓
第五號（五月號、正誌）病氣と健康
第六號（六月號、册子）分析治療と自力本願
第七號（七月號、正誌）日本人の性格
第八號（八月號、册子）現代日本とヒトラー
第九號（九月號、正誌）育兒の心得
第十號（十月號、册子）自信を養ふ法
第十一號（十一月號、正誌）統制と個人
第十二號（十二月號、册子）分析を受ける覺悟

特別誌友規約

一、本研究所在外研究會員を特別誌友と稱す。
一、特別誌友は本誌の豫約購讀者として半年分（一圓八十錢）又は一年分（三圓六十錢）前納の義務を有す。
一、特別誌友は偶數月發行「册子精神分析」の無代配布を受く。
一、特別誌友はその研究、感想、報告を、編輯部の了解を得て本誌上に發表することを得るのみならず、司會者の承諾を得て、研究會、講習會に出席することを得。
一、希望者は購讀料金と共に、住所、姓名は勿論、年齡、職業その他を報告ありたし。（且つ何月號より送本すべきかを明記せらるべきこと。）

單册正誌十四年度まで五十錢・十五年より六十錢・册子十錢・各送料共

神詣

伊勢大神宮

熱田神宮

橿原神宮

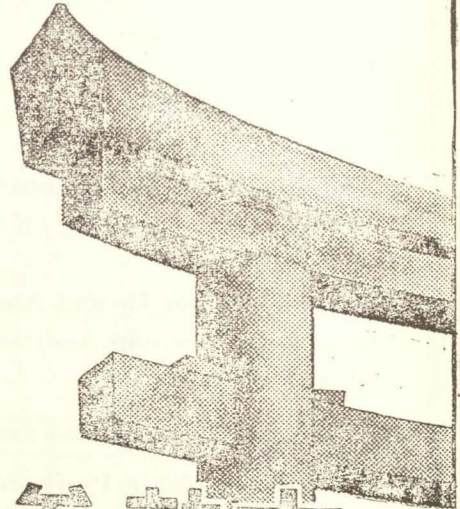
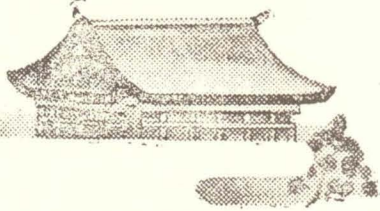
石上神宮
天理驛下車

大神神社
櫻井驛下車

奈良
春日神社
大軌奈良驛下車

枚岡神社
枚岡驛下車

大軌・参急電鐵

昭和十三年六月十日第三種郵便物認可
昭和十五年十二月二十五日印刷納本
昭和十六年一月一日發行
毎月一回一日發行
精神分析 一月號
定價六十錢・外地定價六十五錢

IX. Jahrgang, Heft 1-2—Jan.-Feb., 1941. Erscheint zweimonatlich.

Tokio Zeitschrift für Psychoanalyse

Herausgegeben vom „Tokio Institut für Psychoanalyse"

(Hefttitel: Die Insomnie)

INHALT

Preis des Einzelheftes, 60 sen

Tokio Psychoanalytischer Verlag

327 Dozakacho Hongoku Tokio Nippon

昭和十三年六月十日第三種郵便物認可・昭和十六年一月廿五日印刷納本・昭和十六年二月一日發行・毎月一回一日發行

第9巻
第2號
昭和16年2月

目次

幻影の醫學

大槻憲二

「われ〳〵の立つ今日の醫學の主要な思潮は十九世紀のそれに比較すると、最早完全にその方向を變へつゝある。前世紀では醫學の最も主要な業績といへば病原體微生物の攻防であつて、何れもわれわれの外に向つてゐた。この思潮の方法論建設者はコッホであり、パスチュールであつた。前者は病原體發見の法則において、後者は免疫學原理の系統附けにおいて、十九世紀醫學の骨格を構成した。華々しき病原體追擊の一世紀は、われわれの内部のものをすつかり忘れさせてしまつた。「疾病とは人間と微生物の死鬪ドラマである」觀念はいつしか一方的になり「病原體なければ疾患あらず」まですすんだ。二十世紀醫學はふとわれに返つてわれ〳〵はこの疾患の成立する條件ばかりに急であつたことに氣附き、疾患の成立の主要な母體はこのわれ〳〵の體質であることがわかりかけてきた。外より内的なものへ、動的なものから靜的なものへ、醫學はひらりと身をかはしつゝある。それがけふの醫學である。」

と傳染病研究所員日戸修一氏は昨年十二月八日の東京日日紙上「微粒言」欄に述べてゐたが、醫學の主要興味は今や新たに體質の研究に向ひつゝあると云ふのである。こゝに云ふ體質とはどう云ふ概念内容を有するのであらうか。それは生理現象とは違つたものであるらしいことが想像せられる。生理は一般的なものであるが、體質は個人的なものであると云ふのが、その區別の主要點であるらしく思はれる。無論、人間の肉體の性質は一般的な生理法則を以て説明し盡し得べきものではなく、個々の特殊性を有してゐるべきことは、人間の精神が一般的な心理法則を以て説明し盡し得べきものではなく、個々特殊の個性として理解しなければならない面を有するのと同じであらう。併し肉體と精神とは密接不分の關係あるものであることは人々の既に常識となつ

てゐることである以上、日戸氏がもし「體質」と云ふ概念に依つて一切の精神的要素を拒否しようとするのであつたならば、我等は寧ろその迂愚を笑はなければならないであらう。生理と心理とは密接不可分の關係があるからとて、我等はこれを心理方面からのみ專ら研究すべきものであつて、これを生理學的に研究することの不必要、不可能、無意味を主張したことは一度もない。それ故に今日の醫學が、もし日戸氏の主張する如く、「體質」の研究に主要興味を置くに至つたとすれば、我等分析學徒として、それは卽ち病理に於ける心理現象を重要視するに至つたことだと解釋しても、少しも無理でないと信ずるのである。もし氏が、私の言に反し、たゞ「體質」のみを重要視し、心理の參與を拒否しようとするならば、我々は氏の偏見を蔑まないわけに行かないであらう。

氏はなほ續けて、かう論じてゐる。

「體質の神秘を示すもう一群の疾患が殊にこの十年間、實に尨大な發達をしてゐる。特異體質性疾患で體質の異常な反應を總括してかうよぶ。感染して發病するのは傳染病だけではない。トマト、バナナを食べ、牛乳によつても異常な反應がくる。蕁麻疹、喘息、頭痛神經痛等あらゆる症狀がおこる。くすりは誰にでもくすりだと思ふと間違ひで、解熱劑をのんで死んでしまふ體質の人もある。異常體質學の進歩が今やわれ〳〵にこのカラクリを明らかにしつゝある。十七世紀のカルヂナル王は、バラをもちこむものを拒絶するため守備を增したのだが、これはバラの花粉に彼が異常體質だつたためで枯草熱なる貴族病であつた。花粉が部屋に充ちるとこの花粉は王の粘膜をつき喘息をおこす。不思議な傳説は、特異體質學の枯草熱が今日簡單に平凡にしてくれる。われ〳〵の皮膚は刺戟に應じ反應し內部の事情を發疹で傳へる。濕疹の謎を動物實驗で解決したブロッホは、遺傳學へ一つの新らしい示唆を投げかけた。」

併し「解熱劑をのんで死んでしまふ」たり、重曹をのんで頭痛が直つたりする實例は、心理學者が暗示の効果として屢々旣に實驗濟みの事であるから、かう云ふ現象の一切を以て悉く「體質」の故にして了ふならば、それは失禮ながら所謂「馬鹿の一つ覺え」の類であつて、このやうな單純な一本調子の物の考へ方をしてゐたならば、また〳〵醫學は行きづまつて更めて方向轉換をしなくてはならない日が遠からず來るであらうことを豫言しなければならない。我々は喘息の如きも體質を以て說明しきれない實例の二三を知つてゐる。或はまた死後解剖に附して見ても、何ら肉體的異常を發見し得ない病人(?)のあつたことを聞き及んでゐる。我等は病理現象を肉體面から研究することの必要を認めるに吝ではないが、それに固執して他の方法を拒否する偏見に墮することを、氏等に警めておきたいと思ふ。

所謂醫學又は醫學者が屢々このやうに偏見と固陋とに陷り易いのは、その當事者が醫學と云ふものに就いて未だ正しい概念を持つてゐないためであらうと思ひ、私はこゝに僭越ながら、醫學なるものゝ眞の意味を說いておきたいと思ふ。

醫學と云ふ言葉はあるが、本來、純粹科學としての醫學なるものは存在してはゐないのである。醫學と云ふ科學が存在すると思つてゐるのは、醫師たちの幻覺である。試みに醫學（メディチン）と云ふ語を辭書に就いて調べて御覽なさい。これは語源的には「まぢな

ひ」と云ふやうな意味の語で、今日でもなほ藥と云ふ意味にも用ゐられ、醫術、醫師と云ふ意味をも含んでゐる。勿論、醫療的學問と云ふ意味も有してはゐるが、このやうにこの語の概念內容が廣汎であると云ふことは、この學問の起源が神祕的に古く、從つてこの語のみならずその方法の中に、如何に非科學的傳統の多くを包含してゐるかと云ふことを暗示してゐるのである。

一つの學問が、近代的意味に於いての科學であり得るためには、その研究の一定の對象と一定の方法とが確立せられてなければならないのであるが、一體、所謂醫學の對象と方法とは何であらうか。その對象は生理現象か、それならば生理學と云ふれつきとした正統の科學が嚴存するではないか。生物現象か、それならば生物學がある。藥物の作用か、それならば化學又は藥學が存する。黴菌の作用か、それならば細菌學がある。病理研究か、それならば病理學が存する。健康現象か、それならば衛生學が存する。日戸氏は體質の研究が醫學の目的であるやうに云ふが、それはやはり生理學の範圍內に屬するのではないであらうか。

このやうにして考へて見ると、醫學と云ふものは如何なる方法で何を研究するのか、極めて不明瞭なものとなつて來る。醫學と云ふ特別の科學が存在するやうに思つてゐるのは所謂醫學者又は一般人の錯覺ではないであらうか。醫學とは幽靈科學、幻影的存在ではないであらうか。さうすると、人或は云ふであらう。醫學は生理學、生物學、藥學、細菌學、病理學、衛生學、その他の全般を綜合するところに存在するのであると。併しそれならば、醫學は既に純粹の科學ではなく、半ば哲學の如きものでなければならない。

醫學が科學ではなく、一種の哲學だと云ふことになるならば、我等は別に何も云ふことはないのである。その代りにそこには肉體や藥物のやうな有形的なもの丶みを對象として研究して、有形ならざるもの例へば、心理現象、社會現象、政治現象などの研究を度外視したりする權利はなくなるわけである。醫學が久しく精神分析學に依る心理方面からの病理及び健康の研究に對して敵對的態度をとつて來たのは、醫學が何か有形的なもの唯物的なもの丶みを對象としなければならないやうに迷信して來たところに基くのであらう。ましてや精神分析學は心理現象の中でも、その一般的なものの研究よりは個性的なものを一層得意として專門的に研究し、云はゞ一種の個性心理學（分析學の別派たるアードラー派は現にその學問を個人心理學とさへ呼んでゐる）であるから、肉體的個性卽ち體質の研究の必要を高唱する日戸氏の如きは、精神分析學に對して特別の關心と感謝とを表明しなければならない筈である。

從來の所謂醫學者はも少しその態度を謙虛にしたらどうであらうか。醫學は幻影的存在であると云ふことが明かになつた以上、凡そ人間の病理の研究及び健康の改變に何らかの參考になるものは、これみな醫學の範圍內に屬するものであると云ふことを悟らなければならない筈であると共に、自分等の偏見に依り折角の意義ある學問を排斥してゐたことの不明を恥ぢ、醫師なるものが如何に多方面の學問と教養とを身に具へなければならないものであるかと云ふことに就いて責任の重大さを悟らなければならない筈である。再び云はう、醫學と云ふ科學は存在せぬ。存在するものはたゞ醫術又は療道のみである。醫術は諸般の科學の研究結果を參考し採用すると共に

それを應用しこれを驅使する技術の習得が大切である。さうしてその習得は單なる機械的な經驗ではなく、人格と云ふものを具へた生きた人間を扱ふためのものである以上、それは必然的に人格の修養と云ふことが非常に必要になつて來る。醫師は患者からは必然的に超自我象徵とせられるものである。また確に患者の超自我たり得る高き人格を具へた醫師は、その治療効果がよく擧がるのである。その意味に於いて醫術は寧ろ療道である。世にはあまりに唯物的なもののみに拘泥して患者の超自我たらんとするの努力を怠つてゐる醫家のあまりに多いことを我等は慨かないわけに行かないのである。精神分析學は人間の無意識心理を對象としてこれに分析的研究法を以て臨む限りは純粹の科學であるが、この方法を應用して患者の治療に臨む限りは一つの療道であることを我等はよく自覺してゐる。それ故に、分析療法がその効果に於いて宗教的であると云つて批難がましく云ふ人々の無理解に對しては、たゞ嘲笑を以て應へるのみである。（完）

假名國字改稱問題

大槻憲二

大政翼賛會の臨時中央協力會議文化部會で、山本有三氏の提案に基き、從來久しく用ゐ習はして來た「假名」の名稱を廢して「國字」と改めることに滿場一致可決したと云ふ報道ほど近頃、私を痛嘆せしめたものはなかつた。改稱案の理由とするところはどうやら、日本で作つた文字を「假名」（假りの文字）と呼び、支那から來た文字を「本字」と呼ぶのはあまりに不見識であり、東亞盟主として支那に臨むにも具合が惡いと云ふにあるらしい。併しこれほど日本知識階級の考への淺墓さを暴露したものはないと私は考へるのである。その理由を箇條書きにして次に述べて見る。

一、假名は日本で作つた文字には違ひはない。併しこれが漢字を簡易化してそこから派生したものであると云ふ歴史的事實は、名稱の改變に依つて決して拭ひ去ることは出來ないし、支那人とてもこれを十分によく知悉してゐるであらう。漢字から脫胎したものは脫胎したものとして潔くその由來を承認しておく方が、却つてみつともよいのではないか。漢字から脫胎したと云ふ歴史的事實を何とか自他に胡麻化さうとするやうなケチな根性を露出させてその原字の生産國に臨むことは却つて相手の反感と輕侮を招く所以となるのではないであらうか。

一體、何故に我等は我等の國字が、外國の文字から脫胎し變化し發展したものであると云ふ事實をそのやうに恥ぢたり不見識がつたりしなくてはならないのであらうか。西洋諸國のアルフアベツトでも、元々フエニキア文字でありそれがエヂプト、ギリシア、ラテンの諸文化を經て今日の英獨佛露の諸國の文字にまで脫胎し變化し發展したものであるが、彼等諸國民はその文字が異國文字の變化であることを恥ぢてゐるやうな樣子は少しもない。何故に、わが國民のみがそれをそのやうに屈辱的に考へるのであらうかと云ふことは、

我々の大いに自省しなければならない大問題であらうと思ふ。

二、支那から輸入した文字を「本字」と稱し、わが國で作つた文字を「假名」と稱することは、一應如何にも癪な話ではあるけれども、元來、わが民族は古往に支那から文字を輸入した當初に於いてさへ、支那の文字を支那の文字として屈從的に使用してゐたのではなく、これを直ちに日本文字として極めて自由に驅使してゐたのであつて、その證據は所謂萬葉假名に於いて、極めて顯著に現れてゐるのである。今日の所謂假名は既に萬葉假名に於いてその原形を示してゐるのであつて、從つて假名は必ずしも弘法大師の發明ではなく、萬葉時代の文化人の發明したものを、弘法大師がたゞ修正し完成したに過ぎないのである。

そのやうに、今日の我々の使用してゐる「本字」又は「漢字」は事實上決して「漢字」ではなく、始めてから日本字として使用せられたものであつて、これを「漢字」又は「本字」と呼んでゐたのはその歴史的起源を明かにするだけの意味に過ぎなかつたと云つて必ずしも曲論ではないであらう。現に、我等の「本字」は決して支那に於けると全く同じ意味に用ゐられてゐるものは寧ろ少いのであつて、勿論多くの共通點はあるとは云へ、その語感又は語のニュアンスに於いては非常に違つたものがあるのである。それ故に、所謂「漢字」を本字と呼び、所謂「假名」を假文字として甘んじて承認しておくことは、寧ろ我等の度量の大を示す所以にさへなると思ふのである。ましてや今後、支那との間に幾多の文化交渉を爲さねばならない今後の日本人として、同文同種の親しみを强調する必要からもその本字に於いて共通性ある點を我等が喜び誇りとしてゐること知らしめるのは寧ろ百益あつて一害さへないと云はなければならないと信ずるものである。

三、「本字」と「假名」の稱呼はわれ等の祖先が長い間、用ゐ習はして來たものであつて、これを今日に至つて急に改めると云ふことは、舊來の文献中に無數に發見するそれ等の語に對する將來の國民の感覺を混亂に陥れ、且つそれ等の文献の執筆者又はそれ等の文献製作の時代への敬意と親しみとを失はしめ、國民教育上、百害あつて一利なきものであることを悟らなければならないのである。

一體に、日本人はやたらに事物の名稱を改變して喜ぶ奇癖のある國民であつて、監獄を刑務所と改め、小僧さんを小店員と改める如きはまだしも恕すべき方であるが、中にはあまりに神經質に過ぎて滑稽な改名例も少くはない。「バット」を「金鵄」に、「チェリー」を「さくら」に改める如きもその一例と見ることが出來る。「金鵄」や「さくら」の名稱がそれ自身別に悪いと云ふわけではないが、現在流布してゐるものをわざ〳〵改めるのはあまりに末節拘泥的すぎると云ふのである。日本には性名學とか云ふ馬鹿げた學問(?)があつて、名稱に依つてその人の運不運が決定せられるかの如くに迷信し妄信してゐる被害妄想症患者が多い。諸外國にはかう云ふ風に、折角親につけて貰つた名前をやたらに改變して得意になつてゐる神經症患者はあまり多くないやうに見受けられるのは、私の寡聞の故であらうか。

四、大政翼賛會臨時中央協力會議に出席して假名改稱に賛成した或る人は、假名は標音文字であるのに本字は表意文字であるから、假名の方が優秀高等な文字であると云ふやうなことを云つてゐたが

どうして標音文字の方が表意文字よりも優秀なのであるか。私にはまだよく理解が行かない。その人も別に理由を擧げてはゐなかつた。表意文字は象形文字から發達離脱した過程が短く、その點に於いて原始性をより多く存すると云ふことは事實であらう。併しそれ故に直ちに標音文字の方が文字として優秀であり高級であると云ふ理由は私にはまだ一向に分らない。さう云ふ説をなす人の論據は恐らく西洋諸國の文字が悉く標音文字であるからと云ふにあるに過ぎぬのであらうと思ふ。

併し、標音文字として見るとき、われ等の假名は決してさう自慢になるほどのものではないと云ふことを忘れないでゐる方がよいと私は思ふのである。何となれば、假名は標音文字ではあるが、それは母音と子音とだけであつて、全然父音がないのである。たゞ「ン」だけは獨立した父音であるが、この父音は永遠の獨身者であつて、何れの母音とも結婚することが出來ないやうになつてゐる。これに對し、西洋の標音文字アルファベットは全部が殆ど父音と母音とのみであつて、子音文字と云ふものは殆ど存在してゐない。且つ父音は母音と結婚することも出來るが、獨身で活動することも出來るのでそのために西洋語は殊にチウトン系の言語は、非常に調子が力强いのである。日本語では何れの音にも母音がつきまとつてゐるので音が非常に柔い代りに力强さに乏しく、如何にも女性的な言語であると云ふ感じを與へる。日本語に比較的男性的な調子を帶びしめるやうになつたのは、偏に漢字の力であると云ふことを我等は率直に認めないわけに行かない。その最も明白な實例は和歌俳句である。和歌俳句は多くは純粹の日本語を以て形成せられる場合が多いのでその語感は大體に於いて女性的である。俳句は短いからさうでもないが、和歌は何と云つても女性的であり、中には隨分大らかな、勇壯な内容を表したものもあるが（さうして美事に表はされてはゐるが）、それにしてもやはり女性的であることに變りはない。私は別にそれが、缺點であると云つてゐるのではないがとにかく否むことの出來ない特長だと云つてゐるに過ぎないのである。

五、このやうに殆ど全部母音の含まれてゐる女性的な文字を以て表現するに適した日本語が、それ自身女性的である故か或は國民性それ自身がいゝ意味でも惡い意味でも女性的であるためか、どうか私は知らぬが、とにかく、日本語の中には無暗に外國語がそのまゝの形で侵入して來る傾向が非常に顯著である。西洋語にも外國語が侵入するけれども、その侵入の場合には殆ど常に必ずその國語的な形態に一應變化せしめられてから侵入を許されるのである。殊にそれが顯著なのは英語であらう。英語は外國人の固有名詞でもみな一應英語的な綴字法と發音法とに叩き直されて後に入國を許可せられる。フランス語はどうか知らぬが、ドイツ語の方がその點に於いては遙に謙虛であり素直である。英語は英國民のやうに傲岸で見識張つてゐる。そのくせ、英語はドイツ語とフランス語との混血兒のやうな言語であるのだが……。

日本語の中に外國語が無暗にナマの形で侵入し易い原因の最大なる一つは、假名の性格にあると思ふ。假名は標音文字として不完全なるものであるに拘らず、妙に柔軟性があつて、外國語をそのまゝ鵜呑みにする能力にかけては頗る長じ過ぎてゐるものがある。バットだのチェリーだのと云ふ外國の名稱をして傲慢に跋扈させ、今更

慌てなければならゐいのは、假名があまりに融通が利き過ぎる文字であるからであると云ふことは何人も承認しないわけに行かないであらう。現に支那文字は假名ほど融通が利かないから、「サイダー」は「汽水」と譯され、「エレベーター」は「電梯」に、「バター」は「黄油」に譯されて流通してゐるが、日本語では悉く原語のまゝで流通して了つた。假名文字運動者やローマ字運動家たちが躍起となつて「リュックサック」を「背負袋」にしようとし、「パラシウト」を「飛び降り傘」に改めようとしてゐるけれども、抑々日本語の中にこのやうに無節操に外國語が流入して來る責任の大半が、彼等の自慢にし賴みにしてゐる假名文字それ自身にあると云ふことは彼等は頓と氣付いてゐない。これ（精神分析學的に解釋を下すならば）彼等の國民的自大觀念（ナルチスムス）による明盲症に外ならないのである。

×

以上、私はあまりにも日本語及び假名文字の缺陷を數へ上げるに熱心であり過ぎたと人々は考へられるかも知れないが、もし讀者諸君の內に一人でもさう云ふ感じを持つた人があるならば、それはその人が民族的偏愛感情のために心理的明盲症に罹つて盲點になつてゐるところを、私が分析の力に依つてその盲點を除き得てゐるが故に事情をありのまゝに見ることが出來、その長短兩所を率直に認識するを得てゐるの結果に過ぎないと云ふことを私は主張し得るのである。私は自分が日本人であると云ふ意識を嘗て失つたことはないし、日本及び日本文化の現在及び將來に對して所謂自稱愛國者に勝るとも劣らぬ熱意を有するものであることを誓言し得る。

眞に自國の文化を憂ふるものは、その現在及び將來に對しての偏愛的明盲症を醫し、健全なる認識眼を養つてかゝらなければならない。私は豫々、日本文化人の性格的缺陷が、快樂觀念への逃避的陶醉傾向と、劣等感を抑壓してこれを妄想的優越感に置換へるトリックに長じ過ぎてゐる二點にあると信じてゐるものであり、それに就いては近頃の拙著『世界人と日本人』の中にも實例を擧げて詳しく說いておいたのである。「假名」の名稱を廢してこれを「國字」に改めようとする如きは、劣等感を抑壓してこれを他愛もなき優越感に置換へてその快樂觀念に自己欺慢的に陶醉しようとする病的傾向の最も顯著なる最も憂ふべき、最も有害なる顯現の一つであると信ずるが故に、私は敢てこの一文を草するを禁ずることが出來なかつたのである。

知らざるを知らずとせよ、これ知れるなりと云ふ逆說的命題が眞理であるならば、劣れるを劣れりとせよ、これ優れるなりと云ふ逆說的命題も亦、眞理でなければならない。たゞ名稱を改めることによつて、劣れるを優れりと妄想して涼しい顏をしてゐる如きは、これ耳を掩ふて鈴を盜むの類であつて、凡そ文化人ともあらうものが自己のこのやうな心理的トリックを分析自覺するの能力を缺き國民文化の將來を誤らしめんとする如きは、大政翼賛に協はざるものと云ふべきである。愚劣にして無根據なる假名國字改稱問題の速に撤回せられむことを希望してやまざるものである。

「假」は支那では「僞」の意に用ゐられてゐるから「假名」は「僞字」の意に解せられる危險があると山本氏は云ふ。併しそれは同形文字に對する日支用法の別を意味するに過ぎぬ。これは我の方の習慣的用法であるとて、押通せばよいではないか。何故にそのやうに

先方に屈從迎合しなければならぬのか（完）

講習會例會

一月例會は、毎年の例の如く、第二月曜日（十三日）夜、研究所で催された。

フロイドの『自我とエス』第二章「自我とエス」を精讀した。この章は自我成生の過程を考究したもので、身體的自我が心理界に投出せられて精神的自我となるに當り、內外からの刺戟とその感覺が如何に意識化せられ、組織化せられるかと云ふことを種々に考へてゐる。また自我とエスとの關係に就いては、フロイドはかう云つてゐる。「個人は認識もせられず意識せられざる心理的エスである。このエスの表面に自我が位置を占め、この自我は知覺區劃からその核として發達したものである。この考へ方を圖解的にして見れば、自我にエスの全體を被覆せずして、却つて知覺區劃がその表面を構成してゐる程度まで被覆してゐるのである。」と。

精讀後は、新潟縣の特別誌友谷內正夫氏寄贈の小豆と麴町區の特別誌友川手雄氏寄贈の砂糖とを以て作つたお汁粉、及び當夜初出席の豐田雄三郎氏寄贈の洋菓子、平野直人氏寄贈の名果國光、小野田幸雄氏寄贈の干柿など、澤山の御馳走が出て、誠に樂しく種々の分析的題目を語り合つた。平野直人氏は川柳や江戸小咄の興味ある二三を朗讀紹介せられた。

出席者は、右言及諸氏の他に小林一、宮本縣、瓶子喜巳、馬場由子、山口裕康、高木統他郎、長尾忠、大槻氏夫妻の諸氏であつた。高橋鐵氏からはわざ〳〵缺席の電報を頂いた。

研究所だより

▲大槻氏は特別誌友川手雄氏の案内にて昨年末廿七日から廿九日まで湯河原溫泉に悠遊せられ一ヶ年の疲勞を醫せられた。

▲福井縣の特別誌友松村誠一氏は先頃上京の機會に、一月八日研究所を來訪せられた。

▲一月度研究會例會は會場側の都合により第四月曜（廿七日）に催されることゝなつた。フロイド賞贈與式もその節に催される。

▲大槻氏著『新體制と心理經濟』出版の件は先號册子に豫報せられたが、題を『經濟心理と心理經濟』と改めて、近く岡倉書房から出版せられる筈。

編輯後記

本號は册子として第十八册目である。

合本第八卷（昭和十五年度）は製本出來いたしてをりますから御注文を待ちます。定價四圓送料なし。

特別誌友にて誌代前金切れの方には引續き拂込み下さるやう願上げます。

昭和十三年六月十日第三種郵便物認可
昭和十 年一月廿五日印刷
昭和十六年二月一日發行
（月刊）册子　定價　金十錢
東京市本郷區駒込動坂町三二七
編輯兼發行人　大槻憲二
東京市板橋區板橋町三ノ六十四
印刷所　帝都印刷株式會社
東京市本郷區駒込動坂町三二七
發行所　東京精神分析學研究所
振替口東京七八八一七番